Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

291
0279n
00219007

小牧實繁先生

小川茂樹著

日本群島

小川琢治

291
0224n
国立国会図書館
NDLCS
219007

291
O279n

日本教育史

国立国会
25.12.4
図書館

219007

序

地質學者としての亡父が半生の心力を傾けたのは日本群島地質構造論であつた。明治二十九年東京帝國大學理科地質學科を卒業し農商務省地質調査所に技師の職を奉じ、明治四十一年京都大學に轉ずるまで國内及び外地の繁忙を極めた地質調査旅行の隙に日本群島地質構造論（明治三十二年六月――三十五年一月）百萬分一大日本帝國地質圖說明書（明治三十三年六月）西南日本地質構造概觀（三十九年）西南日本地質構造論（四十年二――四月）等の長論考を陸續として發表した。この動機と經緯については自敍傳である一地理學者の生涯に詳述されてゐる。

理科出身の父が一轉して明治四十一年五月京都帝國大學文學科の地理學講座を擔當することとなつてから、かつて地質學者として研究の對象としてゐた我が日本群島をば地理學者の立場で研究しようとし、特殊講義の題目として日本群島を選び大正十年理學部地質學教室を創設するまで再三講壇に登せた。日本群島を地誌として講述するに際して父は如何なる態度をもつて臨んだかは、幸に殘つてゐる當時の講義のノートの緒言に

一地方の地理學的記載に當り目的とすべきは、單に山嶽河流都邑氣候生物住民産業交通に關して箇箇の材料を列擧するに非ずして、其の由來する所以を究め、その相互に關係影響する所を明にするを期せざる可らず。地貌を論ずるに當り、山嶽の高度を示し地質を記するの必要なるは勿論なるも、此等の自然的因子が地貌を組成する肢節として如何なる役割(ロール)を表はすやを明にするなくんば、地形圖上に數字を索め地質圖上に塗色を檢するによりて知る以上に何等の補する所なからん。

山嶽の地理上の意義は決して此の如き單純にして孤立せるものに非ずして、其氣候交通等の分界として特殊の意義を有するものなれば、此等の點を明かにせざれば山嶽の地理學的記載とは看做す可らず。人相をいふに面貌鼻目の色形狀を擧ぐるの外に、其温容玉の如しとか、癇癖ありとか、苦味走るとかいへば初めて其人を髣髴せしめ得る如く、地貌の特色にも其全體としての印象を捕捉するに非ざれば其面目を躍如たらしむること能はざるなり。人類の土地より被むる影響は此の如き地貌の特色によること頗る多かるべし。

と述べられてゐることによつて大體察知せられる樣に日本群島の地誌學的研究を目指したものであつた。この講義は第一章位置及び廣袤、第二章沿海、第五章地質及び地質構造、第六章氣候、第七章植物・動物などの要項を二百五十字詰原稿紙二百餘頁に認めたのが殘存し、第五章地質構造を論じたものがその重な部分を占めてゐる。この草稿は專門の學生に講じる講義の概要を極めて簡潔に記したもので、未整理のまゝに止つてゐる。

これに次いで退職の期を前にした昭和二三年の交に起されたと思はれる日本群島總論の草稿があり、これが今公けにしようとする總論の部分である。大學教授停年退職を數年のうちに控えて、積年の研究の結果を體系化しようとして地理學叢書の刊行を計劃し、その第一卷として日本群島總論を執筆したのである。その目錄によると地理的位置、近海、海岸、領土、地勢、氣候、生物、住民、交通、産業、都邑の十一章から成る筈であつたらしいが、第一章から第五章地勢のうち地理的景觀・地理區劃を論じた部分まで出來上つたゞけであつた。しかしこの方は出版を目標として書き下され、圖版圖表の指示も書き込まれてゐるので、今これを本書の第一部として公刊することとした。

恰も當時は我が帝國が英米の東亞侵略外交の重壓の下に明治以來漸く築き上げた東亞大陸上の足場を一つ一つ失ひつゝあり、また世界貿易上に於ても非常な妨害を被りつゝあつた。父はこの危機を自覺しかつこれを打開するために、世界に於ける帝國の位置について正確なる地理的智識を國民に與へ、その上に國家百年の長計の樹立されんことを念願した。これがこの日本群島を首篇とする世界地誌を包含する厖大な地理學叢書を企劃した直接の動機であつたらしい。

この目的のために父はこの書に於て出來るだけ地理的知識を大衆化しようと試みたのであるが、元來學術的探求慾の强烈であつた餘り、その成果を秩序立つて判り易く說明することの不得手であつた

父にとつては、これは相當骨の折れる仕事であつた。しかし何時になく父は喜んでこの仕事に精神を傾注したらしく、草稿の成るに從つて當時京都大學史學科在學中の自分に示して、その通俗化の程度に關して意見を求められたことを今も記憶してゐる。

この樣に非常な意氣込みをもつて起稿された日本群島が今見られる通り間もなく中途で挫折して仕舞つた。しかしこの事業は形式的には中絶したけれども、實質的には別の形式で續けられた。昭和四年十月から新光社の日本地理風俗大系が刊行されるに當つて、父はその編輯顧問を依賴されたので、各卷の卷頭に地方の總說及び地勢概說を寄稿することとなつた。この地理風俗大系の原稿は日本群島の地方誌を通俗化しようとしたものであつて、前の日本群島總論と同じ精神をもつて貫かれてゐるのである。そこでこれ等の原稿に、父の大正四年の執筆にかゝる「近畿地方の土地と住民」、（京都府教育會刊行、後に「人文地理學研究」に收められた）十三年地球に寄稿した「地文及び地理學上より見たる九州西北部」「地理教材としての地形圖京都近傍」「同大阪近傍」などを併せて第二部方志を形成した。

以上のほか日本地理風俗大系十五卷總論の部の父の寄稿をとつて卷頭に置き、昭和十一年地理教育誌上に寄せた「大平洋上に於ける日本帝國の位置」をば結論として、更に明治四十四年七月日本歴史地理學會編日本海上史論中の日本群島をば附錄としてこの一卷を編輯した。後者は明治四十二年同會に於て試みた父の講演の速記であつて、父の苦心作成した百萬分一大日本帝國地質圖を掲げての講話である。父の晩年の圓熟した日本群島論に對して早期のそれを代表するものとして採錄して置いた。

生前「支那歴史地理研究」及び「續支那歴史地理研究」を出版して緣故の深い弘文堂主八坂淺太郎氏から遺稿の出版を求められたので取り敢へずこれを一卷として世に送ることとした。遺稿出版の計劃をいたく喜び、その公刊の日を待ちわびてゐた母は亡父の三回忌に入洛中病を得て、本書を手にとつて見るに及ばずして世を去られ、亡父の三回忌追善のために捧げられる筈であつた本書が亡父・母の二靈位に獻じられることとなつたのは遺憾の極みである。

なほ本書の成るに當つて多忙の暇を割いて製圖の任に當られた地圖研究會の小野三正氏の好意に對して厚く感謝の意を表したい。

昭和十九年六月二十日

小川茂樹

日本群島目次

總論……一
序說……三
日本帝國の領域　海國としての日英の類似と對照　大陸から日本への地文狀態の漸移　太平洋と日本
第一章　位置……一三
四つの事實とその意義……一三
地理的位置の歷史的變遷……一七
第二章　近海……二二
太平洋の深海地帶……二二
群島周圍の淺海の意義……二四
海流及びその及ぼす影響……二七
潮汐……二八
第三章　領土……二四
嶋嶼としての領土の性質……二四
面積と人口……二六

目次

第四章　海岸……四三
海岸線發達の意義……四三
肢節……四四
波浪の浸蝕作用……四四
平定作用と海岸の型式……四五
本州の海岸線……四九
四國九州の海岸線……五二
北海道樺太の海岸線……五四
臺灣の海岸線……五四
朝鮮半島の海岸線……五五
第五章　地勢……五七
地理的景觀……五七
日本群島の地理的區劃……五九
三區劃の地勢的特色……六一
方志……六四
第一章　關東地方……六七
總說……六九
區域　名稱　中央の位置　平衍なる地勢　三面の山地　東邊と南邊の海岸の對照……六九

關東平野の地勢と地質構造……七五
成因　鮮新世の堆積　洪積世以後の變動……七五
大東京……七八
地理上の位置　交通幹線の集注と東京　保健上の問題　震害と火災　大東京出現に際して……七八
房總地方の人文地理……八五
武家政治の故郷　沿岸海上の交通……八五
第二章　東北地方（關東地方北部を含む）……八八
概說……八八
地文上の七大特色……八九
地勢の相違と風土の變化　地質構造上の特徴　兩海岸氣候の對照……八九
人文上の特色……九二
馬・米・繭・金・鐵と武家政治　東北文化の由來と東北人の氣質……九二
戰場としての東北地方……九六
戰略上の地區　關東北部と利根川　平將門の亂　鎌倉幕府の沒落後　家康と宇都宮　關東北部と碓氷、清水峠　要衝を占むる白河關　要害厚樫山　平泉と衣川　兩羽の盆地と沿岸……九六
第三章　東海地方……一〇八
總說……一〇八
區域　地勢概觀　地理的意義
海岸線……一一〇

海岸線の五型式　伊豆半島の海岸　駿河灣の海岸　御前崎以西の海岸　伊勢志摩の海岸……一二七
地體構造……
地質の概觀　隆起沈降とその變遷　ナウマン說と原田說　ナウマン原田兩說の批判　地變を證明する史實　地帶構造上の特色
山嶽溪谷及び平地……一二九
富士山とその周圍　伊豆半島の火山　赤石山系と富士川溪谷　安部川と大井川溪谷　天龍川溪谷と三方ヶ原　豐川と矢作川溪谷　濃美平野と木曾川　鈴鹿山脈と養老山脈　櫛田川と宮川溪谷
氣　候……一四一
氣溫　降水量　氣候とその影響
第四章　中央及び北陸地方……一四八
總　說……一四八
區域　中央地方の特色　北陸地方の特色　海岸線の特色　氣象その他の特色
甲斐地方の戰略地理……一五四
戰略上から見た甲斐國　戰略上中間地帶の意義　甲府盆地の戰略地理學的意義
第五章　近畿地方……一六〇
總　說……一六〇
行政區劃　地理的位置の特色　海陸輪廓の特色　交通上より見たる淀川溪谷の意義　交通上より見たる琵琶湖盆地の意義　歷史地理上の丹波高原　紀伊半島の地文の人文に及した影響
地理的特徵……一六七
鐵道交通史より見た近畿地方　近畿地方の四大地形區……一七一
紀伊山系……一七一
地質構造　高野山塊　紀南山地　大峰山と大臺ヶ原山　熊野海岸山地　志摩山地とその海岸
畿內盆地と江賀高原……一七七
總說　江賀高原の特性　高見山塊と布引山塊　伊賀盆地とその西方丘陵　室生火山群　鈴鹿山塊
水口丘陵地　甲樂山地　近江盆地　山城盆地　大和盆地　二上火山の地質構造　生駒・葛城・和泉山脈　攝河泉平野
丹波高原の地形と地質……一九三
總說　比良と比叡　若丹山塊　若狹海岸　攝丹山地　舞鶴丘陵地　丹後半島と丹後地震
氣　候……二〇〇
南中北三區の雨量及び氣溫の對照　氣候と森林　水力の利用
居住狀態……二〇七
人口密度　村落　垣內式村落　聚村　農家の宅地と耕地　農村漁村の風俗及び習慣　都邑と交通
京阪神地方の地勢……二一五
地理的位置　海岸線の特色　地壘　洪積層臺地　沖積扇狀地と洪涵平地
京　都　市……二一九
京都平地の地貌　過去の首都としての奈良と京都　京都市の成立及び發展
大　阪　市……二二四
地理的位置　地形の變化と聚落の遷移　河口港としての大阪の成立　大阪市の地盤

第六章 中國地方……二三一
總說……二三一
區域　中國の地理的位置
地文上の特色……二三三
海岸線　中國山系の地質構造　準平原山地　坼裂構造と溪谷　陰陽兩斜面と氣象
人文上の特色……二三八
地形と關連する產業の發達　鑛業の過去と現在　大陸交通　交通地理上の瀨戸內海と山陰道　軍事
上から見た兩道　都市の發達
第七章 四國地方……二四八
總說……二四八
位置と行政區劃　四國の四面性　海岸線の特徵　瀨戸內海諸島とその風景　山嶽溪谷の風景　四國山系の氣候に及ぼす影響　地文と人文との關係　經濟生活に及ぼす地文的影響　臨海都邑の景觀
地質構造……二五八
帶狀構造の第一帶　帶狀構造の第二帶　第三帶と第四帶　化石　火成岩　構造線
海岸線……二六八
讃岐の東部海岸　讃岐の西部海岸　伊豫北岸　伊豫西面のリヤス式海岸　土佐の海岸　阿波の海岸
地勢……二八一
淡路島及び瀨戸內海諸島　四國內側と外側の地勢の對照　讃岐山脈　伊豫北部と高縄半島　結晶片岩帶の山嶽　古生層帶の山嶽　東部地塊の諸山嶽　西部地塊の山嶽

第八章 九州地方……二九八
總說……二九八
行政區劃
地文上の特色……二九七
地理的位置　海岸線と陸棚の發達　河川平地の發達　火山と鑛山
人文上の特色……二九九
大陸の影響　大陸文物の輸入と開港場　炭鑛業の發展
海岸……三〇二
北西海岸……三〇三
關門海峽　筑豐の北岸　唐津灣と肥前の北岸　伊萬里灣　肥前の西岸　有明海の沿岸
南東海岸……三〇八
南九州式海岸　薩摩大隅兩半島　豐前東岸と國東半島　別府灣　豐後水道の海岸と日向の海岸　大隅半島の東岸
九州西北部の地文と人文……三一二
地理的位置　海岸と港灣　地貌と地質構造
第九章 北海道及樺太……三一九
區域　地理的位置　形狀の特色　海流の影響　地勢　火山作用　沼澤及びツンドラ地帶　特異なる生物界
第十章 臺灣……三三五

行政區劃　地理的位置　南支那海上交通の關鍵　氣候の特色　海岸線及び地勢の單純性　住民の分布

第十一章　朝鮮……三三一

行政的區劃　地理的特徴　朝鮮の廣狹二義

海岸……三三三

概說　東岸の奇勝　南邊の海岸　西邊の海岸

地勢……三三六

北部の特徴　中部の特徴　南部の特徴

地質構造……三三九

大部分を占める古期岩層　豐富なる鑛床

氣候……三四一

大陸的氣候　南北氣象の差

人文的特徴……三四四

半島と文化　民族の移動　半島に及ぼした勢力

結論……三四七

太平洋に於ける日本帝國の位置……三四七

日本群島……三五七

日本群島の名稱及其範圍……三五七

日本の近海の深さ……三五八

日本の海岸の特色及びその地質との關係……三五九

日本の地勢及び地質構造……三六一

樺太山系と支那山系……三六四

日本崑崙……三六五

日本の地勢と陸上交通との關係……三六七

日本の世界的位置……三六九

總論

序說

日本帝國の領域

我が日本帝國の領土は本州・四國・九州・北海道・樺太・臺灣の六大島、千島・豆南・薩南の諸列島と朝鮮半島から成り、東亜の大陸邊緣に沿ひ瓔珞を曳き廻した如くに排列して、太平洋上の一奇觀を呈してゐる。この西洋地理家のいはゆる花綵列島 Festoon の形狀は、太平洋の北邊から西邊に沿ひ發達した特色ではあるが、我が千島列島より北に連るアリューシアン諸島でも、臺灣の南に起つて赤道地方に及ぶ馬來諸島でも、その位置は何れも北または南に偏在して、氣候の中庸を得ない爲めに、寒暑序ある溫帶地方を占める我が領土に比して、何れも人類の住處としての良好なる條件を缺いてゐる。

我が群島が東北端の占守島から、西南端の臺灣鷲鸞鼻に至る約五千キロの延長を有し、しかも本州以下四大島がその中央部を占めることは、特に氣候の關係上に都合のよい條件である。朝鮮半島が氷

雪に蔽はれたカムチャッカ半島や炎熱に惱まされる印度支那半島との中間に在つて、兩者と比較にならぬ好位置を占めるのも、また頗る注意に値する。

東亞地域は歐亞大陸の東邊に發達した季節風地方に屬し、日本と反對の西歐地域に比して氣候の嚴酷なるを免れぬ不利があるが、我が帝國はその海上に在るために著しく緩和され、寒暑の激變が起つても、寧ろ却つて住民の心身を引き緊ることになり、特殊の文化はこの關係から障礙を被るよりは、その發育を助長する方に働くのである。

我が領域の面積は、近年加はつた新領土と委任統治地を合せても僅に七十萬方キロ弱にして、地球表面の陸地面積（約一億四千九百萬方キロ）に對して〇、五パーセントにも達しないし、緯度二〇度と六〇度の間に位する陸地に對しても、同緯度の地方の面積は同じく一パーセントには達しない。故に面積のみから觀れば、渾球上には彈丸黑子の如き蕞爾たる一點に過ぎないといへるかも知れぬ。單に面積の大小のみを考ふれば、日本が世界列强の間に雄を稱し得る理由はない筈である。

しかるによく今日の國際上の地位を贏ち得たのは、我が占據する位置がしからしめたもので、不毛の北亞を除いたアジヤ東邊の全面に亙り、その海上に廣い繩張りを持ち、この地域の全人口の六分一許りの住民がこれを固めてゐるからで、剛健敢爲の大和民族の血脈の續く限りは、國運の前途に一點の陰翳をも認めるやうな危險はない。

海國としての日・英の類似と對照

歐亞大陸の兩邊の大屬島たる日本と英國とは常に類型の好例とされてゐるが、その第一は大陸に接近した大きな島嶼で、地文上にも人文上にも大陸と離れ難い關係を有することに在る。この關係は文化の發達に重要なるものがある。大陸文化の波及は容易であつて、しかも大陸に起る如き民族及び國家間の爭鬪の災厄は滅多に來ないといふ、海水面の隔離から享ける利益は莫大である。

地文上からいへば兩者共に陸棚上に在つて、海水面が二〇〇メートル以上下降すれば全く大陸の一部となるべきで、洪積世以後に至り沿海平地の沒溺により生じたのは共に揆を一にする。しかれども東西反對の側に在ることは、氣流の循環系統に重大なる相違を起し、かれに在つては北緯四〇度以北の大西洋上から來る卓越西風を受け、四時常に氣候狀態は海の影響に支配さるゝに對し、これに在つては夏は大陸內部の低氣壓地域に向ふ氣流が起り、冬はその高氣壓となる爲めに、陸內から來る寒風に襲はれるといふ不利を免れぬ。この相違は緯度の差異から生ずる影響よりも遙に大きい。但し寒暑の對照の大なることは、一面から觀れば良好の氣候といひ難いのは勿論であるが、三千餘年來これに順應した我が國民の體力は鍛錬されて、北はオホーツク海上から滿洲內地の酷寒に耐へ、南はマレイ諸島や印度の如き、歐米人の永住を妨げる地方にも活動し得せしめたのである。

大陸から日本への地文狀態の漸移

曠漠無邊の滿蒙地方から、遼河鴨綠江を渡り朝鮮に入るものは、釜山までの鐵道沿線で旅客の目に映ずる半島西岸の地勢に大陸と共通なる特色なほ多く、廣濶の原野の間に緩漫なる河水の蛇行するのを觀るのである。その相違は滿蒙の草原の天に連る黃土質の土壤が見えないで、沙漠邊緣から遠ざかつたことを覺えるに過ぎぬ。しかるに半島の東南端釜山に達する前に、秋風嶺を越えてからの形勢は一變して、V字形に深く穿たれた溪谷に水勢の急なる河道を通じ、地平線上に遙に遠方の翠巒を望む樣なる廣々とした感じは全く消えて、窮屈なる山間を縫ひつゝ、毎秒ごとに變化する地形の應接に暇なきに駭くのである。

關釜連絡船に搭乘して、對馬海峽を渡り關門海峽に入らんとするに及べば、特に冬季の旅行であるとすれば、寸靑も眼に入らぬ大陸を離れて、九州北岸の山腹から麓の平地にかけて、靑々とした麥や蔬菜の生育する溫か味に、筆舌に盡しがたき快感を否むことは出來ぬ。

この地形と風景の移り變る仕方は、大陸と日本群島との間に地文形態が漸移する結果で、根本的には同じ東亞地文域の一部を成し、島嶼なるが故に、對照の程度の半島から群島へかけて、次第に緩和される事實が現はれてゐるのである。

太平洋と日本

更にまた南洋委任統治地に向ふ汽船上の客となり、一直南に指して太平洋上を航行するものゝ眼界に入るところは如何。東京灣を出で遠く天際に聳ゆる富士山を望み、近く相模灣に潮を噴く鯨の如き姿を露はして煙を吐く大島を見ながら南進すれば、濃藍色の黑潮の晴空と相襯映する大海原は無限に展開し、富士山と見まがふ八丈島の御原山が漸く地平線に現はれる。これから南では巍然たる靑ヶ島に續いて銃劍（バイヨネーズ）と呼ばれた峨峨たる巉岩が現はれ、噴火の名殘りを尙ほ殷紅い火山灰の積層に留めた南鳥島が見える。更に南に進んで小笠原島に達すれば、八丈島の海濱に認めた黑松の林は全く姿を消し、內地に見慣れぬ草木鬱蒼と生ひ茂り、バナナの房を垂れた間に太洋民族の一種を代表するカナカ種のハンガローがある風景は、最早や熱帶地方の孤島を距るの遠からざるを感ぜしむるに足る。硫黃島に至れば八丈島附近の海上に起した濕潤の感覺は何處へか失せて、熱帶性の驟雨に見舞はるゝ外に降雨に乏しく、タコノキの梢を傳ふ雨滴を幹から引いて甕に貯へた飲料水に喉を潤ほし渴を療する。中硫黃島の隆起海岸には小笠原島二見港內に生存すると同じ珊瑚が叢立してゐる奇觀は、倍々熱帶地方の島嶼に近似する特殊の風景である。北回歸線を過ぎてマリヤナ諸島以南に至れば、地盤は全く珊瑚蟲の築き上げた岩礁より成り、椰子バナナのその上に林を造つた熱帶洋上の孤島のみとなる。

以上一瞥したところを約言すれば、我が帝國は最大の大陸と大洋との接觸する地帶に本據を置き、その周邊を圍むと同時に、太洋の中へも一肢を延ばし、北半球の赤道以北の海上に廣大なる網を張つた形狀を有するものである。この點で延長の短かい英國と最も大なる對照を呈してゐる。故に兩者の間に位置の關係に類似はあるも、寧ろ對照の方が遙に重要なるは地理上否む可らざる事實である。

日本國民の鄉土

わが鄉土としての群島及び半島の有する價値が、大陸に或は太洋に向つて進出し得る特長に在ることはこの如く、我が三千餘年の歷史は國史の發展を誘掖促進した地理的因子の樣々に働いた過程を雄辯に語つてゐる。文化民族の搖籃地を觀るものは、希臘羅馬の如く比較的に狹小なる地區において集結した有能有力の民族が起り、次第にその勢力の範圍を擴大することに氣付く筈である。徒らに尨大なる締りのない地方は、必しも纏りのついた大國家が成立する第一條件とならぬ。支那の如き廣大なる地域に、周秦の統一した政府が出來たのは、涇渭洛三川の盆地たる陝西地方から侵入した民族が、多年を經て漸く鞏固なる國家組織を整へた上で大平野に進出した譯で、同じく北方から來た北魏拓跋氏や蒙古人の如きは適當なる鄉土を、また固有の文化を有せぬ民族の侵入にして、一時の榮華を樂むのみで永久性を持つてゐない。支那の歷史上に異民族の國家が走馬燈の如く興亡を繰り返す理由の一は、この點にある。

我が鄉土たる群島は地勢の起伏に富み、海岸の曲屈の多い點で希臘半島に伯仲し、しかも面積はその三倍以上を有し、特に最も海岸線の出入の多い九州島を以て、半島及び黃海に面するのは交通に便なる點においても敢て多く遜色を見ないのである。大陸に榮えた文化が海を渡つて日本國內に輸入されることの容易であつて、地中海の東岸及び東南岸に興つた文物の入り易かつた希臘と共通なる徑路を辿つたのはこの便宜に由つた。唯一の不利は英國と同じく大洋航行の自由ならぬ時代には、大陸の邊緣に在る爲めに、文化の波動が後れて到着する外なかつたことである。しかしこの代りに、一度群島に到來した文物は、大陸の如く戰亂により破壞される危險を免れ、木造古建築すら奈良の諸寺の如く千餘年の今日まで保存され、文化の潮流に斷絕が起らなかつたといふ特長を誇り得るのである。

太平洋彼岸の北米西部、南洋諸島及び濠洲の諸地方が、六七十年來天產物の開發により經濟上に長足の進步を遂げて、我が群島は大陸邊緣に僻在する不利なる立場から一轉して、物貨集散の市場たる特權を有する好位置に轉換した。近世西洋の海上貿易の影響から、自から隔離して國を鎖し、退嬰生活が久しくして、この氣運に乘ずるを得たのは僅に半世紀を出でぬに拘はらず、英米獨佛と雁行する今日の國運の隆盛に達したのはこの關係に在る。

現在我が國內にもまた外國にも常に聞くのは我が民族の膨脹が過剩人口の增加となることで、この

半世紀間に殆ど二倍に達せんとし、この底至するところを知らぬ過剰により生ずる不利なる前途について、悲觀せんとするものがないではない。これも一應は尤ではあるが、農事改良の普及により米の豐作が續けば、その過剰による價格の暴落を憂へねばならぬ狀態からいへば、輸入を仰がずに米食生活の繼續し得るは可能である。蠶絲と羊毛、棉花との輸出入の均衡を調節して行けば、衣服の資料の需給もまた決して憂慮するほどの困難はない筈である。故に袖手坐食するものは別として、生業に勤勉なる國民にして、今日の不況時代を突破する忍耐力があれば、希望の輝く新らしい前途を打開することが決して難くはない。國民生活の安定を圖らんとする爲政者が、資本家階級の如き或る一部を曲庇する間違つた愚策を敢てしないならば、われ等は王朝時代の末期に見た如き墮落した世相の再現はこれを想像し得ない。

近來我が國民間には、從來の世界に於ける帝國の地位に對する認識の缺陷が、漸く明瞭となりつゝあるかに見えるが、われわれの置かれた直接の環境たる鄕土として、日本に對して果して同じ缺陷がなかつたかを回顧反省せねばならぬ。我が國の如く海面上に露出した山嶽地に於いては緩斜面が狹隘なるは數の免れ難いところなるは勿論であるが、濕潤なる海上から來る氣流に惠まれた氣候は、農業、及び水力の利用には好良なる條件で、また海上に漁撈する水產業もまだ發達の半途にあるといひ得る。これ等の產業の發達により衣食住の原料を獲る方法は多種多樣で、われわれに賦與された天地の一角を利用する先決問題として、以下に載せた事實を理會すれば、恐らくは徒らに、垣外から他人の家に咲いた花を美む陋態を學ぶまいと信ずる。

第一章　位　置

四つの事實とその意義

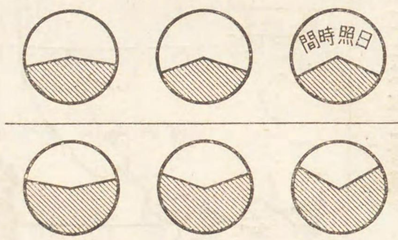
輿地圖を披いて日本群島の位置を地理的に考察すれば、直に左の四つの事實に注意する。

(一)北半球に在る島嶼の列で臺灣の西南端（大約北緯二二度）から千島の東北端（大約北緯五一度）まで延びてゐること

(二)その東南邊は太平洋に面し、西北邊は亞細亞洲の東部（東亞）の大陸を背にし、オホーツク海、東支那海（東海）を抱くこと

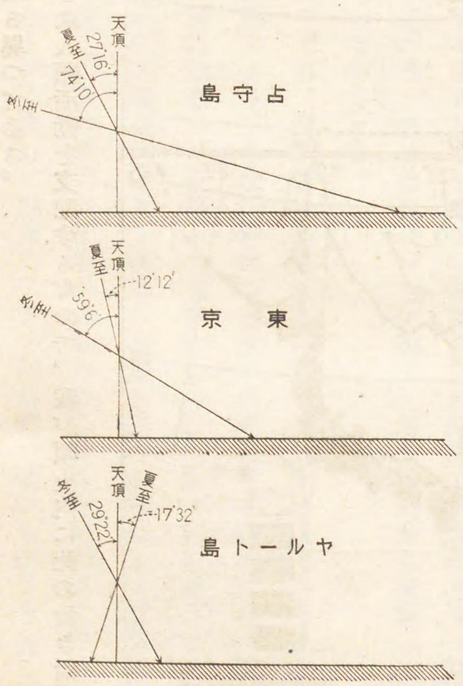
(三)二百米等深線の輪廓は千島・南薩・豆南の諸島を除いた大部分を含み、群島は殆んど東亞陸地の邊緣に廣がつた陸棚（又は海棚）の中に在ること

(四)大陸との距離が極めて近く、朝鮮海峽（下關釜山間）も臺灣海峽（基隆福州間）も共に二四〇粁（六十里）内外に過ぎずして、千島占守島及び樺太島の西岸はカムチヤツカ半島及び黑龍江口に極めて近いこと



第一圖　緯度の差による晝夜短長

此の第一の事實は臺灣の南部を除いては全部温帶に屬することを意味し、之に比較すべき著大なる島嶼の温帶に屬するものは歐洲の西邊の英國、濠洲東邊のニュージーランド、北米洲東邊のニューフワンドランドしかない。而して同時に注意されることは南端と東端との間の緯度の差殆んど三十度に達し、日光の射角が著しく異ることである。



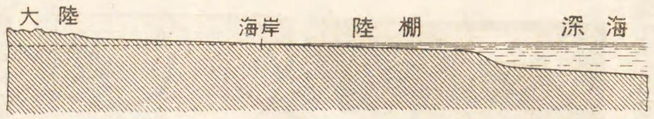
第二圖　緯度の差による日射角

我が委任統治に歸した南洋諸島に至つては盡く北回歸線内の熱帶に屬し、之をも併せて考ふれば、各處に於ける一年中の太陽の位置は下圖に示すが如き變化を呈し、之と共に晝

夜及び朝夕薄明の時間の長さも亦た頗る異つてゐる。

四季氣候の變化と晝夜時間の長短とは人類活動を支配するもので、我が領土内に此の如き對照の存在することは大に考慮せねばならぬ地理的事實である。之を無視して冬夏の休暇日數執務時間等を規定するのは現實を無視した亂暴といはねばならぬ。

第三圖　一月と七月の雨量分布



第四圖　陸棚の斷面圖

第二の事實は最も廣大なる亞洲東邊の温帶地域と更に廣大なる太平洋との間の防波堤の如き位置を占め、兩者の間に存在する地文的及び人文的對照の境界線たるを意味し、過去現在を通じた地變人事の窮りなき輪廻が起つた來由はこの陸海の遷移帶たる事實によつて正當に解釋される。

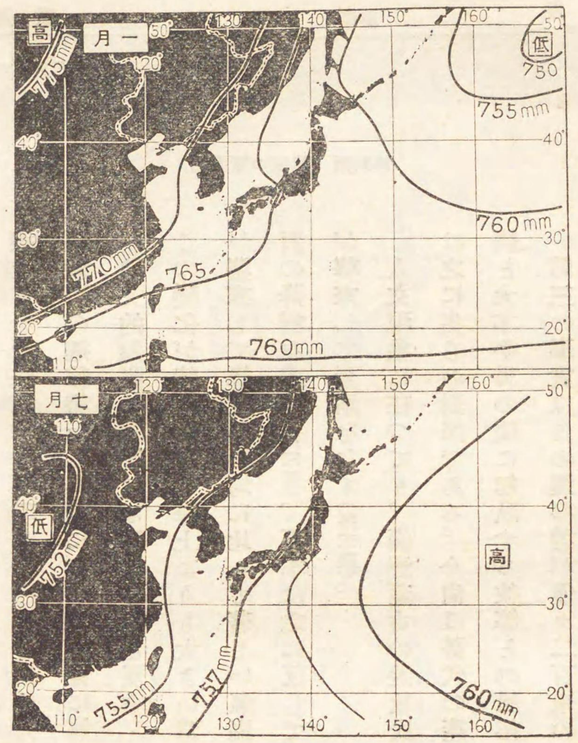
地文的對照の顯著なる例は冬季と夏季とに起る氣壓及び氣温の變化である。この變化が陸内に於て海上よりも大きい爲めに、冬季低温高壓の陸内から氣流が襲來して緯度の平均に比して著しい氣温の低開を促し、之に面する日本海斜面の降雪を起し(第三圖)、夏季は之に反して高温低壓の陸内から旋風(低氣壓)が襲來して豪雨をなす(第五圖)。

人文現象に在つても、滿洲蒙古の遊牧民と我が農民及び漁民との生活の差異は之に劣らぬ對照である。今尚ほ神代の產舍の名殘をすら留めた我が漁民の潔癖と犬羊牛馬の間に起臥する彼等との風俗の如きはその一例に過ぎぬ。

第三の事實はこの遷移帶が僅々二百米の地盤全體の隆起により直に大陸に續き得ることを意味し、洪積層中の化石に犀象の如く既に我が群島に絕滅した獸類が發見されることから推して陸續きであつた時代の遠からざるを知るに足

る。

陸棚とは海岸平地から海面下に連つた緩斜面で、處によつては、沈没した陸地の一部と看做される（第四圖）。瀬戸内海の和泉小豆島・九州長崎港外等の海底から發見される犀・蕉象等の齒牙は支那印度の洪積世の化石と略ぼ同一種で、當時は今の渤海灣及び東支那海に亙つて一圓に平地が續いてゐたと想はれる。但し此等の巨大なる陸棲獸類と一處に石器時代人類の遺物が發見されぬから、群島の先史時代住民は恐らく



第五圖　一月七月氣壓分布

は後れて出現したものであらう。

第四の事實は、我が群島の大陸から離れてはゐるが、その距離は順風に乘じて渡ることが出來るから、相互の交通の容易な事を意味し、東亞文化の舞臺に我々日本民族の曾て演じ又た現に演じつゝある役割の重要で往々歴史の趨向を左右することあるの當然なるを示してゐる。

支那が漢代に朝鮮半島北半を征服して玄菟・樂浪・帶方の三郡を置いた後三國の頃に至る間、即ち今から二千年程前に交通貿易の彼我に行はれたことは王莽の鑄造した貨泉が博多・久美濱（丹後）等に發掘されたので明瞭で、後漢末か三國曹魏の時代に使人が往來したことも魏志東夷傳倭人の項に記載されてゐる。

此の外に尚ほ考へねばならぬのは世界全體に對して占むる位置即ち世界的位置であつて、群島の位置が東亞に偏在する爲めに現在の歐米文化民族の本國と遠く隔ることである。

地理的位置の歴史的變遷

此の四つの事實は大古以來今日まで變らぬもので、此の日本群島の地理的位置の永久性は輿地圖上に容易に看取し得る所である。然れども人類活動の範圍は文化の向上と交通の發達に伴ひ擴大されるのが大勢であつて、地理的位置の意義即ち價値も亦た時代の遷移と共に增減し、國運の盛衰を伴ふは勿論である。故にこの永久性は絶對的でも除外例なしでもない。これを換言すれば歴史時代の異るに從ひその意義もまた異ることは地質時代の間に起つた大陸との關係の變遷と似通ふてゐるのである。

日本群島の地理的位置の意義は時代に從つて變化し、交通の頻繁を加へ範圍の廣くなるに從ひその價値が高まり、世界の海面に航路が縱横に交り陸面に鐵道が網目を張る現在に至つてその振幅の增大したことは、百年前に生れた寛政三藏（平山行藏、間宮林藏、近藤重藏）の如き當年の先覺者の決して夢想し能はなんだ所である。

此の變遷に比較すべき例は英國の場合である。歐亞大陸の西邊を占むる彼の島王國は西半球の全部と東半球の南部が第十五六世紀の探險により初めて知れるまでは世界の果てに偏在してゐた。英國地理學者マッキンダー氏が「二千餘年に亙りてブリテンは政治舞臺の邊緣に在つて、その中心に在らなんだ」といつた語は我が島帝國に移して通用する。

地中海岸の文化がその東邊から北邊に遷り、羅馬がその中心となつて、ユリウス・ケザルがガリア（古の佛國）を征伐するに及び、初めてアルビオン卽ち「白い國」（英國東南岸の白堊の斷崖の露はる土地）が拉典文化の曙光に照らされた。第十四世紀中葉以後マルコ・ポーロの忽必烈汗朝廷の外臣となつて傳へたジパング（日本國）を黃金の島とした說話が動機となつて新世界及び喜望峰航路が發見されて以後、英國は大西洋上の海國として次第に歐洲列國間に地步を占めた。

秦漢の咸陽（長安）洛陽を中心とする東亞文化の舞臺に對する我が群島の位置もケザル以前の英國の如く、儼然たる國家の存在は未だ十分彼には知られなんだ。我が土地と住民に關する稍〻具體的記載は三國曹魏の頃に至り朝鮮半島を經由して初めて支那に傳はり、我が國民の半島經略の如きも第四世紀末の高句麗好太王の碑文が最初の確乎たる文獻である。是より更に後るゝこと二百年に聖德太子攝政時代に遣隋使小野妹子の渡航は對等外交の途を開き、東方君子國としての島帝國の地位が認められた。

歐洲文化民族の東方交通はマルクス・アウレリウスの使者と稱するものが後漢桓帝の延熹三年（成務天皇の三十年、西曆一六〇年）に支那へ來たのが支那史乘最初の記載であつて、我が隋唐交通の頃には大食（アラビア）人の東西中繼ぎ貿易が盛んに行はれてゐた。

日本（ジパング）が黃金島として傳つて南歐航海者の渡來を促したのは、蒙古襲來の失敗を報じたマルコ・ポーロの旅行記が弘く讀まれた第十四世紀中葉以後である。此の報知が動機となつて葡人は第十五世紀末（西曆一四九七年）喜望峰を廻つて先づ航路を開き、終に天文十七年（西曆一五四八年）に豐前に來着し、東西の交通が初めて開けた。

然れども德川幕府が鎖國の方策をとるに至り、そのこれを拋棄するまで二百年間は僅かに平戶長崎のオランダ商館を通じて西方文化の細流が入つたのみで、嘉永六年北米合衆國ペルリの來着以後世界列國に騁馳する地步が漸次に占められた。圖南の雄志を懷いた國民の氣が幕府の鎖國政策に阻止されて久しくその時を得ずに二世紀を空過したのは惜しい。但し大西洋に比して太平洋は遙かに廣大で、

蒸氣機關の發明されるまでは空間の大きいことが交通の障礙となつて、時機未だ到らなんだことも事實である。故に英國が大西洋の海面を支配する地位を獲た無敵艦隊擊破（西紀一五八八年）に比較して更に光輝ある我海軍の對馬海峽の大捷利が三百年後れ、日本が二十年來初めて英國の西歐に於けると同一の地歩を東亞に占め得たのは半ば人爲的に左右された形跡はあるも、半ば天然の制限如何とも爲がたき所であつたと諦めねばならぬ。

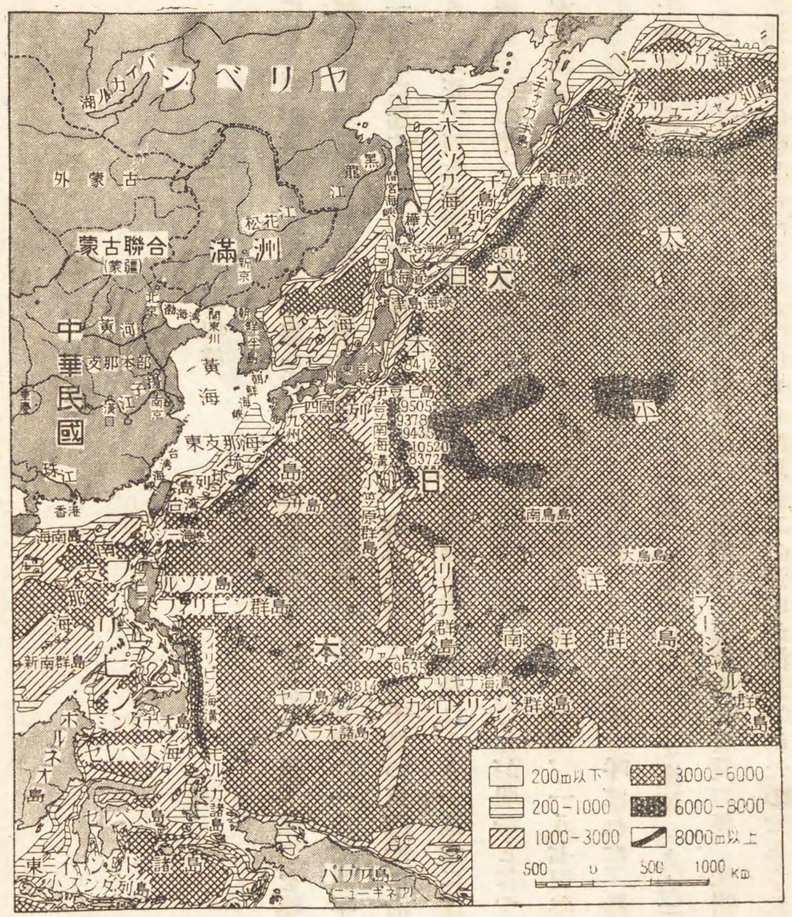
然れども過去を回顧するは現在を了解し未來を豫測する爲めの外は無用である。我々は東亞を中心としてその一邊に位置した時代の局限された眼界を超脱して全地球面を見渡すに非ざれば何等の了解も豫測も出來る筈はない。先づ己を知り次に彼を知る方法として、近い處から遠い處に進む順序に從ひ、我が群島の國土と住民との考察から我が全土に及ぼし、六大洲の各部をも歴觀するのが、現在に善處するに滿足せずして未來永遠に日本民族の發展せんとする大道であらうと信ずる。日々の新聞に報導さるゝ內外事件を讀み我々を包む空氣の沈鬱を感ずるものは獨り自分一人であるまい。

第二章　近　海

太平洋の深海地帶

輿地圖に就き我が群島の近海等深線をたどつて海底の凹凸を觀るに、最も注意を喚起するものは東邊の深海地帶である（第六圖）。此の海淵は北米合衆國探海船タスカロラ號の一八七四年の發見に係り最深八、五一四米に達するもので、東北アリウシアン諸島の南邊から千島の東南邊に沿ひ本洲の東邊に延びてゐる。大正十四年關東大地震後我が海軍水路部滿洲艦の測量により一萬米に達すると想はるゝ世界の最深處がその續きに當る房總半島の東々南約一六〇粁に在ることが明かとなつた。

この日本海淵 Japan Deeps は六千米を超ゆる深海床中最も廣きもので、一八七四年タスカロラ號の發見後久しく廣さと同時に最も深きものと認められてタスカロラ海床と呼ばれた。然るにその後南太平洋に九千米を超ゆるものが續々と發見され、一九二五年以後マリアナ海淵（九六三六米）フキリッピン海淵（一〇、八四三米）等が順次世界最深の名を得た。滿洲艦の發見の後、米國のラマポ號により再び此の深海床の續きに一〇、六〇〇米の世界第二の深處が測量されたのであつた。



第六圖　日本近海の深さ

此の事實たるや陸地中最大の面積を有する歐亞大陸と海洋中最大の面積を有する太平洋との境界に於て地殼の凹凸も亦た最大なることを意味する。

マリヤナ群島の東南邊に沿ふた深海床は我が近海に在る第二の深處（九、六三五米）を有し、カロライン群島の西部パラオ島の東邊に在るもの（八、一三七米）之に次ぎ、ヤップ島の南邊に在るもの（八、〇一〇米）、琉球と八重山諸島との間の南邊に沿ふたもの（七、三八三米）及び小笠原諸島の北に在るものは更に之に次ぐ。

此等の海淵中錘測の數最も多く、深海床の凹凸の狀態を窺ふに足るものは、マリアナ海溝のみである。この海溝は圖に示す如く起伏頗る變化に富み、是より推せば錘測少數なる場合も更に精密に測量するに非ざればその最深處の位置は勿論眞の凹凸が確かにならぬことが明かである。

沖繩群島の東南から臺灣の東に至る間の深海床も亦た錘測數の多く海底の凹凸の稍明確なる處である。東西二つに分れた六千米以上の海淵で、特にその前者は狹長な七千米以上の海溝をなした一帶を含み、その最深底は七四八一米に達する。是はフヰリッピン諸島の東岸に接した世界最深の海溝と看做されるものと共に、內側の第二列海溝の一つで、琉球海溝と呼ばれる。尙ほ此の外に六千米を超ゆる深海床は點々琉球海溝の東南に連り、又た之と孤立してその東にもある。

これ以外の太平洋西部の海底が概して四千乃至六千米の深さを有するに對し、此等の深海床は何れ

も細長く溝の如く窪んだ凹地を成してゐる。ジウス氏 E. Suess は弓狀の山脈に接して之に沿ふた溝狀の深海を前深（前面海淵）Fore-deep と呼んだ。此等の深海床は正にこの名に値するもので、これに沿ふて日本群島は恰も球を聯ねた瓔珞 Festoon を曳いた如く點綴する。北から第一の瓔珞たる千島諸島が西南に走り、ついで第二の瓔珞たる本土諸島が無數の峰巒の海面に突起した形狀をもつて起伏して、更に西南に延びて沖繩又は琉球といふ名そのものが示す第三の瓔珞を懸けて臺灣に連るのである。

群島周圍の淺海の意義

日本群島はこの三つの弓狀の島嶼の列をなし大陸の外側を圍んで、オホーツク・日本・東支那の三海を抱いてゐるのであるが、注意すべきはその何れも大洋に比して遙かに淺いことである。此の三つの海凹の中最も深いのは日本海で、東支那海は頗る淺く、前に述べた如く洪積世には陸地をなしてゐた。

三者の間の深さの差異は地盤の構造よりも寧ろ主として大陸側の地勢の影響によるべく、西藏高原の東北邊に發源する黃河は沙漠の邊緣に堆積する微細なる土（黃土）を流して北支那の大平野に擴がり、その末流が黃海に入り、朝鮮半島の大河流も亦た皆な西流して此に注ぐので厚い土砂の堆積を起したと想はれる。

オホーツク海には黑龍江が安泰山麓（アルタイ）から東流する大陸大河流の一つで、その上流には森林地も多いが沙漠の邊緣に發達した草原から微細な土砂を流出するから、樺太島の北邊の如きはその堆積により著しく淺くなつてゐる。ブラフトン、ラペルーズ、クルーゼンステルン等の第十八・九世紀間の航海者の多くが錘測の結果から推して樺太島と大陸との間に地峽が出來てゐるかとすら疑い、間宮林藏がその海峽たるを確かめた事實がシーボルドによつて歐洲に紹介されるまでは海峽の存在が明かでなかつた位である。

此の兩海凹の大河流を容るゝに反し日本海に入る大陸側の河流は何れも細流のみで稍著しきは豆滿江に過ぎぬ。故に土砂の運び込まれる量が非常に少く、海底の埋沒することが兩者の如く著しくないのは蓋し當然であらう。

日本海底の凹凸も亦た近年水路部大和艦の調査により從來の海圖に示せる所と頗る異つてゐることが知れた。その形相は第六圖に示すが如く、三千米以上の深さに達する海凹は略ぼ朝鮮東岸元山港から津輕海峽に向つて引いた一線以北の北部に偏在し、その最深底三、七一二米は島國大崎の正西約九〇〇粁の處に在る。然れども此の海凹より南の二千米以下の海底の凹凸は二千米等深線の屈曲に見る如く頗る複雜で、殊に大和艦の發見に係る淺處大和堆 Yamato Bank は陸地の輪廓に於て能登半島の

呈すると類似の形狀をなして北に向ひ突出してゐる。尙ほ第二の半島狀の突出が朝鮮東岸にもある。能登半島以北の海岸に接した部分では千米の等深線が深く入り込み、淺處も亦た二三條の海脊を成し佐渡以北に排列し、群島の地勢が海底に續くが如き觀を呈してゐる。

陸棚は一般に狹いが、對馬海峽に東隱岐島に至る間と能登半島の北とでは頗る廣いのは水產業に都合の好い特色で、トロール漁業の盛なる共にその價値は著しく增加した。

オホーツク海の凹凸は頗る日本海と趣を異にし、二千米及び三千米等深線はカムチャッカ半島の南端から西々南に向ひ樺太島の南端に引いた一線以南に偏在し、三千米線は千島に密接して並走し、その最深底は根室の北に突出した知床岬の北方約一六〇粁に在る。陸棚は樺太の東邊から北見まで幅廣く連亙してゐる。

此の海は樺太及び北海道により日本海に入つた暖流が遮斷され、開放した千島の側から親潮寒流が流れ込む爲めに水温が低く、特に冬期氷結して五六月の交に流氷が沿岸に漂流して來る。

東支那海は一般に極めて淺く、二百米等深線は臺灣の北端に向ひ五島との間に弓狀をなし、その東側に偏して沖繩列島に接して千米以上の海溝がある。北の海溝の最深處（二六八一米）は八重山列島西表（イリオモテ）島の北方一千粁に在る。此の海溝の西邊に接する陸棚の境界に花瓶棉花尖頭赤尾等の諸嶼が東々北に向ひ點々碁布し、その弓狀の輪廓は朝鮮の東岸と類似し、且つ之に連接する趨向が見える。

東支那海の北部は渤海灣に通じ、黃海として區別され、黃河の流出する土砂の影響が淺海の出來る一要因たるべく、その山東半島以南にも亦た前世紀前半までは黃河の河口が楊子江と並んでゐたのである。東南邊緣の深いのは前に擧げた地盤の關係も一因なるも、黑潮の影響も亦無視することは出來ぬ。

日本群島が大陸との間に包む淺い三つの海と相並んで、我領海に屬する海面中全く特種の地位を有するものは瀨戸內海である。この內海は極めて淺くて二〇〇米に達する處なく、中國と四國の兩陸地の間に縱走する陸地の凹處に海水が侵入して生じたものである。

此の海面は東北東から西南西に延長し、大阪灣、播磨灘、燧灘、安藝灘、廣島灣、伊豫灘（硫黃灘）周防灘、別府灣に別れ、その間に廣狹大小色々の瀨戸がある。四國の北に突出した讃岐高縄兩半島の三備安藝の海岸に接近する部分では點々たる無數の島嶼が相連り、一種の多島海を成してゐる。ペンクは此の狹長な瀨戸を有する特色を認めて、灘及び灘海峽と呼んだ。瀨戸內海の風景の特色は主として花崗岩の島嶼の碁布して航行の間に應接に暇ない位に兩舷に同時に見える點で、その晴朗平穩なる海面と相映ずる印象は恐らくは世界の何處にもない。平安京に近い須磨明石が先づ海岸風景の一型式として人口に膾炙し、平家時代に嚴島が紹介されたのは偶然でない。

我が日本群島周邊の此等の淺海はすべて陸棚の發達によつて出來たので、陸棚の生成は造陸運動に

起因する海陸面の變化である。此の海陸輪廓の變遷は獨り人類の世界となる前の遠い地質時代に行はれたのみでなく、人類と前後して現はれた象の棲息した遺迹を化石の發見によつて調べて見れば、我が日本群島の滄桑の激變に驚くべきものがあるのを知り得る。

現生種たる印度象と餘り違はぬ日本の化石象 Elephus antiqus 又は namadicus は洪積世の動物であつて、東京の田端・遠江佐濱等の東海道沿岸平地に棲息したものが、今淺い海水を湛へた瀬戸内海一圓に海底から發見され、尙ほ長崎の沖からも網にかゝつたことがあり、北京日本公使館地盤からも出たのであるから、黃海は其後に今の海面と化したもので、日本群島が近い地質時代に大陸の一部を成してゐたことに疑を容るゝ餘地がない。故に洪積世の東亞の輪廓は現世とは全く異つて、少くも日本本土及び四國九州は南から北に曲つて大きな釣針狀の半島になつて、若し津輕又は宗谷海峽の邊が既に開いてゐたとしても、殆んど日本海を全く包圍してゐたものと想像される。若し又た此の如くに今の二〇〇米等深線以内の大部分が一樣に現在よりも隆起してゐたとすれば、山陰海岸の外邊に遙に沖の方まで廣がつた今の陸棚が大部分乾いた平地を成した筈であつて、最近水路部の發表した日本海中の淺海床の如きは此の時代の陸棚と考へ得られる。

海流とその影響

海流は氣候を調節する要因として働き、是が爲め我が群島は隣接大陸に比して温和なる氣候を樂しむのである。我が近海を流るゝ海流中黑潮卽ち日本海流がその最も重要なるもので、熱帶地方から臺灣琉球に沿ひ東北に向ひ、幹流は九州から太平洋岸に沿ひ東々北に向ひ、支流は九州の西岸及び中國の北岸に沿ひ東北に向ふ。その起源地が熱帶にあつて高溫で鹽分に富み深藍色を帶び、黑潮の名が是によつて起つた。

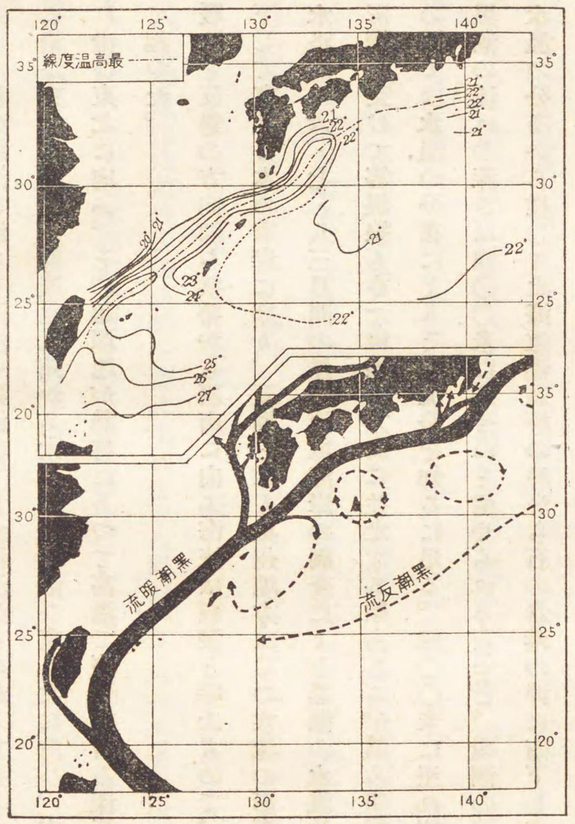
此の暖流と反對の方向卽ち寒帶から西南に向ふ海流は親潮と呼ぶもので、千島から北海道の南岸に沿ひ南下して東北日本の東岸に來り、夏期と雖も奧州地方はこの寒流の影響を被むる。

海軍水路部の六・七・八三月間の黑潮流域海岸の調査により黑潮の水溫分布を見るに、表面は夏季氣溫の影響を受けて等溫線も亦た緯線の方向に並走する傾向あるが爲め明瞭を缺くも、五〇米から三〇〇米の間では水溫の分布によりその流路を知るに足る。四〇〇米に至れば再び不明となる事實から推せば黑潮の流れの深さは四〇〇米に達せぬと信ぜられる（第七圖）。親潮の流路も亦た五〇米の深さに於ける水溫の分布から推して北海道襟裳岬の沖から石の卷港の沖に南下し來るを知るに足る。

暖流の支流が日本海に入り日本の側に沿ひ北上し、その影響は遠く樺太の西岸に及び、寒流に洗はるゝオホーツク海に臨む東岸の五六月の交まで海氷あるに反し、冬季全く海氷に鎖さるゝことがない。

水温の高いために表面の蒸發が盛んで、上海沖と長崎沖との間の夏季航海者は長崎港を出て俄かに潽せ熱く感じ、上海に近づき急に清涼を感ずる。豆南の航路に於て八丈島附近で潽せ熱く感ずるのもこの影響である。

東海道沿岸からヤップ島附近に至る東經一三七度子午線に沿ふた海洋の水温分布は、北緯三〇度附近卽ち八丈小笠原兩島間の西方に於て高温層が最も深く、是から南に向ひ漸變して却つて淺くなつてゐる。是も黑潮の影響と想はれる。



第七圖　黑潮流域海洋調査團

潮汐

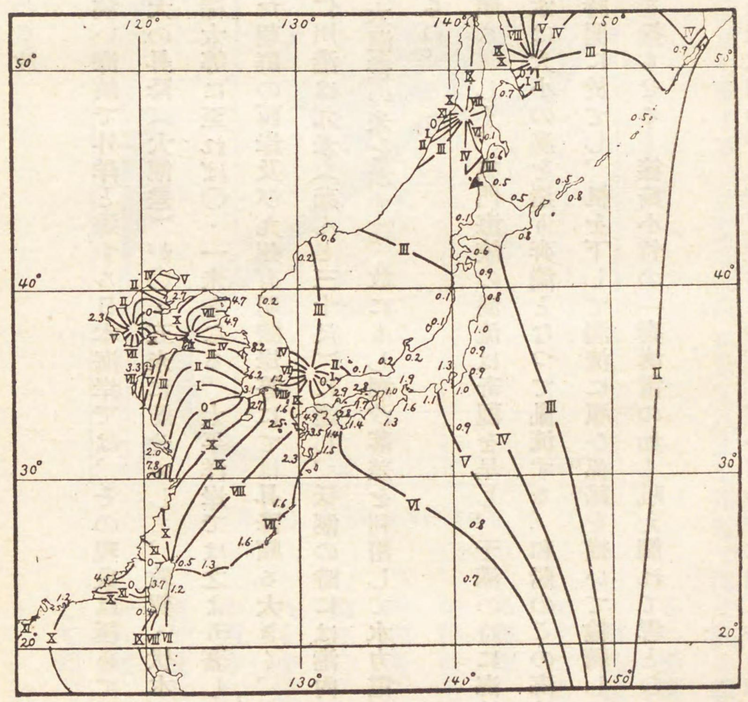
潮汐は殆んど全く陸地に圍まれ狹い海峽で外洋と通ずる日本海岸では、その現象は極めて輕微であり、最も大なる對馬海峽に於て最大の昇降（大潮差）が〇・五米に達せずして、敦賀・伏木等の北陸沿岸では〇・二米程度、北海道・樺太等に至れば〇・一米となる。太平洋岸では之より著しくして、三米に達し、陸棚の大部分を占めた朝鮮の西岸及び九州有明灣岸等にては昇降頗る大きく、有明灣では約五米に達する處があり、朝鮮仁川港は九米（殆んど三十尺）に達し、低潮の時には港内一面泥沼の如くなる（第八圖）（亞剌比亞字は大潮差の米を示す）。故にもし潮汐落差を利用して水力電氣を起すならば支那海の沿岸に求めねばならぬ。

瀨戸内海では潮汐の起す海流が頗る著しく、鳴門海峽の渦流は奇觀を呈し、干滿の時に海峽の水面一線を劃して一方が低くなり、海水は大小の渦を造り奔湍となつて亂流する。和船のこの海峽を過ぐるものは潮流更迭の前又は後一二時間に於てし、帆を下して湍流に順ひ係蹄（わな）を描いて輪轉しつゝ過ぎ行く狀況、觀望するものも手に汗を握らせる。篠崎小竹の「奔濤雷の如く吼え觸れて雪となる」との形容は虛言でない。

この潮流の流出は太陰子午圈經過後大潮の時は約三時半に始まり、小潮の時は約二時に始まり、そ

の速さ七八浬といはるゝも、風候によつては一一浬に及ぶこともある。俗説によれば、海底に淵穴があつて金輪際に達するといふが、山崎博士の研究によれば此の海峡の隙部を横斷した一線の北と南に各匙狀の凹みが海底に出來てゐる。此の渦流は或は大きな甌穴を海底に造り得る筈で、全く空想でないと想はれる。

潮汐は太陰の子午圈經過に後れてその引力が海面の昇降を起す現象であるから、東から西に向ひ經度に從ひ時刻が



第八圖　日本近海潮汐進行圖

後れる。その進行は圖に示す如くなる(第八圖)。(羅馬字は太陰が東經一三五度子午線を經過してから高潮となるまでの時間を太陰時で示したものである)。

第三章　領　土

島嶼としての領土の性質

日本群島附屬領土及び南洋委任統治地を含む四方の延長は非常に大なるも、島嶼の多くは蕞爾たる孤島に過ぎざる爲めに、領土の面積は極めて小さい。之を換言すれば我が領土の分散性は島嶼性と離れ難き特色をなしてゐるのである。然れどもその心核として最大の面積を有する大八洲の存在して、惑星の中心を占むる太陽の如き體系を成すので、島帝國の地位が萬國に冠絶してゐる譯である。

島嶼性 Insularity は孤立 Isolation を意味し、海水に圍まれる爲に境界が固定し、地文的にはその面積が小さい程海洋の影響が卓越し、人文的にも亦た住民の生業を漁撈に限定する傾向が著しく、その位置に依つては交通上の足溜りとして役立つ場合に於て初めて特殊の價値が認められる。

我が領土の場合は大八洲が中心となり、是から東北に千島、南に豆南及び南洋群島、西南に薩南諸島が遠く放射狀に擴がつて、地圖上には如何にも纒りの惡い形態を成してゐる。然れども現今大洋上の航路及び大陸間の航空路が開けるに及んで、此等の飛石の如き孤島の列が世界交通經濟及び國防上に至大の地理的意義が發揮されることになつた。

島嶼を領土とする國家は天然に限定された判然たる境界を有するが故に陸續きの場合の如く國境の移動が起り難く、また敵國の侵略により獨立を脅かされる危險も少い。是は孤立の賜ものである。濟州島の高氏、琉球の尙氏の如き孤島の首長すら久しく獨立を樂しみ得た理由は此にあつて、半島の三韓王國が奕棋の如き興亡を閲歷したのと大に趣を異にしてゐる。

島嶼の地文的條件は大陸との距離如何による外に面積の大小に比例するものである。面積の小さい島嶼は全く海洋の影響を被るが、その面積が大きく地勢が複雜を加ふるに從ひ、地文的關係が孤島と異つた海洋性を呈する。故に住民も亦た漁業以外の生業に從事し得べく、文化の發育及び保存共に可能適當となるのである。限りある土地に優良なる民族が久しく平穩なる生活を續け人口が增殖し文化が進歩すれば、海を越えて富源を探り生業を求める氣運が必ず興る。而してその活動は漁業から得た航海術によるのであるから、海賊的生活から海外貿易及び植民に進むのが、その辿る自然の徑路である。民族の異同と文化の高低とに從ひ多少の差異はあるが、日本の室町時代と英國のヴィクトリア時代の海外發展に類似の特色あるは主として、島嶼に於ける文化民族の勢力溢出の徑路が同一なるによる。

日本人の海外活動の往昔から行はれたこと我が歷史に素盞嗚尊の根の國（朝鮮）に往來された神話

に明かで、その發展が三韓の經略ともなり、隋唐交通以後我が大和朝廷の方針が奥羽開發に集注された傾向を示したのであるが、室町時代に至つてまた海外活動が再び起つた。

面積と人口

我が群島の領土は一、本土卽ち本州四國九州の三大島とその屬島、二、北洲（北海道）と千島、樺太島、三、琉球諸島及び臺灣、四、朝鮮半島の四部に區別され、五、關東州、六、南洋諸島を包括しその面積は左の圖式に示す如く分布し、本土卽ち大八洲が全面積の二・三分一を占めてゐる（第九圖）。本土が大八洲の中核としての性質を有することはこの面積比例によつても明らかである。

全領土の中心に在つてその重心を占める本土は、その延長の方向が九州・四國・中國・近畿・東海・東山・北陸の諸地方を通じて東西に緯線に並走する事實が特に重要である。緯度分けの面積を考へると、本土の土地は北緯三一度から四一度に延長するも、その過半は三四度から三七度の間に位し、その分布と氣候との關係は頗る著しく、地勢より生ずる變化を補正して海面上に換算した等溫線も亦た略ぼ並走する事實があるから、東西に延長することが本土の大部分が溫暖なる氣候を有する結果を生ずるのである。

朝鮮は略ぼ均一なる幅を有して三五度から四二度までの間に延長するも四〇度と四一度との間で最

第九圖　日本群島面積表

地方	面積 方粁	千分比例
本州	二三〇、五四九・六一	三四一・三五
四國	一八、七七一・四五	二七・七九
九州	四二、〇七八・四九	六二・三〇
計	二九一、三九九・五五	一三一・四四
北海道	八八、七七五・〇四	五三・四四
樺太	三六、〇九〇・三〇	
計	一二四、八六五・三四	三・五三
琉球	二、三八六・二四	五三・〇六
臺灣	三五、八三四・三五	〇・一九
澎湖島	一二六・八六	五六・七八
計	三八、三四七・四五	三二六・九〇
朝鮮	二二〇、七八八・四四	一、〇〇〇・〇〇
總計	六七五、四〇〇・七八	
關東州	三、四六二・四五	
南洋諸島	二、一四八・八〇	

も廣く、北海道は四三度と四四度との間で最も廣く、樺太に至つては北端四九度と五〇度との間が最も廣い。

領土は人類が組成する國家の領域であるから、住民と切り離しては考へ難く、國家の勢力はその領土に於ける住民の活動によつて生ずる。故に領土の大小と共に住民の員數卽ち人口を並べ考へねば我が帝國の世界列國間に占むる眞の地位が明かにならぬ。昭和十五年に於ける全領土の面積と人口とを列國に比較して左に圖示する（第十圖・第十一圖）。

第十圖　世界列國面積表

國名	面積	國名	面積
	方粁		方粁
1. 英國	32,226,709	本國	42,929
本國	243,412	屬領	2,176,999
屬領	29,727,939	11. ポルトガル	2,174,183
委任統治領	2,255,358	本國	92,157
2. ソヴエト聯邦	21,613,240	屬領	2,081,936
舊歐州領	4,995,300	12. オランダ	2,080,765
新歐州領	456,340	本國	34,759
アジア州領	16,179,600	屬領	2,046,003
3. 佛國	12,560,947	13. メキシコ	1,969,365
本國	550,986	14. イラン	1,643,158
屬領	11,434,415	15. ボリビア	1,232,808
委任統治領	675,500	16. 滿洲國	1,303,143
4. 中華民國	10,361,604	17. ペルー	1,249,049
本部	3,782,105	18. コロンビア	1,139,155
藩部	6,679,499	19. エジプト	1,000,000
5. 米國	9,682,400	20. スペイン	840,839
合衆國	7,839,347	本國	504,679
屬領	1,843,053	屬領	336,160
6. ブラジル	8,511,189	21. トルコ	772,761
7. イタリー	3,825,288	22. チリ	762,736
本國	337,728	23. 獨逸	681,161
屬領	3,487,560	舊獨逸	586,238
8. アルゼンチン	2,792,113	新獨逸	94,923
9. ベルギー	2,440,678	24. 日本	681,011
本國	30,506	25. アフガニスタン	650,000
屬領	2,356,506	26. タイ	513,447
委任統治領	54,172	27. スウエーデン	448,722
10. デンマーク	2,219,938	28. パラグワイ	418,722

第十一圖　世界列國人口表

國名	人口	國名	人口
1. 英國	526,347,806	本國	45,415,948
本國	47,485,000	屬領	13,129,414
屬領	469,625,943	10. ブラジル	41,356,605
委任統治領	9,236,863	11. スペイン	27,307,424
2. 中華民國	446,605,017	本國	26,222,424
本部	418,659,321	屬領	1,085,000
藩部	27,945,696	12. ベルギー	22,536,000
3. ソヴエト聯邦	193,055,101	本國	8,396,000
舊歐州	139,602,178	屬領	10,356,000
新歐州領	22,588,015	委任統治領	3,784,000
アジア領	30,865,008	18. タイ	15,200,000
4. 米國	150,243,393	19. ルーマニア	13,400,000
合衆國	131,409,881	19. ハンガリー	13,400,000
屬領	18,833,512	20. パラグワイ	10,000,000
5. 佛國	112,762,358	21. コロンビア	8,701,816
本國	41,980,000	22. ペルー	7,200,000
屬領	63,887,358	23. スウエーデン	6,341,303
委任統治領	6,990,000	13. メキシコ	21,000,000
6. 日本	105,226,101	14. トルコ	17,870,000
7. 獨逸	79,549,136	15. ポルトガル	16,936,237
8. オランダ	78,542,110	本國	7,539,000
本國	8,833,000	屬領	9,397,237
屬領	69,709,110	16. エジプト	165,220,000
9. イタリー	58,545,362	17. イラン	15,000,000

これにより明かな如く版圖面積は英帝國・ソ聯・フランス・支那・合衆國・ブラジル・イタリー・アルヂェンチン等は日本より遙に大にして、世界列國中、獨逸についで第二四位にある。支那本部の面積のみにて朝鮮を除ける群島の全部の十二倍弱に相當し、朝鮮を含む全面積は佛領印度支那より少しく大に、泰國は群島より少しく大に、又はフヰリッピン諸島は本部及び北海道より少しく小である。然れどもこれに居住する人口をと

第十二圖　日本群島地方別面積人口表

地方	面積	人口	人口密度（一方粁ニ付）
	方粁	千人	
内地	382,560	73,114	191
北海道	88,775	3,272	37
奥羽地方	66,911	7,164	107
關東地方	32,234	16,866	523
中部地方	66,733	13,111	196
近畿地方	32,986	13,132	397
中國地方	31,684	5,718	181
四國地方	18,771	3,337	178
九州地方	33,464	10,511	237
朝鮮	220,788	24,326	110
臺灣	35,961	5,872	163
樺太	36,090	414	11
關東州	3,462	1.367	395
南洋群島	2,149	131	61
總計	671,012	102,226	155

つて比較すれば我が帝國は英國・支那・ソ聯・合衆國・フランスに次いで第六位に位する。その面積を世界的に考察すれば眞に彈丸黑子の如き我が群島及び屬領の全版圖をもつてして、而もかくの如き多數の人口を擁することこそ我帝國をして世界に重きをなさしめる基礎と云はねばならぬ。

我が領土の地方別面積と人口との關係はまた上の如く（第十二圖）、國内に於ける人口分布の形態は地方的差異頗る顯著で、昭和十五年に於けるその分布を支配する地文的人文的要因に關しては後篇に細論する。

第四章　海　岸

海岸線發達の意義

海陸の境界たる海岸は地文的には海洋の陸地に影響を及ぼす限界を成し、人文的には人類の陸上生活から海上の活動に移る媒介を成す處である。而して此の境界は地圖には線として示すも、潮汐により海面の高さが變化すると共に波打際卽ち汀線の位置が變化するは勿論で、潮流による土砂の堆積や波浪による岸邊の破壞により間斷なく增減し、又た地盤の徐々に隆起又は沈降する處では歷史時代の間に著しく汀線が移動した實例がある。故に嚴密にいへば海岸は陸地の海水に洗はるゝ地帶といふべきであるが、便宜上數理的の線と看做して海岸線と呼ぶ。

海岸線の形狀は日本の如き場合は、島嶼の輪廓と同時に海陸間に行はれる地理上の相互關係を決定し、地文的にも人文的にも重要なる意義を有する。而して島嶼の面積と之を圍む海岸線の長さの關係は、陸地の形狀が完全な圓に近いほどその長さが小で、海岸線が屈曲して出入が頻繁なるに從ひ、その長さは同面積を含む圓周に比して長くなる。

海岸線が文化の發達に重大なる意義があると高調したのは人文地理學の鼻祖カール・リッテルで、之を數量的に示すに海岸線の單位の長さに對する面積の比を用ゐ、面積が大なるに從ひ屈曲が少いことを明かにした。然れども此の方法は圖示するに不便で、是よりも同面積を含む圓周を求めて、この長さと海岸線の長さを比較するエリゼー・ルクリューの採用した方法がよい。

五大陸及日本群島水平肢節指數

大陸及地方	水平肢節指數
北亞米利加	4.9
歐羅巴	3.5
亞細亞	3.2
濠太剌利	2.0
南亞米利加	2.0
阿弗利加	1.8
本州	4.576
四國	3.838
九州	5.053
北海道本島	2.314
臺灣	1.781

この兩圓の長さは、その半徑に比例するから、同面積の圓の半徑を $\sqrt{\pi r^2}$ から求め、次に海岸線の長さに相當する圓の半徑を $2\pi R$ から求め、その比率 R/r が容易に得られる。

この方法で日本群島の五大島の海岸線發達の比率を求むるに、九州五强、本州四・六、四國三・八、北海道一・七で、九州と本州とが比率最も大である。朝鮮及び樺太は陸地の境界線がある爲めにその海岸線は全圓孤でないが、假りに之をも周囲に含めて、その輪廓の比率を求むるに、樺太は二・三、朝鮮は四・三となる。この海岸線發達の割合は上表に示す。

この實例から海岸線の發達が國土の開發を促すに與つて大に力あるべきを想はしめる。然れどもこ

の比率を過重視するの危險はリッテルの所謂比較地理學の根本觀念の誤謬の一としてラッツェル等の指摘した所で、肢節に富んだ海岸を有する希臘民族が歐洲文化の先覺者ではあるが、地中海岸の貿易と植民の前驅をなして之を啓發したフェネシア民族は海岸線の屈曲極めて少いシリア海岸の住民であつて、是のみで民族性が養成されるのではない。

之と同じ類例は肥前と紀伊との海岸住民の海外發展で、前者の東亞到る處に出稼者を見ざるなきに對し、後者は早く西は日向から東は房總九十九里濱の漁業を壟斷し、北海道・樺太の開發者も亦た南海道沿岸の漁夫であつた。此の兩者の住處は希臘とフェネシアの海岸に劣らぬ對照を呈してゐるのは面白く、德川幕府時代に濱田彌兵衞の高沙事件と共に紀文大盡の

沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船

の俗謠が人口に膾炙してゐる。

肢　節

然れども海岸線の長さと面積との關係には海岸の大形卽ち大半島及び大灣入に由ると、細形卽ち局部的屈曲に由るとの區別があることは注意せねばならぬ。北上及び朝鮮南部の海岸の如きは何れも局部的屈曲で、大なる半島及び灣入がない。東海道東部・九州南部・樺太は之に反して局部的小屈曲はなきも狹長なる半島が突出してゐる。故に前者は小肢節に富むに止り、後者の大肢節を有するものと區別される。前者は陸內から海岸に到る距離を短縮すること後者の如く著しくないから、海洋の影響を陸地の氣候に及ぼし海陸交通の利便を增すこと後者に劣ることは勿論である。九州西北部肥前の海岸は兩者の特性を併せ具備し、大半島大灣入と共に小屈曲も有し、我が群島中に比類なき大小肢節に富んだ海岸である。

陸內の地點から海岸に達する距離は大肢節に富んだ場合に最短で、肢節に乏しいほど距離を增し、海洋の陸地に及ぼす影響は此の關係から生じ、交通上にも重要である。海岸線による近海地帶と遠海地帶の區別は此の關係を示すに便である。

海岸線の大形は地盤の性質及び構造に左右されるが、此の問題は之を後章に讓り、細形の成立に此等よりも重要なる役割を演ずる海陸間に行はるゝ浸蝕運搬堆積の三つの作用に就いてその我が領土の海岸に對して如何に働いたか、又た如何に働きつゝあるかを茲に述べる。

波浪の浸蝕作用

本州の南端潮ノ岬は名の示す如く黑潮の暖流に洗はるゝ處で、海上風靜かな日でも沿岸航路の汽船は此處を廻航する時に動搖を感じ、舷頭から望めば怒濤が燈臺の下の崖に激して碎けて玉と散る樣壯

觀を呈し、暴風雨の際に打ちつける波浪の力は想像に餘る。

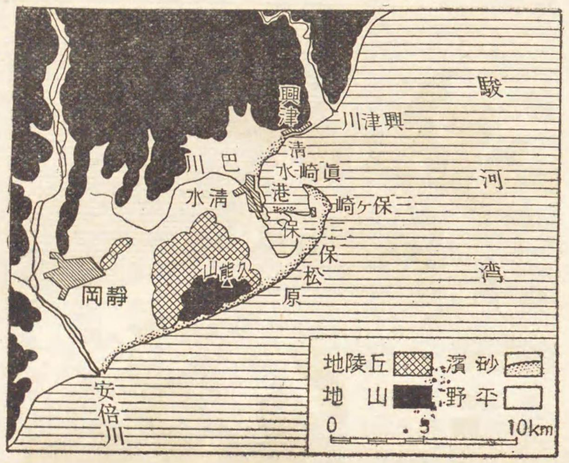
日本で行はれた波浪の力に關する觀測がないが、ステブンソンの壓力計で測つた所ではスコットランドの大西洋岸で一方米の面に對し約三十噸（三萬瓩）といふ數量を得たといふ。此の如き壓力で海水が海岸の岩石に打ち當れば、その割れ目に入つて之を押し開げて破壞すべく、又た割れて落ちた岩塊も亦た波浪に飜弄されて砲彈の如く打ち當る。此の破壞作用が永く繼續すれば陸地の端は削り取られ、波打際に岩盤の平らな岩床（磯）が出來る。

今の潮ノ岬は海拔約五〇米の臺地で、その平坦なる面は過去（恐らくは洪積世）に波浪に削平された磯の遺跡で、所謂海蝕臺地の一例である。志摩南部の半島は更に著明な海蝕の地貌を呈する。日本の畫家の好んで描いた波切邊の風景畫にこの臺地の特色がよく見える。

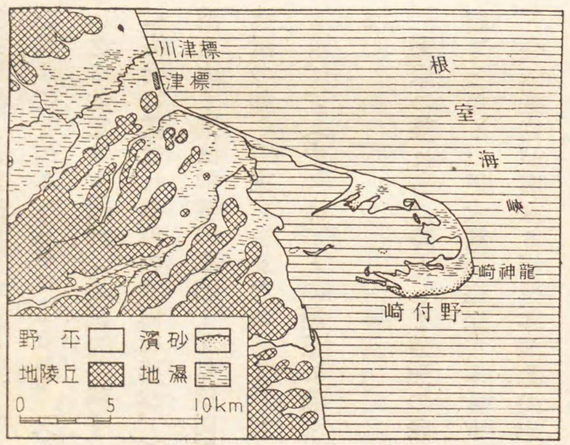
波浪の破壞により被むる陸地の浸蝕（海蝕）の進行しつゝある好例は日向の宮崎油津間の海岸に見られ、海岸の走向に並走する砂岩・頁岩（泥板岩）等の比較的に軟かい傾斜層が殆ど水平に削られ、熱帶植物の生長した青島はその瘤の如くに殘存する部分であるらしい。

波浪の破壞した物質は砂・礫・泥土を成し、陸内から流出した同種の物質と共に波浪・潮流及び海流に從ひ運搬されて海岸に沿ひ堆積して沙濱及び沙洲が出來る。

沙濱及び沙洲は供給さるゝ材料多くして海水の流れ適當なる場合最も都合よく發達する。從つて大なる河流の流出する處に旺盛に發達し、之が爲め河口が海岸に沿ひ一定の方向に轉ずるに至る。越後以北の日本海岸の諸河口はその好例である。



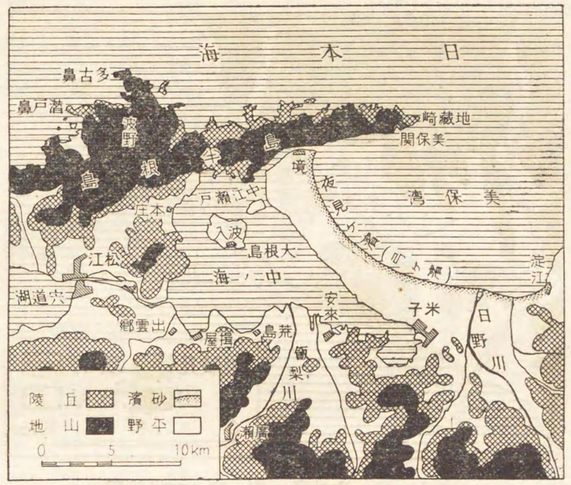
第十三圖　海蝕臺地第一例　三保松原



第十四圖　海蝕臺地第二例　野付崎

屈曲した海岸では突角に沿ふた流れの爲めに海中に延び神戸港外の和田岬・丹後天ノ橋立・伯耆夜

見ケ濱の如く狹く長い砂嘴を成して港灣を抱き、時としてはその前端が更に內部に向ひ屈曲して、根室野付崎・駿河三保ノ松原の如く曲玉狀の砂鉤を成すことがある（第十三・十四圖）。又た海岸を離れ之に並走する門洲（堤洲）と稱する淺瀨が終に海面に露はれ海岸の方向に延び、その內側に潟を抱く例は加賀河北潟・北見猿間湖・根室風連沼の如く、東プロシヤのネールング（砂洲）とハッフ（中ノ海）との關係に類するものもある。



第十五圖　海蝕臺地第三例　道中の海

海岸の離れ島は時として砂洲の發達による陸續きとなる。伊太利の海岸でトムボロ Tomboro と呼ぶ陸島が出來る。博多灣北の志賀島を聯結した海ノ中道はその著しい一として面白く、日本語で此の型式の地形を表はすには之を術語として用ゐるのが適當である。その最も簡單な例は潮ノ岬で（第十五圖）、相模灣の江ノ島は砂洲の發達が不十分なる爲めに滿潮には砂洲が沒してしまふ。

日本海岸には此の外に羽後男鹿・伯耆宍道兩半島が同型式に屬し、前者は二條後者は三條の砂洲から成つた地頸を有し、能登半島に至つては頭部が狹長な地溝の埋沒によつて出來た爲めに、成因の同一なるに關らず、トムボロ固有の形狀から異つて見える。

海岸に堆積した砂が海風に煽られるのは古歌に名高き吹上げで、數十米に達する海岸に並走した砂丘を成し、その陸に面する側が常に急峻に傾斜した地貌を生ずる。日本海にはその發達頗る盛んで、砂防工事を施すもその陸內へ向ふ移動を喰止めることが困難な場合がある。天龍川の河口を除いた遠江、利根川の北の鹿島灘の沿岸を除いては太平洋岸は概して日本海ほど砂丘の發達が盛んではない。

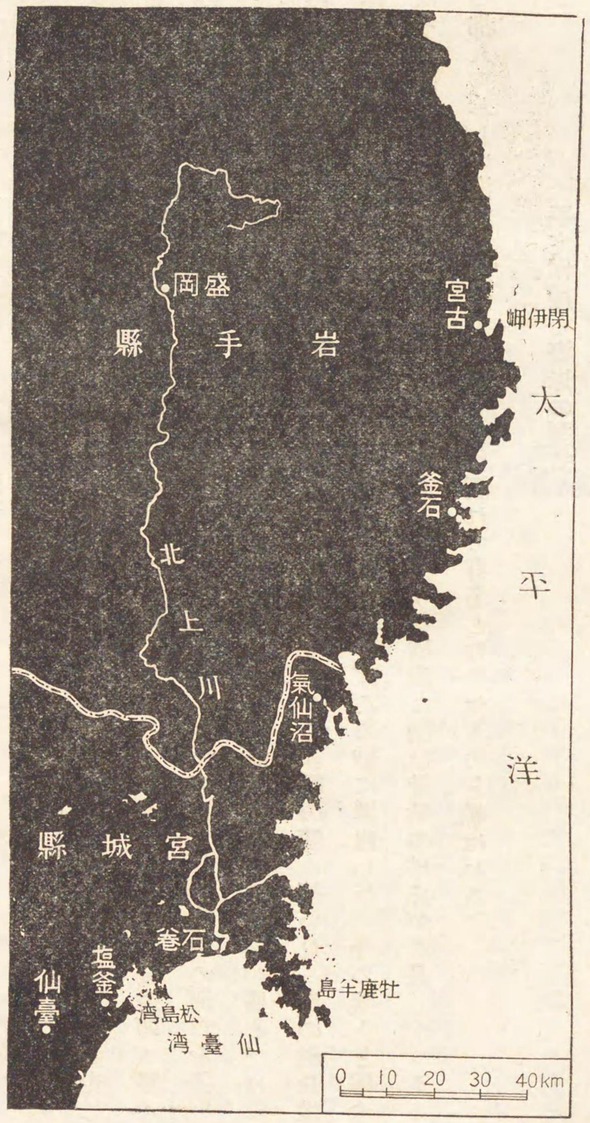
然れども歌枕に有名な古代の紀伊吹上濱は今の和歌山城南から和歌の浦に續いた一帶の砂丘地で、玉津島その他の島嶼から此に連つた紀伊川河口の小島が半ばこの砂に埋沒した。今の吹上と稱する地帶はその西にある第二の砂丘地で、荒（新）濱と稱する砂濱に沿ひ最新の砂丘が生長しつゝある。古代の都人に珍しい海濱の風景が此處で目に觸れて有名となつたものと想はれる。

平定作用と海岸の型式

海岸に働く此等の作用を約言すれば、海岸線の突出部を削り灣入部を埋めて、屈曲の減少を起すもので、此の作用を總稱して平定作用と呼び、此の如くして生じた平地を緣とする直線狀又は弓狀の海

岸を平岸と呼ぶ。

太平洋岸中東北日本の松島より南大東崎に至る間は全く平岸でその最も顯著な例である。日本海岸も亦た加賀越中越後兩羽の砂邱の發達した地方は何れも同型で、港灣の缺乏と築港の困難とはその起



第十六圖　北上リアス式海岸

第十七圖　朝鮮多島海

す不利な結果で、臺灣の西岸全體の屈曲の乏しいのは之と同一の成因なるが爲めである。

平定作用による海岸平地の增大は地盤の隆起が與つて大に力あるもので、假令隆起が顯著ならずとするも、少くも沈降作用が行はれぬことが一要件である。地盤が沈降しつゝある處は勿論、近い地質時代に沈降した處でも、一般に平定作用が十分に働かずして、之に反して陸地の溪谷の下端が海面下に沒し、深く灣入した溺沈谷を成し、屢鋸の齒の如く頻繁に屈曲した海岸の輪廓が出來る。所謂リアス式海岸はその一つの場合で、古期岩層の浸蝕谷の沈沒によつて生じた北上川舊河口に至る間の輪廓はその特色を呈してゐる。

朝鮮の南岸と西岸は古い岩層の地盤の沈降により生じた關係から、その屈曲の頻繁が更に著しく、無數の島嶼が之と錯雜する點で北上海岸と趣を異にし歐洲の

類型エゲア海（多島海）沿岸を見る如くであるから、之を多島海式海岸と呼ぶ。

本州の海岸線

本州の海岸線は五つに區別し得る。第一の下の關海峽から龍飛崎に至る日本海岸は屈曲最も少く、第二の下の關より紀淡海峽に至る瀨戸内海は小屈曲と小島嶼と多く、第三の紀淡海峽より大東崎に至る紀伊半島以東太平洋海岸は大なる半島及び灣入多く、第四の是より以北尻屋崎に至る海岸は北上のリアス式屈曲を無視すれば弓狀の凹彎及び凸彎を成し、第五の尻矢崎龍飛崎間の津輕海峽に面する海岸は伊豆半島から房總半島に至る最も半島と大灣入の交互した部分と類似してゐる。此の兩者の類似は火山帶と密接の關係がある。

日本海岸の屈曲の少いのは主として地盤構造の關係に由るもので、大小多數の鈍い弧狀の構造線により切斷された形狀である。而して單調を破る著しい灣入は若狹小濱灣と敦賀とで、何れも古生層地盤の陷沒によつて生じたと想はれる。近畿地方の北邊の深い此の兩灣入は大和を中心とした古代文化に重大な意義を有し、その西の久美濱から王莽の貨泉が石器と共に發見されたのは古い大陸交通が今殆んど忘れられた此の小濱を出發點とした時代のあつたことを語る證左である。

半島は宍道・能登・男鹿の三つ互に輪廓を異にするも、その成因は同一で、何れも島嶼と本土との間に土砂の堆積して平地が發達した爲めに島嶼が陸續きとなつたのである。宍道・中ノ海の兩湖はもとの海面の名殘を止めた一種の潟湖であり、能登半島も亦た羽咋七尾間の海峽が埋沒して陸續きとなり、邑知潟はその遺跡であり、男鹿半島のみは廣い水面が八郎潟として殘つて、その埋沒の過程の初期に在る。

此の如き半島及び潟湖の成立を促すものは、前に擧げた如く海岸に當る波浪の濱岸の浸蝕とその土砂を運搬する潮流及び海流の作用で、弓狀を成した低平なる加賀羽後の砂濱の成生と同一の過程の一部である。後者は海岸一般の趨勢に從ひ延長せる砂洲を生じ、屢〻潟湖を造り、又た沿岸平地に砂丘の堆積を生ずる。伯耆の夜見ノ濱から鳥取近傍に至る海岸砂丘は幅高さ共に著大ならざるも、加賀・越後・羽後ではその形相が沖積地と頗る異つてゐる。

瀨戸内海の海岸は中國四國の間に幅廣き一帶の花崗岩地盤が東西に縱走する處で、兩岸の河流がその土砂を流して沈沒した淺海を埋めたものである。海岸線の屈曲はこれにより著しく減少したるも尙ほ埋め殘した島嶼の間に瀨戸の激流を通じ、變化多く風光に富んだ海岸を成した。

太平洋に沿ふた南岸は紀伊半島・東海道・伊豆半島以東の三部各異つた輪廓を描き、その成因も亦た各異つてゐる。その形狀は陸地の凹凸と共に地質構造に密接の關係があるから後章に詳らかに說明する。

四國九州の海岸線

四國は瀬戸内海海岸と太平洋岸と著しく形狀を異にするのみならず、紀伊・豐後兩水道のリアス式部分と、室戸崎・蹉跎岬の兩突角の近傍の屈曲なき部分とも亦た形狀を異にし地質構造との關係が此處にも認められる。

九州は海岸線の形狀最も複雜にして局部的變化が多い。卽ち東北瀬戸内海に面する處は大きな周防灘と小さな別府の兩灣とその國東(サキ)半島の突出により比較的に大なる出入があり、四國に對する豐後水道はリアス狀の小屈曲を成し、之に接する延岡以南の海岸は太平洋に面する殆んど一直線を成し、西北岸は東北部の數多の弓狀の小屈曲から西南に進むに從ひ深く大きい灣入となり、平戸以南は更に深き海水の灣入と、狹長なる半島の突出より成りて島原・有明兩灣を抱き、肥後・薩摩の海岸は大小の島嶼に掩蔽されて瀬戸内海に類する多島海を成し、南部は奥羽の北端に類似する薩隅兩大半島・鹿兒島・有明(志布志)兩灣の出入が著しい。

北海道樺太の海岸線

北海道(北州)は奥羽の北端に接する西南(勝振渡島)半島が大屈曲に富むに止り、室蘭から根室に至る南岸は四國南岸の形狀を繰返し、北岸も亦た積丹岬から知床岬に至る間、殆んど全く同型に屬し、襟裳崎と宗谷岬とがその中間に突出し、千島に接する東部根室灣は小規模に奥羽薩隅の陸端の特性を呈する。

樺太島の輪廓は北海道と同じく一般に小屈曲に乏しきも、前者の四角張つたのに比して狹長なる半島狀を成すのが著しい對照である。日本海岸の屈折の角度の鈍きと、オホーツク海岸の細長なる北知床・知床兩半島の突出は此の中の最も顯著なるものである。

臺灣の海岸線

臺灣は海岸線の最も屈曲に乏しい島嶼で、太平洋に面する東角は殆んど直線に近く、西岸は之に反して一大凸彎を描くが、大なる出入なく、東北岸の基隆・宜蘭に小屈曲があり、南端の鷲巒鼻と猫鼻頭との間に淺い灣入があつて、共に僅かに陸奥・薩隅等の陸端の特色を繰返す如く見えるに止る。

等高線により陸内の凹凸を視れば、東西兩岸の差異は海岸線の輪廓よりも更に大で、東岸は急斜して海に入り、陸棚も狹く、西岸は之に反して南端を除いては全く遠淺で、之に接する沿岸に臺地及び平地が廣く發達し、彰化から東港に至る間は、沖積平地の幅三四十粁に達し、海岸に沿ひ陸内に潟湖を抱く沙洲多く、海中にも低潮に露はれる沙洲(鯤身)が並走してゐる。鯤身とは、米國地文家の外

洲 Off-shore bars と呼ぶものゝ一種である。

東岸の急峻海岸の中最も雄壯を極むるものは、蘇澳タッキリ溪間の古期岩層を横斷した部分で、直立の斷崖である。英國航海者ギルマード氏 Guillemad の左の記事は、此の奇觀を描いた絶妙の文辭である。

昧爽の頃、重雲の闇中に包まれた諸山、烟霧を透して左舷に彷彿として突起す。針路を轉じて之に向ひて徐行するに、日漸く出で最高の峰突を射て紅熾光を發せしめ、下には黯雲の襯衣依然として掛り、その間隙より背後の更に黯黑なる處を露はし、宏大なる崖面に淡黑色の瀛塊を注射せり。日はなほ見ざるも大空の灰色を彩どるに桃色の線條を以てせり。

扁舟飄颻として東風に從つて進む間に、衆皆恍然として墨を流せるが如き海を越して熟視し、如何なる感覺遲鈍のものをも壯大なりと思はしむる所のこの光景に對せり。

烟簾漸く高く捲き去られ、嶺頭・峰尖・峽谷、或は隱れ、或は見はれ、光淺漸く廣く、雲羅漸く薄く、漸く明となり、晝全く夜に勝ちて之に代はるや、終に光明清朗となり、之を遮るものは唯壁面の半途に雪白の輕雲一綫あり、懸りて搖がざるのみ。世界第一の高斷岸は今や睫眉の前に屹然たり。

朝鮮半島の海岸線

朝鮮半島の海岸は日本諸大島と全く趣を異にし、日本海に面する東岸の永興灣以北の北部は鈍角をなして屈折し、これ以南の南部は鈍き凸彎を描き、西岸は無數の小屈曲に富み、長山串以北の北部が折線狀に大なる屈折をなして、以南の南部の弓狀に近き大屈曲をなすに對して、東岸の南北兩半の形狀を繰返す如く見えることが注意されるに止る。南岸釜山・木浦間は小なる屈曲の頻繁で灣入と突出の深くして込み入り且つ接近して島嶼の多いことは山陽道の瀨戸內海に面する海岸及び九州の西南岸に比して更に甚しい。

朝鮮東岸の南半は花崗岩の高原狀を成して海に入る處で、林木に乏しい嵯峨たる山嶽の麓に極めて狹き沖積地が出來てゐるのみで、河流は短いがその海に注ぐ處だけ河口に沙濱が廣がり、白砂青松の間に漁村が隱見する風景は沿岸航路の舟から望んで頗る面白い。北半特に城津の東北舞水湍の突角の邊は、高原狀をなした粗面岩と玄武岩の互層した熔岩臺地で、千米に近い斷崖が直立し、その壯觀は臺灣東北岸に讓らぬ。

釜山・木浦間の南岸は大小無數の島嶼が深い入江を抱いた半島と錯雜交互し、全く半島と島嶼との迷宮を成してゐる。此の如き隱れる場處の多い海岸は、飛行機偵察の行はれるまでは、軍事上に絶好の要害を占めるは當然で、我が征韓の役に豐臣氏の兵船が陸兵と並進し得ずに、李舜臣の韓船に珍島沖で喰ひ止められ、日露戰役にロヂェストヱンスキ提督のバルチック艦隊が東郷元帥に殲滅されたの

は共に此の天險の意義が發揮されたのである。

此の沿岸を航海した英人バジル・ホール Basil Hall の記載（朝鮮西岸及び大琉球島探險航程記、一八一八）は、ルクリューに引用された名文である。

我々は百浬以上にわたり八方に無數の群を成して碁布する島嶼の間を縫ふた。初めには其數を算へ且つ我々の製作中の海圖上にその位置をも記入せんと試みたが、餘りに多くて此の努力は無駄骨に了つた。島嶼は大さが區々で長さ數百碼から五六浬に及び、その形狀も亦た千變萬化し、更に檣頭に登つて展望すれば、東にも南にも眼の及ぶ限り後から後から現はれ來つて、屢百餘島が一瞬間に見えた。海は油を流した如く天は麗かで、島の多くは溪間に樹木茂生し禾穀黃熟し、常に生氣が充滿するやに感ぜられるが、殊に沿岸航行の迅速なる爲め、絕えず景觀が變換して一段の面白味を加へた。此の海岸には未だ毫末も精確に近い海圖といふものがなく、我々が觸れた場處の位置の如きは六十浬（一度）以內正しく記入されてゐず、何れの地圖にも二三以上の存在を示すものがないのに、實は此の海岸は約二百浬の間陸岸から十五乃至二十リーグまで島嶼が碁布してゐるのである。此の東岸と西岸との顯著なる對照は主として地磐の變動に起因し、東邊の斷層に沿ひ隆起地盤全體として西に傾斜した結果で、東岸は二百米等深線が海岸に密接して並走し、西岸の百米以內の淺海の廣いのとの關係も同一の原因を語るものである。

第五章　地　勢

地理的景觀

日本群島は半ば海面下に沒した山嶽であるから、地勢は一般に山谷多く、平地は海岸に沿ふた低地及び山嶽の走向に並走する大河流の縱谷に稍廣く發達するに止る。その凹凸の大勢は大抵島の延長の方向に一致するが、地盤を構成する岩層の性質と構造によつて形狀を異にし、風水の浸蝕作用の程度によつて高峻の度合を異にし、東亞大陸の內部朝鮮半島に比して頗る複雜で、局部の變化に富んでゐる。

滿洲から鴨綠江を渡り、朝鮮半島の西邊に沿ひ南下して、平壤京城を過ぎて忠淸北道の秋風嶺を踰え釜山に來る旅客は、遼東半島と秋風嶺以東との山地とを除いては、千粁に近い奉天から釜山に至る間の線路では概して開放した原野、幅廣く底淺き河谷を見るべく、遼河の流域の茫漠として際涯を見ぬのに對し、鴨綠・大同・漢江・錦江の諸河は遙かに狹隘なるも、秋風嶺を踰えた後は洛東江に沿ふた邱陵山嶽の更に著しく狹隘局促なるを感ずべきである。朝鮮海峽を渡り下關から大阪京都名古屋を

過ぎて東京に入る沿道では、淀川・木曾川・天龍川等の河口平野を除いては、海上に對して開放した展望を得るのみで、山嶽丘陵の起伏の複雜で且つ變化の急激なるに打たれざるを得ぬ。

而して此の地勢上の對照と共に顯著なるは、居住差異から起る風景である。都邑及び村落が南下するに從ひ數を增し、大さを增し、海峽を渡つた後は山腹の植林、田畑の耕作は、工場その他の施設物と共に全く面目を異にし、人文上の對照が地文上よりも更に大なるに驚かぬものはない。

然れども地勢及び風景は又た地理上の位置卽ち緯度の高低に伴ふ氣候の差異にも因るもので、北回歸線の横斷する臺灣は西に面して開放し、平野から東に向ひ邱陵となり山嶽となり、全群島中の最も高峻なる脊梁山脈に至る間の高度の增加し、傾斜急峻となるに伴ひ、住民は支那移民から熟蕃生蕃に漸移し、甘蔗畑・樟腦林・針葉樹木となる。此の地勢と氣候とに因る大なる變化は、地文學の基礎たる諸現象相關の理法に想着した兩米洲の熱帶地方を旅行したフムボルトが、初めて目擊した所と或る程度まで類似してゐる。

同じ緯度の位置に在つても、大洋中に噴出した火山の頂に過ぎぬ豆南の中硫黃島の如きは、氣候の雨量に乏しき爲めに草樹木の生長疎らで、大部分新らしく噴出した火山砂礫の沙漠を成した處大部分を占め、小笠原島は之に比して稍雨量多く、植物も繁茂し、黑潮に洗はるゝ八丈島は雨量非常に多く從つて三原山（八丈富士）の山腹に牧草生じ、牛の放牧に適し、內地の風景に彷彿たるを認める。

關東平野より以北東北日本の北部に進むに從ひ、平濶なる原野火山の裾野及び山嶽に並走する大河流の谷間に發達し、往々にして谷地と稱する沼澤が出來て、泥炭となつた處もある。此の如き濕地は北海道に更に廣く、樺太に至れば冬季凍結し夏季表面のみ解けて、水笞類のみ生長する所謂ツンドラが平野の大部分を占め、風景全く荒涼として北極圈內の氣分が興る。

人文上亦た南北の對照著しく、馬來から漂着して臺灣の山地に入り込んだ生蕃、小笠原島のバナ、の日蔭にペンキ塗りのバンガローに住むタナカ人（米人との雜種）等と北海道の局部及び樺太のアイヌ人、樺太のオロッコ及びギリヤク等の北亞蕃民とは、環境の相異よりも甚だしき人種上の相異がある。

此の如き日本群島の南北に於ける地理的景觀の差異は、人をして群島の地理的區劃の存在に氣付かしめ、これを適正に設定することにより、上述の現象を更に明快に說明せんとする要求を生ぜしむるべきである。

日本群島の地理的區劃

日本群島の幹部をなす本州・四國・九州の三島は、多くの地誌には所謂富士火山脈で南日本と北日本とに兩分することになつてゐる。此の兩分說の由來は今から觀れば古く四十餘年前、エドムンド・

ナウマン Edmund Naumann, 原田博士等の日本群島の地質構造を研究した頃に起つたものである。日本群島はナウマンが初めて伊豆大島から富士・八ヶ嶽・妙高等の諸火山を通ずる火山噴出帶を大地溝帶（フヨッサ、マグナ）と呼び、是で日本を南北に二分し、次いで原田博士が此の地帶で、支那・樺太兩褶曲系が對曲すると唱へて以來、南日本北日本とに兩分することが、地質と地勢とを聯絡して考察する定說となつたのである。然し我々は研究を進むるに從つて、此の地質構造に基いた兩分說を地勢上の區分に適用することを躊躇するものである。

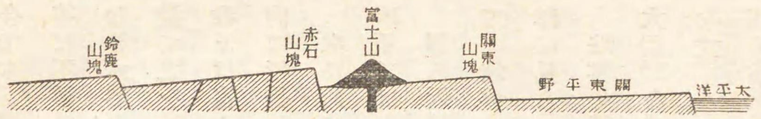
日本群島の西半では一般の山嶽の方向は東西に近いが、富士火山の西に抵つて走向を轉じて北に彎曲して、木曾・天龍・富士の諸縱谷は吉野・紀伊等の諸縱谷と全く異つた方向を取つてゐることは、如何にも著しい地勢上の特色に相違ない。其の地質構造との關係を初めて明瞭に認めた諸大家の識見は我々の敬服する所である。然れども地勢上の地域を分劃するに當つては、種々の地文上の條件を考慮するを要し、比較的單純な地質構造上の一特色が如何に著明でも、其他のものを捨てゝ是のみに據る譯に往かぬ。

此の兩分を地勢上の區劃に採用することに不同意である理由は、第一に所謂火山脈なる名稱の頗る不穩當であることである。何となれば是は火山の脈と考へることが出來ぬことは、白山火山脈なるものゝ如く飛々になつて、其脈絡が地勢上に不明な場合にも用られて居るので明かで、富士火山脈の場合でも、御坂山脈を飛越えて北に續いて居る。又た火山性山脈とも混同されるが、同じ事實から是も甚だ不穩當である。所謂火山脈なるものは眞の山脈とは性質を異にしたもので、眞の山脈の如く明瞭な分水界などを作るものではなくて、單に數多の火山が一定の方向に排列してゐるに止るのである。從て之を分界線に取ることは殆ど無意味で、白山火山脈とか霧島火山脈の如き特に然りとする。故に我々は富士火山帶・霧島火山帶などと呼んで、地勢上の分界線としての意義を除いて、單に一定の走向に延長した他方に多數の火山が噴出した地帶として示すのが宜しいと信ずる。

次に此の富士火山帶は日本群島の地盤構造から觀て、最も重要な横斷坼裂線であることは、重大な事項ではあるが、此の如き横斷坼裂線は此の外にも少なくも二三は認められる。

即ち近畿地方の海の縊れ込んだ部分は其の一つである。關東平野の兩側にも同じ樣な坼裂線があつて、地盤は四段の段階狀に別たれた部分から成り立ち、其の坼裂線の方向と多少一致した灣入が太平洋に見られると想はれる。

地盤を構成する岩層の排列を觀るに、富士火山帶に至つて赤石・關東兩山脈の間に地層の走向が一大凹彎を成すのは著しい事實であつて、日本山嶽兩分說では之を基礎として北日本と南日本に大區劃を立てるのである。然れども是と比較して稍小ではあるが、飛驒・丹波兩高原間に鈴鹿山脈の北端・即ち赤阪邊で一の凹灣を成した褶曲が認められる。前に擧げた縊れは此の部分で、不破關の重要な交



第十八圖　中央日本想像縱斷面

通路が出來てゐる。又た關東山系の東邊は東北に筑波山塊に向つて續かずに、東に銚子半島に至つて此處で斷絶して、遠く北海道の蝦夷山系に連つてゐる。其の故に是から北は日本群島の所謂內帶の山嶽が北上・阿武隈兩高原を成して居る譯で、是より南の地域とは全く根本的に相違してゐることは、是れ亦た甚だ大切な事實である。

此等の地盤構造から考へると、舊日本の三大島嶼は伊勢・敦賀兩灣間の第一線と、銚子半島の第二線で南北の方向に橫斷せられて居る。是より北は第三の非常に性質の異つたもので、關東山系の北邊から銚子半島の北なる利根川河口に引いた東西の一線は天龍・紀伊等の縱谷と略ぼ同じ性質のものであるから、是を以て東北部との境界に取ることが出來るが、是は關東地方を兩分する事になるから、氣候人文等の關係を顧慮して、略ぼ勿來・白河・念珠の三關を連ねた線で分劃して、磐城・岩代以北の奧羽地方だけを區別する方が適當と考へらる。我々は此の如く西南日本・中央日本・東北日本に三分せんとするのである。

三區劃の地勢的特色

此の三分說の根據は地勢に於ても第一は水平肢節、第二は垂直肢節、第三は河流系が何れも西南・中央・東北の三部に於て顯著な相異を見るに在る。

水平肢節に於て著しい區別の點を擧れば、西南日本では九州に於て中央に阿蘇其他の火山の噴出によつて充塡せられた外は、太平洋と日本海岸との中間に縱走する一大凹地が海水を湛へて瀨戸內海となり、其の東の端が屈曲して琵琶湖となつてゐる。中央では此の如き凹地の連續を見ずして、太平洋から灣入した伊勢海・濱名湖・駿河灣・相模灣及び東京灣が多少深く切り込んで居る。西南日本では豐後水道・土佐灣・紀伊水道・熊野灘の如く楕圓弧を描く灣入を成し、突角は何れも南に尖つた銳角に終るが、中央日本の南岸の灣入は此の如き規則正しい輪廓を有せずして、突角は亦た伊豆・三浦・房總三半島各特有の不規則を呈してゐる。日本海岸の方も中央日本には遠く突出して、能登半島と佐渡島とが雙子の如く海中に丘阜の頭を露はす外に、敦賀・富山兩灣の深い切り込みが、二百米等深線下に存在するに反し、西南日本では幅百數十粁の陸棚が中國の大部分に亙つてゐる。

東北日本は又た全く此等の場合と趣を異にし、太平洋岸は大きな灣入のない海岸となつてゐる。それは阿武隈・北上兩高原の輪廓と共に東に向つて鈍き圓弧を描き、其の中間に金華山近傍の牡鹿半島の小突角を有するに止り、日本海岸も多少之に並走した曲線を成し、男鹿半島のみ同じく小突出として存在する。

垂直肢節も亦水平肢節に從ひ、中央に海を湛へた西南日本は二千米に達する高峰なきに反し、中央

日本では所謂日本アルプス地方は三千米以上の高峰を有し、富士・御嶽・乘鞍の諸火山も三千米を越え、東北日本にも鳥海・岩手の如き二千米以上の火山がある。平地の分布に於ても西南の瀬戸内海に沿ひ發達したのに反し、中央は兩洋海岸に沿ひ、東北に至つては南は太平洋岸・阿武隈河谷・會津平野の三列があつて、北に進めば、第一者は北上河谷に連り、第二者は最上・御物・能代の三河上流の平野として山間に二條の低平地を有してゐる。

河流系も各異つた發達をなし、西南日本では外側太平洋の河流は多く山嶽の走向に從ひ縱谷を作るも、中國の河水は一定の方向を有するものがなく、東北日本では平地と二條の山嶽に並走する縱谷に平地を作り、中央日本だけは全く兩者と趣を異にして諏訪湖の近傍を中心として四方に放射狀に流出して木曾・天龍・富士・千曲の諸河を成してゐる。

方志

第一章　關東地方

總　說

區域　關東地方は昔の東海道の中、武藏・相模・上總・下總・安房の五國と、東山道のうち上野・下野・常陸の三國を含む謂はゆる關東八州にして、碓氷・箱根兩嶺以東に展開した大平野とその周邊の山地の總稱である。現在の政治區劃は東京、神奈川、埼玉、千葉、茨木、群馬、栃木の一府六縣に別れ、その管轄國郡は左の如くである。

東京府　武藏（八郡）伊豆七島　小笠原島
神奈川縣　武藏（三郡）相模
埼玉縣　武藏（九郡）
千葉縣　安房　上總　下總（七郡）
茨城縣　下總（二郡）常陸
群馬縣　上野

栃木縣　下野

名稱　關東地方といふ名稱は他の諸地方と同じく近年起つた地方別である。この地方はわが帝國首都東京を含む地域であるから、京都に對立して東京と名づけられる以上は東畿地方と呼び、謂はゆる近畿地方を西畿地方と呼んで互に區別すべきである。明太宗永樂帝が南京から燕京に都を遷した後、もとの直隷省を南直隷省と改めて、これに對して北京周圍を北直隷省と名づけた例に從へば、それが正當である。しかるに明治元年の行幸があつた以來、正式に遷都令が公布される機會がなくて、平安京が今も京都と呼ばれて、東西兩京とその近畿地域とに關する名稱が、判然たらずに六十年を累ねたのである。

この地方がわが帝國の首腦たる地位を占めるに至つたのは、歴史上から觀れば日本本州の東半が平安朝の間に次第に開發されて、ここに有力なる土豪の割據して、中央の政權を凌駕する武家政治の中心ができて、終に今日中央政府を置く結果を生じたのである。しかれどもこの如き歴史の進行には、主として地理的因子が働いたもので、これを明確に了知せねば、皇畿として有するこの地方の眞の意義を理解し得ない。左にこの因子を歴觀することにする。

中央の位置　關東地方が日本群島の東西の走向から南北に轉ずるところに位し、全群島中央の位置を占めることが第一の重要なる因子である。地圖を披いて一瞥すれば、近畿地方が帝國主都の所在地たるには、西南日本に偏在し過ぎてゐることは明かに認められる。

平安朝初期に田村麿等の東北經略が着々として奏功して、蝦夷種族の跳梁により皇化の普及しなかつた地方に、行政組織が設定せられる時に、武力による鎮撫警備の機關として必要なる押領使の如き土着豪族の出現を見たのである。故にその占據する土地が、漸く開發されると共に、强悍なる家子郎黨を養ふ武藏八黨の如き、氏族の單位が起るのは當然の過程であるが、かれ等の源家嫡流の御曹子を戴いて盟主として、糜爛した中央集權の政治を打破して鎌倉幕府の成立を見た際に、六十六國を統制し得る大機關となつたのにも、この中央の位置を占めてゐたことが至大の意義があつた譯である。奥羽に割據して富强を誇つた藤原秀衡が、この成行を傍觀しつゝ終に鎌倉幕府に對抗し得なかつた事實は、この位置の關係を雄辯に反證してゐる。

平衍なる地勢　しかれども中世以後の關東地方の占むる位置の向上には、平衍にして沃饒なる大平野の存在が第二の重要なる因子として働いてゐる。西方から碓氷小佛または足柄の山道を降つて東に進むものゝ目を駭かす風景は、山地を離れると共に一變して、小高い丘陵の起伏する間に廣濶な洪涵地を流るゝ大河谷である。しかしてその中心を占むる武藏野は、月影が草から出て草に入ると歌はれた如き景觀を呈し、手を延ばせば屆くかと疑はれる狹隘な山間低地か、狹長な海岸平地を通行し來つた旅客には、廣大無邊なる空間の展開に胸宇の頓に豁然たるを感ぜざるを得ぬ。

この平衍なる土地は、勤勉なる農民に無限の活動を容したから、戰國以後河水暴漲による被害が防遏されるに從ひ、丘陵臺地の間に行はれた水田が、低濕なる河谷の洪涵地に延び、今や總面積三千二百方キロメートルに約一千三百萬の人口を包擁し、一方キロメートルの密度四百人に垂んとする、人煙の稠密を可能ならしめた。

かくの如き人口稠密なる居住狀態は、主として農業に因るもので、その大部分は畑地の耕作による收穫にして、麥大豆の生產は關東に特有なる醬油釀造業の成立を見、桑畑の墾拓によつて養蠶製絲等の纖維工業の發達を促したのである。

三面の山地　關東大平野が西と北に山嶽が崛起し、東と南は太平洋に洗はれてゐるのは、東海道地方の南のみ海に面するのと、趣を異にするのみならず、南邊に沿ひ相模房總の兩地方に亙り、丘陵及び山嶽帶があつて、この第三邊もまた實は單に平地が海に臨んでゐる譯でない。この三者は各異つた地形を有し、西界の關東山系は秩父小佛の間に外帶の古期岩層から成つた高峻なる山嶽地で、これに續いて更にその南側に大山に見る如き第三紀層とこれを貫いた丹澤山噴出岩塊の山地が隆起し、同じく高峻な地形を有する。その東端は深谷から相摸川の西側に沿ふて引いた南北の一線を東界とし、これ等の地塊に對して著しく沈降した地塊が、鮮新世から洪積世にかけて海面下の陸棚となつてゐたもので、その後再びやゝ降起して今の大平野になつたものである。

南邊の丘陵地は丹澤山地塊の續きが一旦斷絕して、再び三浦房總兩半島の丘陵地となつて隆起したもので、その房總峯岡の小山脈は丹澤と同じ閃綠岩の一噴出帶である。鋸山から東に走る淸澄山脈はこれよりも遙かに高くて房總の國界分水嶺を成し、北に兩總の丘陵となつて利根川南邊まで蔓延してゐる。

北邊の山地は鬼怒川と那珂川上流の濶い溪谷平地を隔てゝ、その東に阿武隈高原及び八溝山脈の南部の山地があつて、筑波山塊はその南端にして、馬の兩耳を立てた如き秀容を現はしてゐる。

西北の方には越後山脈の東南角に當る古生層の足尾山塊と、淺間山から東北に走る榛名・赤城・日光・高原等の火山が信越・岩代諸國との間に蟠崛してゐる。

これ等の山地の排列は、關東地方の陸上交通の幹線を決定するに重要なる役割を演じ、西邊は東西に走る山嶽の走向に沿ふて溪谷を利用して東海道・甲州街道・中山道が開かれ、東北邊は南北に走る地塊間の溪谷とその邊緣の海岸平地に沿ひ、奥州街道及び濱街道が通じてゐる。

これ等の交通路の存在は、關東大平野の中心的意義を更に重からしめる第三の因子として見逃がしてはならぬ。

東邊と南邊の海岸の對照　地圖を披いて何人も氣のつくのは地方の海岸が、東邊と南邊とで全く趣を異にすることである。東岸が利根川河口に突出する銚子半島の犬吠岬によつて、北の大きな鹿島灘

海岸と、南の小さい九十九里濱との二つの弓形の部分から成つて、全く小屈曲を缺いてゐる。これに反して南岸は西邊が伊豆半島に接する外に、狹小なる三浦半島と三角形を成して、その東南に遙かに突出した房總半島があつて、半圓形の相模灣と兩半島間に深く入り込んだ東京灣とを抱いてゐる。

鹿島灘の高い砂丘に隔てられた霞ヶ浦の景相は、東海道沿岸の濱名湖が僅に海面との間の堤を成した砂嘴の發達に比して、頗る顯著なる相異を呈するもので、丘陵の緣を取つた、幅の廣くして低い砂丘平地とでも呼ぶべき九十九里濱は、また特異の一海岸型式を代表するものである。房總三浦兩半島の第三紀丘足の斷崖を成して海に洗はれる海岸は、この兩者と更にまた變化に富み、東京灣の平滑單調なる低岸からこの地方に行樂するものが、景色の變化を嘆賞するのには一理があつて、金澤八景など、激賞するのも怪しむに足らぬ。

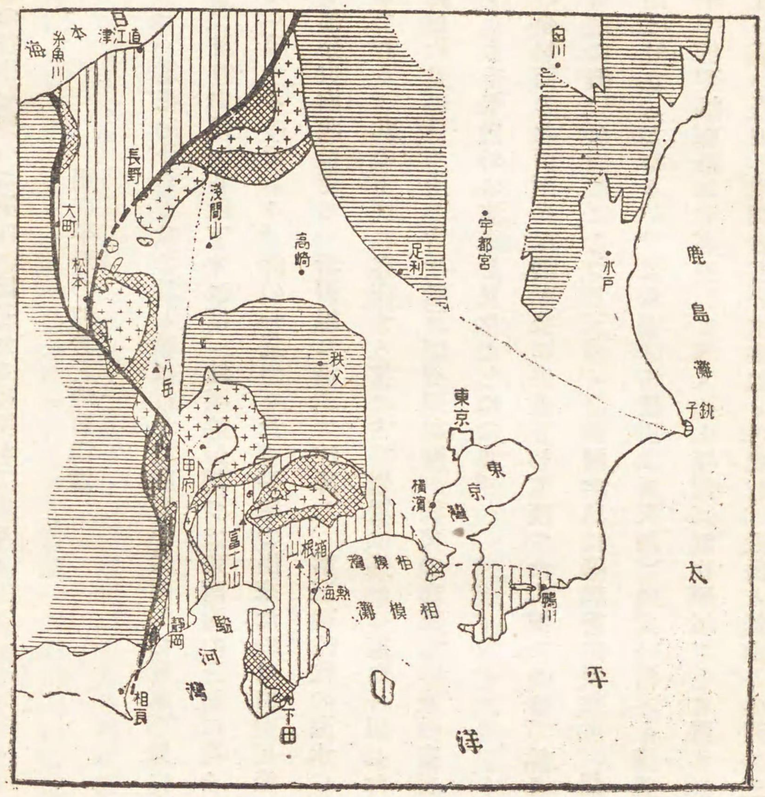
しかれども、この如き細形のわれ〳〵に與へる感興に耽るよりも、海岸線の屈曲がこの地方に對して、如何なる關係を有するかを考へるのが更に大切である。

德川幕府時代には旗本八萬騎を擁し一大封土を作つて、東北及び西國に犬牙錯雜する大小名を制馭するに便なる位置を占有したのに過ぎなかつたが、開國以後太平洋彼岸の北米地方との交通が頻繁を加ふるに從ひ、東京灣にはこの洋上における最も重要なる貿易港の發達を促したから、世界的意義が次第に增進しつゝあるのは多言を要せぬ。故に海岸線の大屈曲ある南岸の存在が、この地方に新らしい皇畿の資格を與へる第四の因子たるは明かである。

關東平野の地勢と地質構造

成因　尾花を分くる秋の月と歌はれた武藏野を展開した關東平野は東西百四十粁南北百粁の廣袤を有し、筑波山頭から瞰下すれば、地平線が却つて東南西の三面に高まつて身が大きな擂鉢の底に居るが如く感ずるのである。此の一望坦々たる平地の出來たのは白堊紀後の地盤の變動で關東山塊の東に連る部分が南北に走る一圻裂線に沿ふて沈降し、第三紀時代の海水に被はれて、厚い堆積層が出來た結果である。其の下底に存在する筈の古期岩層は遙かに東に斗出した銚子半島に突角を露はすに止り、若し此處に見る所の古生層及び白堊紀層が秩父の志賀坂峠邊の高度を有したものと考へ得るとせば、少くも千米内外の沈降を見たことになる。

此の平坦面の北西兩邊は變動後に地壘として殘つた山塊である。然るに第三紀後に更に道志山塊から東南東に續いた褶曲によつて三浦・房總兩半島に隆起帶が出來て、鋸山連嶺は其の最も著しい部分で今尙ほ峙立してゐるが、恐らくは相模川（馬入川）の廣い河谷と浦賀水道との間の地盤は其の隆起後に子午垢裂線に沿ふて陷沒して馬入川と境川（武相國境）とに限られた所の東に凸弧を描いた半月形に近い低い臺地と沼澤の多い洪涵地とを成し、大山と鋸山との間の三浦半島だけが低い邱陵となつ



第十九圖　關東地方地質構造圖

て居るのであらうと想はれる。

此の小變動の起る以前には北西南三面に高地を環らし、中新世には西北が開けて日本海及び諏訪佐久地方の海面との通路を持つた日本海の入口があつたが、大體に於て兩總常陸の東面のみに開放した一大海灣の狀を成し、銚子半島

は遠く此の灣口に孤峙してゐたのである。而して此の海灣の小灣入と想はれるのは五日市及び秩父で、特に後者は深く山塊の內部に入り込んだものである。

鮮新世の堆積　此の鮮新世の海灣中の堆積物は横山博士の武藏野層と呼ぶ所の鮮新世の砂及び凝灰質粘土層で、洪積世の初に至つて淺海を成し、其の厚さは頗る大きく、山崎博士の嘗て報告せられた東京帝國大學構內の鑽井一、三四八尺の下底までの撈取標本によつて、約百米以上の處までは細礫砂・粘土を出し、處々に木片もあるが、是れ以下は砂及び粘土となり、深くなるに從ひ淺海性から深海性となる事實が明かとなつた。此等の堆積層の時代は標本では明かでないが、一二二米(四〇二尺)以下に出る介化石の如きは、疑もなく武藏野層上部のものであると察せられ、又た此の部分に厚く發達した砂層は更に東の舊灣口に近い千葉以東に於て遙かに厚層を成してゐる。此の地下の構造は關東地震後復興局に依つて試られた東京市及び横濱市の多數の試錐に依つて愈〻明にされた。

此の鮮新世海灣の堆積砂中には火山岩の成分たる石英・輝石・斜長石等を含み、周邊に噴出した火山の拋出物たることは明かで、特に凝灰質物の多量なるは、此の舊火山活動の旺盛を想はしめるに足る。

洪積世以後の變動　洪積世以後の變動は著しくは地勢上に現はれて居らぬが、相模川・東京灣の陷沒は平野の地盤の沈降と共に起つたらしく、周邊の山地の岩礫を流した礫層が局部に發達し、東に至

るに從ひ其量を減じ、兩總は「石なし國」と呼ばるゝ如く之を見ない。其分布は鈴木博士に從へば入間川の南岸阿須兀（あすはげ）・多摩川の西側草花・田中等では、壚坶粘土及び砂礫層の厚さ四十乃至六十米に達し、駿河臺・王子・品川では二十米を超えないといふ。而して此の堆積層が多摩川・桂川間に高い臺地を作り、杉山峠の近傍では二百乃至二百八十米の海拔高度に達し、厚さも百餘米に達して居る。是は堆積層の出來た後に恐らくは再び隆起して生じたもので、沖積世卽ち現在の河流の浸蝕作用は其後に働きつゝあるものであらう。

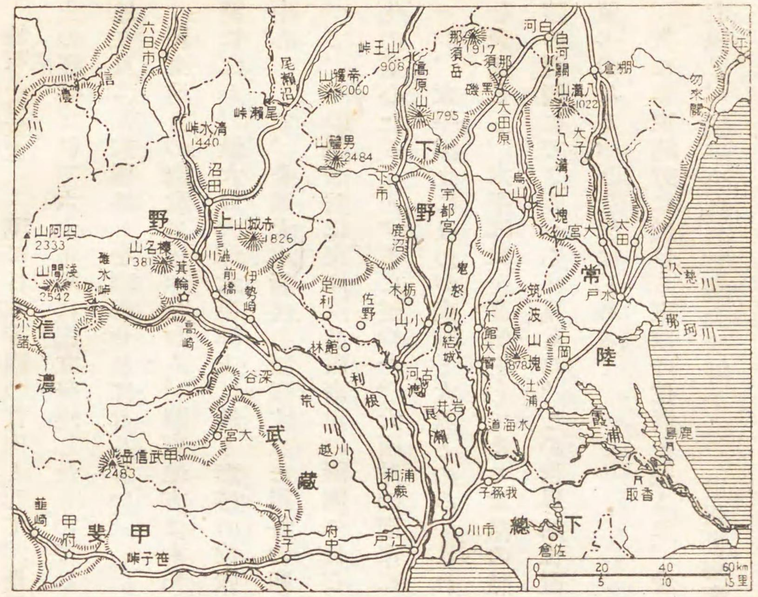
想ふに洪積世以後に屢〻起つた僅少の地盤昇降運動の結果として種々の變化を見たもので、常總に亙る地盤が徐々に隆起して幾多の河谷が臺地の間に刻まれ、其後に又た小なる沈降が起つたので、今の霞ヶ浦其他の河谷が變じて湖沼となり、此時に東京灣に流れてゐた利根川の河道に連結したものであらう。此の如き變化があつて、是が爲に有史以前に既に頗る複雜な派流を生じ、戰國後に堤防を築いて河道を固定せんと試むるまでは、汎濫の時に盛んに分流したことが想像され得る。此の洪積世に入つてからの變遷を想へば、東京市街の東半を占むる下町から北に向つた元利根川及び荒川に沿ふた地帶が、臺地に比して異常に軟弱な地盤なることも亦た怪むに足らぬ。

大東京

地理上の位置　現に日本帝國の首府として、世界巨大都市中の第三位を占める大東京は、單に政治上の關係だけで六十年來に成立發達したものでない。その將來を卜知せんとするには、地理的位置と地文及び人文關係とを理解せねばならない。

關東地方の概說に述べた如く、關東地方は本邦の中央部を占め、東京はまたその中央に位して東京灣に臨み、最大の大洋太平洋上に最も形勝の位置を有してゐる。この位置は奠都以前には武家政治の中心として、全國大小諸侯を制馭するに絕好の關係を持つに止つたが、太平洋が世界交通の大道となつて、その周邊特に東岸及び西南岸の諸國の日ごとに開發されて行く現在では、世界政治・經濟・文化の重心たらんとするに至つた。大西洋の兩岸にはロンドンとニューヨークとが雙眼の如く光つてゐるが、太平洋上にはわが東京と大阪とのみがこれを代表する位置にある。これは北米大陸が大西洋岸を表側とし、太平洋岸を裏側としてゐる當然の結果で、近き將來に二百萬を超える巨大都市が北米大陸の西側にできるべくは見えぬ。この世界的位置の益〻價値を發揮するに從ひ、東京の將來が益〻有望多幸なるべきを想はしめる。

次に關東地方に於ける東京の位置を觀るに、會津街道の山王峠から房總半島の突角洲崎に引いた南北線と、銚子半島の東端犬吠岬から、甲州靑梅街道の裏路大菩薩峠に引いた東西線との交叉點に當り、全地區の中央部を占めるのは地圖を披けば、何人も直ちに氣付く筈である。海岸線を伊豆半島か



第二十圖　關東平野北部交通圖

ら鹿島洋まで追跡すれば、相模灣の半圓を描いた灣入に續いて、更に深く東京灣が廣い平野の中央部まで入り込んでゐることが著しい第二の點である。これを約言すれば東京の地理的位置の特徴は大平野の中央に入り込んだ灣頭を占めることで、その海陸交通の中心となる優越の地位は、瀬戸内海に於ける大阪、伊勢灣に於ける名古屋と共通である。

交通幹線の集注と東京　次に交通幹線を追跡するに、その第一は西南に向ふ東海道線にして西南に向ひ足柄箱根兩峠の何れかを越えるまで、一〇〇キロの間に多摩相模酒匂の三河を渡り、丘阜平地の間を縫ふて走るので、大なる地形上の障壁がない。

その第二は西に向ふ甲州街道(中央線)で、八王子の西で小佛、笹子兩峠を越えて甲府盆地に通ずるものである。その第三は西北に向ひ、高崎から折れて西に向ひ碓氷峠を越える信越本線と、前橋から折れて北に向ひ清水越を越える越後街道とで、尚ほその中間に青梅を經て多摩川を溯り大菩薩峠または柳澤峠を越えて笛吹川の上流に出で甲府盆地に入る間道あり、西西北に向ひ飯能、秩父を經て神流川の上流に入り、十石峠を越えるもの及び川越、寄居を經て鏑川溪谷に達し、餘地峠を越えるものと共に信州佐久平に通ずるものである、

その第四は北に向ひ宇都宮を經、白河の關を越える東北本線で、鬼怒川その他の河道を通ずる廣濶なる平野に沿ふもので、第三との間に突出した足尾山塊の麓に沿ひ、鹿沼・栃木・佐野・足利・桐生等の市街を連絡する交通網がある。

第五は東北に向ひ土浦・水戸を經て、勿來の關を越えて奥州の太平洋岸に通ずる濱街道で、第四との間に連互する八溝、筑波の山脈は、大小の地塊に分かれ、また那珂川・久慈川の上流は南北に走る溪谷を成してゐるので、北方への交通の支線及び東西に地塊間を横斷する支線が、更に密なる交通網を作つてゐる。

第六は東に向ふ利根川下流の河運と、これに沿うた我孫子から銚子に至る鐵道線で、大平野の東邊に發達した丘陵及び臺地と、その低窪部を滿たした霞ヶ浦、北浦の兩湖、更に北の涸沼、河南の手賀沼・印旛沼・長沼を含み、類例の乏しい特殊の水郷地方を成し、その交通もまた大に意義の異つたも

のである。

第七は東南に向ひ千葉に至り、東に向ひ九十九里濱沿岸平地及び背面の丘陵地に通ずるものと、南に向ひ房總半島の南岸に達するもので、本州の東南邊に突出した丘陵勝ちの地方であるために、これまた農業及び漁業を基調とする特殊の意義を有する交通線である。

これらの諸線とその中間の大小の都邑を結節とした交通網の密度は本邦に比類なきもので、東京は前に述べた位置の關係からその中樞たるに適合するのである。故にこの多種多樣なる各地區からの移入とこれに對する供給とによる物資集散の中心市場たる東京は、關東平野に於ける一大都市としても優に人口百萬以上の大を成し得べく、これに加ふるに東北日本一圓の海外貿易の門戸たる横濱を控へて、帝國の首府となつてゐるのであるから、全人口の十分の一がこゝに集團を造るのは當然で、この趨勢は將來に亙つて底止することはない筈である。

保健上の問題　この如き自然の關係から向ふべきところに向つて進行を續けるものとすれば、われわれは東京の巨大都市としての發生に都合の好い地文的條件を列擧するに止らずして、都合の惡い條件に就いても公平に觀察批判して見ることが必要である。

日本はインドから支那に至るアジヤ大陸の南邊及び北邊に亙る季節風地域に屬する關係から、夏季高溫で冬季低溫なる異常の氣候を有する地方である。東京の如きもインドのボンベイ・カルカッタ、支那の南京・漢口・北平（北京）に比し海岸の緩和作用に惠まれてゐるといへ、夏季の蒸し暑いことと冬季乾風の寒いことゝは北緯三五度の土地として、嚴酷であるのは否み難い事實である。

しかるに江戸時代から今日までに、大小名の大邸宅の庭園や社寺の樹木ある境内等は大部分建築物に置き換へられ、新に興る公共建物のできる毎に公園の一部が蠶食されるといふ成行である。また中流階級の住宅も、文化式となると共に單位面積が減少し、庭園などは殆ど全滅といつてよい狀態に瀕してゐる。これは市内居住者の健康に對する重大なる脅威である。中流階級の住宅を郊外に求むる傾向の次第に盛となるのは已むを得ないと同時に、下層住民の衞生は日々に惡くなるわけで、これを緩和する方策は、市政當局が今日に樹立せねば、將來の發達に重大なる障害となるべきを杞憂される。

震害と火災　東京の巨大都市としての資格に於いて最大の缺點が震害と火災であることは周知の事實である。豐富なる給水の施設と不燃燒質家屋の建造により、防火の方は頗る效果が擧つたが、前者は數十年の間隔をおいて突然襲來するもので、その炎害の程度は地震の强度によつてまちまちであるために、家屋の損害と生命の喪失を確實に除き避ける途が、大正十二年の大震災を經驗した今日と雖も、未だ十分には開けてゐないのは遺憾である。しかれども三百餘年間の大地震の歷史に徵して明かなるは東京自身を震央とする激震は極めて稀で、大地震の震源は酒匂川から相模灣海岸に沿ひ房總半島に弧狀を描いた震央帶に起つたものが多いのである。故に地盤の薄弱なる下町に、構造の不十分な

る家屋の密集することが損害の多大を來したもので、山手に家屋の倒潰を見ることは少い譯である。この點に留意した耐震構造の普及が萬一の場合に對する準備の第一義であらねばならぬ。東京市外の隣接町村の水田までも住宅地化する現狀からいへば、市外にこれを無視した家屋構造を默認するならば、將來大地震のある場合に、今回下町で經驗した如き災厄が郊外住宅地に起り得る。

大東京出現に際して　巨大都市の生長は周邊村落の市街化を意味し、市街面積の增大は植物に被覆された田園の減少消滅を前提とするものであるから、巨大都市計畫は如何にしてこれより生ずる缺陷を補ふかといふ困難なる問題に當面するを避けられない。現在までに關東地方の處々に避寒避暑及び安息日の休養地のできつゝあるのは自然の要求に應ずるものであるが、この如き成行に放任しては、電車土地會社の思惑で營利事業として計畫されるのみで、必しも市民全體の健全なる慰安を得んとする希望を充し難い。若し大東京將來の發展を豫期するならば、周邊の適當なる土地を選定して遊園地及び住宅地を設置する計畫を樹立して、雜駁なる市街地の錯綜により生ずる整理の困難を惹き起さぬやうにしたい。

これを要するに今日は大東京の出現の氣運が熟した際であるから、今に於いて將來を洞視した組織系統の基本を定め歩一歩理想的巨大都市の面目を表現する目標に向ひ進たい。

房總地方の人文地理

武家政治の故鄕　關東地域の南に突出した伊豆三浦房總の三半島の中、火山活動の旺盛なる伊豆半島と他の兩者とは地勢が著しく異つた丘陵及び臺地を成してゐるが、その人文地理上の關係にもまた後の兩者に多少の共通點が認められる。中にも重要なるは房總三國が大平野の東南部に一の獨立地區を作つてゐる事實である。現在の東京灣の深い灣入によりその南半が半島を成すのみならず、德川氏入國以前には武藏の東界を劃した利根川の舊河道は現在想像するよりも遙かに大なる意義を有し、これによつて界された東部は、西方から傳播する近畿文化の透入を困難ならしめたのである。

利根川以東の地方事情は三代實錄元慶八年(一五四四年)に上總國內の浪人を放逐せしめる勅令に窺はれる。これは國司の上奏に前司の子弟國政に順はず、富豪浪人吏の行ふところに乖き、官物を勘納し國宰に對桿して郡司を陵寃するに至り租稅の逋るゝもの多くして調庸の貢を闕くは、職として此にこれ由るといふ事實に鑑みた指令に外ならぬ。これは朝廷の綱紀のやうやく弛まんとするに乘じて、地方豪族が中央政令に反抗する傾向の興り始めた結果と見てよい。

利根川下流地方に平將門の天慶二年の叛亂が起り、後九十年に再び平忠常の長元元年から四年までの叛亂が起つたのは、これ等の邊陬の地に土着した平家一門豪族の跋扈の極端なる例にして、文弱な

る國守の制馭し得ない武家勢力が最も早くここに集積した事情を語るものである。治承四年石橋山の合戰に敗れた賴朝が安房に逃れて見事に捲土再來に成功したのは、全く半島の平家の巨擘たる千葉常胤の一門が馳せ參じてその頽勢を恢復した結果であつて、彼は賴朝に勸めて幕府を鎌倉に開き、こゝに武家政治の確立を見たのは特に注意に値する。

足利義詮が幕府を室町に開き弟基氏を鎌倉に置いて關東を鎮撫せしめたが、その子氏滿と管領上杉氏との間に權力の競爭が行はれ、鎌倉の勢威も室町幕府も共に衰へて群豪の割據を見るに至つた。嘉吉年間に里見義實は國中の兵亂に乘じて安房を退治して先づ白濱に據り、後館山に移つて、上總をも切り從へ、天文七年小弓御所を千葉の南に構へた足別義明を助けて國府臺に北條氏綱と戰つた。これは關東東西兩部の間の勢力の衝突を意味し、房總が獨立の地區を成した形勢の成行でもあり、また最後の一エピソードでもあつた。

沿岸海上の交通　半島沿岸の海上交通が遠く東海道の西部に及び近畿地方に達するの便があることが、また半島といふ地勢の特權である。賴朝が寛永三年に東條鄕を御厨として伊勢太神宮に寄進し、また丸御厨は賴義の東夷退治の戰功により領した所を平治元年に義朝が同じく太神宮に寄進したといふので、海陸の產物の伊勢までの海上輸送の途が鎌倉幕府の開ける以前に既に行はれたことを知るに足る。

東條鄕小湊に生れた日蓮上人が遠江貫名氏の支族で、父重忠は遠州からこの地に流寓して漁夫となつたといふ傳說は、同じくこの海上交通の行はれた一旁證ともなる。

德川幕府の江戸に開けた後には京阪地方との海上交通の便は更に大であつたが、その範圍は更に兩總の東岸九十九里濱の沿岸に及んで、紀伊半島沿岸の漁夫の移住が絕えず行はれて明治時代に至つた。現に土着人を母とし紀伊移住者を父とした子女の房總地方から東京に來たものの實話を聞いた。

關東平野畑地の麥大豆を原料として發達した醬油釀造業の如きも、また紀州有田郡湯淺・廣兩村に古く行はれたのが、これ等移民による銚子で有利に經營されることになつたのである。多數の移住者を出したのは寶永四年の大津浪に千軒と呼ばれた廣村の破壞された時で、それが今の銚子における醬油生產隆興の一期を成したらしい。これは海上交通が漁民の出稼を誘ひ、延いて農業工業の開ける徑路を開くに至つた面白い實例である。

第二章　關東北部及び東北地方

總　説

本章に記載する地域は奥羽六縣七國と、關東北部三縣三國及び下總國の利根川以北三郡とを含む。即ち南界は利根川、西南界は信越二國にして、東北西の三邊は太平洋津輕海峽日本海に面する。その縣國郡の範圍左の如し。

茨　城　常陸（鹿島・行方兩郡を除く）　下總（結城・猿島・北相馬三郡のみ）
栃　木　下野八郡
群　馬　上野十一郡
福　島　磐城七郡　岩代十郡
宮　城　陸前十六郡　磐城三郡
岩　手　陸中十一郡　陸前氣仙郡　陸奥二戸郡
山　形　羽前十郡　羽後飽海郡
秋　田　羽後八郡　陸中鹿角郡
青　森　陸奥八郡

常磐線及び東北本線の旅客は利根川を渡つた後も、關東大平野がその北に廣濶なる原野を成し、處處に松林、雜木林等の繁茂した土浦小山以北に至れば筑波及び足尾の山塊が地平線上に現はれ、本線宇都宮以北は、右は八溝山の續きの鋸の齒の如き尖つた峯を望み、左は高原（鹽原）那須の兩火山から東に緩く延いた裾野を望みつゝ關東地方から奥羽地方へ進むに從ひ、地文的形相が漸く變ることに注意する。この漸變する景觀を了解するためには、左の特色を擧げねばならぬ。

地文上の七大特色

地勢の相違と風土の變化　この地方の地理上の特色の第一は、本州の北部一圓を占めることである。その北端は北緯四一度三一分に達し、本州の南端潮ノ岬の三三度二五分に比して約八度の差がある。この地理的位置の關係は氣候に大なる影響を及ぼし、特に冬季の氣溫に著しく、東岸宮古（三九度三八分）は一月の月平均氣溫(一)〇・六度にして、潮ノ岬の七・一度に比して殆ど八度低く、内地の水澤（三八度八分）は宮古より三〇分南に位するも(一)二・七度にして、約十度低いのである。

第二は太平洋・日本海の兩海岸ともに大なる出入のないことである。東岸で仙臺以北の陸前・陸中

地方に小屈曲を見るのと、西岸に羽後の男鹿半島が北に突出するのを除いては、北端の兩側から下北津輕兩半島が北に突出して、廣濶なる青森灣を抱くのみである。これは津輕海峽を渡り、北海道に交通する便ある外は、沿岸に大汽船の繫泊に適する港灣の乏しいことを意味する。

第三は地勢が南北に延長した三列の山嶽及び丘陵と、その間の平地とから成ることである。中にも東岸の勿來の關から白河の關を經て、羽越の國界の鼠（念珠）ヶ關に引いた線以北に著しい。これより南は關東平野の北部に漸次變り、「吹く風を勿來の關と思ひしに」といひ「秋風ぞ吹く白河の關」といふ古歌は、此の風土の著しく異なる境界線の意義を表現したものである。

そして斯の如く氣候の變化が白河の關において著しく認められるのは、東西兩側に山嶽があるためで、冬季等温線の谷が、中央に出來てゐるのは、この地勢の影響なること疑のないところである。

地質構造上の特徴　第四は地質構造上東北日本が、中央及び西南日本と全く趣の異つてゐることである。中央日本の外帶を成す關東山系は東南東の走向を有し、一旦關東平野に沒した後に、再びちよつと銚子半島に頭を露はし、外帶の北界は利根川がこれを代表してゐる。阿武隈・北上の兩高原及び筑波・八溝・足尾等の諸山脈は何れも內帶に屬する大小の地塊にして、多少南北に延長した地壘を成すものである。これ等の地塊は第三紀の海中に大小の島嶼を成したのが、東北日本全體の地盤が第三紀以後に隆起して周邊の海底堆積層とともに陸地となつたので、新期の丘陵が古い岩層の山嶽を圍繞し、海陸の輪廓が全く變つてしまつた。

第五の特色は中央分水嶺を成す火山噴出帶（那須火山帶）である。これは中央日本を横斷する富士火山帶に比較すべきものが北上・阿武隈兩大地塊の西に沿ふ南北の割裂線に噴出した結果で他の地方に類例を見ない特殊の分水界である。現在の地勢は第三紀丘陵の上に洪積世に噴出した火山の列峙するために、高峻なる地勢を呈するに止り、東西兩側に裾野に續いた丘陵及び沖積平野が發達し、東には阿武隈・北上兩縱谷の平坦なる原野を成し、西には阿賀野・最上・雄物、米代諸川上流に、會津・山形・新庄・横手・大館等の平地を成した。これらの兩側の平地間の通路たる分水嶺の峠は、火山の間の丘陵を浸蝕した溪谷に沿ふから、いづれも極めて低い。

この西側の南北に延長した盆地を成す溪谷は、中央噴出帶に竝走する鳥海火山帶が、日本海岸との間に噴出して諸川がその箇々の間の丘陵を横ぎつて西流して生じたものである。その地盤もまた多くは軟かい第三紀層から成り、越後地方と同じく石油を含有する岩層である。これ等の互に孤立した溪谷盆地の列を成すのは第六の特色として擧げてもよい。

この兩噴出帶は何れも近い地質時代の成立に係り、磐梯・吾妻の如く明治時代に耳目を聳動した活動があつた位で、從つて温泉の湧出する箇所が多いのはこの兩噴出帶と關聯した特色である。金屬鑛床の成因も同樣であるが、これにも第三紀層に伴ふ古い火山岩の噴出に續いた鑛石岩漿の併發と看做

すべきものが多い。

兩海岸氣候の對照　日本海岸と太平洋岸との間の氣候の對照も、また第七の特色として擧げねばならぬ。これは主として海流の影響であつて、日本海では暖流が日本群島の沿岸を洗つて北進し、太平洋では千島北海道に沿ひ寒流(親潮)が南下し來り、金華山沖までは夏季と雖も水温を低下せしめる。津輕海峽は兩者の出會ふところであるから濃霧が生じ易く、しばしば航海に危險を與へる。兩羽の冬季雨雪の多量なるはそのまた直接の結果にして、中央分水界を横斷する鐵道に雪よけの小屋(スノーシエッド)を設け防雪林を栽植する必要を感ずる譯である。

人文上の特色

馬・米・繭・金・鐵と武家政治　以上列擧した七の地文上の特色と關聯して、人文上にも他の地方に比して頗る顯著なる對照が認められる。

奥州駒の名は人口に膾炙し、相馬の野馬追ひ祭りや、白河の馬市等に地方的色彩が現はれてゐる。これは主として阿武隈・北上兩高原及び中央噴出帶の火山裾野の、牧場に適する地勢と關聯するもので、畠山重忠・足利又太郎忠綱等の、關東武士の戰場の功名に屢々乘馬の聯想される例があるのは當然である。即ち牧畜の中、特に牧馬業の盛なることが特色の一である。

低温なる溪谷及び平野に「すくも」即ち泥炭が埋藏されてゐることは、地勢と氣候との關係から生じたもので、これも本州の他の地方には見られない第二の特色である。現に谷地(やち)と呼ばれる低地は過去に於いてこの如き水ごけの發生した場處であるが、今は多くは開けて水田となり、殊に凹んだ最上川上流の大沼の如き處に限つて浮島を有する沼澤が殘つてゐる。

かやうな低平なる原野が水田となり、桑畑となり、米及び繭の生産の多量なることは地勢の然らしむることころで、酒田の本間氏の如き大豪農のあるのはこの關係を最も雄辯に語つてゐる。故にこれも特色の第三として擧げることができる。

地質と離る可らざる關係ある鑛山業は、黄金花咲くと歌はれた奥州における産業の中、第一に位するのは當然である。火山作用と關聯した豐富なる金屬鑛床は、足尾・小坂兩銅山が代表的である外に、尚ほ結晶片岩中に含まれた日立の銅鑛、花崗岩と石灰岩との接觸によつて胚胎した釜石の鐵鑛の如き例もある。

我々の特に面白く感ずるのは、聖武天皇の天平感寶元年(一四〇九年)に陸奥の國から初めて金を獻じた以前に、鐵を採り刀を鍛へることが既に早く開けて、月山と平泉の對岸の舞草とに鍛刀工業の中心があつたことである。その原料は今釜石や、仙人で採る如き鑛床からでなくて、極めて精錬し易い風化した褐鐵鑛塊であつたと想像される。砂鐵川と稱する地名が舞草の東に在るのは、この鍛冶工業

の鑛產地に起つた由來を語るものである。春宮の壺切御劍を造り奉つた信房・源氏重代の髭切を造つた實次は、共にこの地の名工であつたと推定し得るやうである。われわれの考說に從へば、最初の壺切御劍作者信房は奈良朝以前の刀工であるから、砂鐵の採取が古く行はれ、砂金はその副產物として發見されたと推衍してよい。

奧羽の蕃族を蝦夷と呼び、土地を陸奧と呼び、その語源を日本語で解釋せんとした國學者の考說があるが、これは互に關聯した意義を有するもので、バチエラー氏のアイヌ語辯典にはエミシ・ムツを刀劍を佩ぶと對譯し、刀劍を佩用する民族を意味する土語から別れて、民族名と地名とになつたと考へるのが妥當である。

この他に常陸國鹿島神宮附近の砂丘の砂鐵を採つて刀劍を造つたことが常陸國風土記に見えるから、東北一圓の特殊の工業として古く發達してゐたのは、文獻上からも推定し得る。故に奧羽から關東北部にかけて、駿馬に乘り利劍を佩びた民族が、中央から皇化の東漸する以前、廣漠たる原野の上に、密生した森林の間に出沒してゐた譯である。從つて武家政治が關東に勃興するにこれ等の地文及び人文上の素因が頗る有力であつた筈と考へられる。

東北文化の由來と東北人の氣質　奧羽に特殊なるこれ等の文化が入つた徑路がまた問題となる。續日本紀には奈良朝前後に肅愼人及び渤海人が、日本海を渡つて來朝した記載がある。その中特に著しいのは聖武天皇の天平十八年（一四〇六年）及び光仁天皇の寶龜二年（一四三一年）の如く渤海人が千餘人、三百餘人の多數で鄂田（秋田）地方に來着した事實で、滿洲地方と交通が頗る自由に行はれたのは想像し難くない。秋田附近から五銖錢が出土したことがあり、東北には漢文帝武帝を祀つた神社があつたらしいのは、何れも直接の交通が大陸とこの地方との間に行はれたことを推測せしめる。今昔物語に安倍賴時が滿洲に渡つて見聞したことを載せたのは、これ等の考古學及び土俗學上の資料と併せ考へて、決して一場の說話として捨てるべきものでない。

大和朝廷の大官が屢々蝦夷・東人・毛人などゝ名乘つたのはその勇猛を表徵する意味であつたと喜田博士が論ぜられたのは面白い着眼である。

われわれは更に一歩を進めて、當時の東北蕃族の皇化東漸以前に、大陸との直接の交通により達した文化の程度は、不充分なる中央に殘つた史料から推定する如く、低級でなかつたことが同時に推定し得られると信ずる。田村麿・賴義・義家等の武將が、これを綏服するに頗る困難であつたのも、敵手が單に無智なるがために勇猛なる臺灣生蕃の如き土族でなかつたとして、初めて氷解する。

故に素朴にして剛直、勤勉にして堅忍なる東北人の氣質は、この如き特殊の文化の潮流を考慮に加へて、その由來を論究するを要する。本洲中氣候の最も嚴酷なる東北地方には、確かに滿洲及び大陸と、多少共通の特色あることが同時に注意されるが、それはこの氣質を助長するに有力なるは勿論な

るも、これのみにより推論することは出來ぬと、われわれは感ずるものである。

戰場としての東北地方

戰略上の地區　戰略地理學上から東北地方を觀るに、また地勢と人文との間の密接なる關係が認められる。篇首に述べた奥羽と岩磐と關東北部との三地方の地勢上の差異に從ひ、戰略上の三大地區に大分されるのは勿論であるが、その中關東平野の利根川以北は西・中・東の三部を區別し、兩羽と三奥ともまた各々一區を成してゐる。

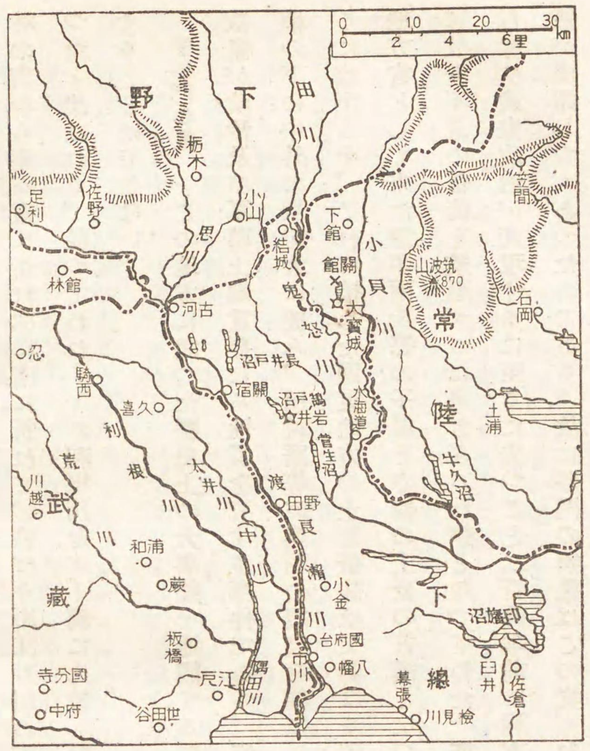
關東北部と利根川　關東北部は西半は山を負ひその中部以東は廣濶なる平野になつてゐるから、戰略上重要な地點は西部に在つては、上野と信濃・越後兩國との分水嶺を横過する峠に對して、これに通ずる溪谷の出口を掣扼するところである。これに反して中央及び東部では平野を横流する河流が重要なる防禦線となり、また時としては河航による交通線となり、その要點は渡場及び繫船場である。故に西部では高崎前橋が北イタリヤ、ロムバルディヤ地方に於けるトリノと同じ戰略上の要點であり、古河・結城などはマンツア・パドウアに類似する位置に當るのである。

然れども中央及び東部の河系は天正十八年（二二五〇年）德川氏の江戸入國以後に流路の附け變が行はれ、その以前の利根川の中流から河口に至る河道の位置は、その以後の位置とは全く異なつてゐる。故に戰國及びその以前の戰略上の地點を論ずるに當つてこれを考慮せねばならぬ。現在では利根川下流の渡場たる取手が古河と同じく重要なる意義を持つてゐるが、付け變へる以前では利根川は館林の南から南々東に折れ次に南に折れて、略ぼ今の江戸川の河道に沿ひ、これにより武總の國境があつたと想はれる。從つてわれ〳〵の利根川をポー河に比較し得るのは近世に限られ、戰國以前に適用することはできない。

平將門の亂　この地方に起つた歷史上の大事變を通觀するに、天慶二年（一五九九年）の平將門の叛亂が政治及び軍事上頗重要なる性質を有する事件である。何となればこの時代は平安朝藤原氏の專權の下に中外の綱紀大に緩み、田村麿等が奥羽の蝦夷を鎭撫した後も、未だ全く國守の命令に服從するには至らず、これに接した關東地方の土着豪族は文弱なる國守の制馭する能はざるところにして、地方官として來た源平兩氏等の子弟その他の土豪の首領となつたものを押領使として、その手兵の力に仗り不逞の暴徒を鎭壓するに過ぎざる狀態となつてゐた。斯の如く源平兩氏が政權を藤原氏の手から奪ひ武家政治が實現するに至るに先つこと二百餘年前に關東地方には既にその原動力たる武士の階級が擡頭しつゝあつたのである。故に將門の叛亂はこの實力を發揮して中央政府に對抗して關東一圓を支配せんとする野心の最初の發露と看做される。

天慶の亂に關する資料の中で將門記が詳細に渉り最も信頼し得るものである。これに據れば結城郡

の南に舌を成した猿島（幸島とも綴り、誤つて辛島に作る）郡の東境に延びた水海道の北に當る豐田といふところがその鄕土であるらしく、關東諸國府を占領して新皇と稱した時に首府を置かんとしたところは水海道の西一五キロに當るべく、こゝに石井の營所なるものがあつた。岩井附近の地勢は、東の鬼怒川と西の利根・渡瀨兩川との中間に在る河間低地にわづか突起した臺地を成し、左は菅生沼及び飯沼川右は鵠戸沼・長井戸等の沼澤に夾まれ外敵の來襲に對して防禦に便なるところである。將門が葦津の江の邊に宿し、妻子を船に載せて廣河の江に泛ばせたといふ葦津の江はこの長井戸沼の東北邊に當るべく、廣河はその南の境町の邊に當る中利根の江卽ち常陸川のことで岩井附近臺地は南に向ひ利根川により武總國境に下る水運の便もあつ



第二十一圖　關東北部河間地方圖

たと想像される。そして東南方は今の利根川となつた鬼怒川小貝川の河道が海に通じてゐたのであるから、この河間臺地は關東諸州を支配するに位置形勝共に當時に絕好であつたといひ得る。

將門がこゝに據り先づ下總常陸の國府を襲ひ、僭稱するに及び下野・上野・武藏・相模の諸國府をも攻略するに至つた徑路はこの歷史時代の地理的位置の關係を考察すれば明瞭に理解される。

將門の相馬內裏といふ俗說は、將門の父良將と兄弟の良文の末に千葉氏の相馬小次郎師常があつたのを混同したものとすべきである。賴朝が石橋山の合戰に敗れて伊豆から房總半島に渡つた時に千葉氏の來援を得て幕府を鎌倉に定めるに至つたのは、同じくこの形勝の地方に占據した豪族が部下に屬した結果で、當時に在つてもこの地方が戰略上重要であつたことが窺はれる。

鎌倉幕府の沒落後　鎌倉幕府の沒落の後には關東奧羽の地方はまた分裂抗爭を觀た。この時に北畠准后親房卿の興良親王を奉じて東下し、吉野朝廷の勢力を扶植維持せんと試むるや、復た河間地方に據らんとし、鬼怒川の東岸下妻の北に在つて大寶沼に臨んだ關宗祐の關館に來り、關・大寶兩城を守つて興國元年より四年の冬まで高師冬等の大軍に對抗した。親房の正閏の大義を明にし、奸賊の膽を寒からしめた神皇正統記は關籠城中の暇に成つたものといふ說もある。

親房東下の時にこれを迎へた小田治久の居城は、筑波郡北條の東南四キロの小田に在り、伊佐・眞壁・關・中郡等の諸城主と共に勤王の師に加はつた。當時その西に接する下野の地方は將門の敗亡の

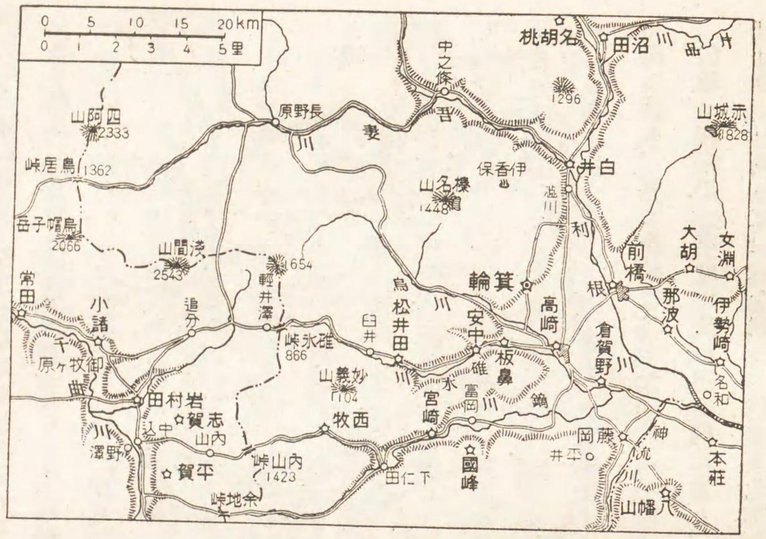
後に下野國に大にはびこつた押領使秀郷の裔孫たる小山結城の一族があつたが、結城宗廣の後に勤王するものなく、孤城に據つて支へ難かつたのは是非なきところである。

鎌倉が足利氏の下に再び關東管領の所在地となつて、義詮の弟基氏がこれに駐在した後にも、なほ室町幕府に反抗する小山義政の如きものが、この地方に起つた。その宇都宮氏の所領に侵入するに當つて吉野朝方を標傍したのは、單に足利氏の勢力に反對する爲めに名を藉りたに過ぎぬとしても、その周邊を併呑せんとする野心を起したのは、奥羽に通ずる大回地を控制する位地を占めてゐるからである。

基氏から氏滿を經て滿兼・持氏の代となり、京都に反抗する氣分が鎌倉府に起り、持氏終に志を得ずして鎌倉に於いて自殺し、遺孤三人は結城氏朝に依り、上杉氏がこれを攻めた時の嘉吉元年結城合戰は此處で起り、持氏の三男成氏が再び上杉氏と爭ふに及び、千葉・里見・結城・小山・宇都宮・那須・佐竹・小田の八氏の後援の下に古河城に據つた。これ等の場合にも戰略上重要なる地點の位置の關係が明かに認められる。

家康と宇都宮　更に降つて德川幕府の成立する際に家康は上杉景勝が謀叛したと誣いて、會津を征伐すると颺言して、關ヶ原役を誘發するに當つても、結城秀康を大將として宇都宮に止めてこれに備へ、伊達政宗・最上義光をして景勝の背面を脅かしてこれを牽制せしめ、その巧妙なる戰略的陽動に

219007



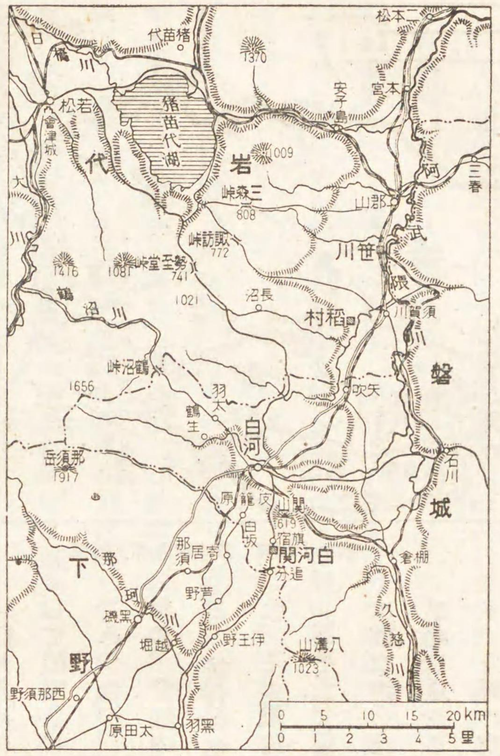
第二十二圖　關東西北部交通圖

成功した。今師團司令部のある宇都宮が戰國時代までの古河・小山・結城と同じく奥羽に對する作戰上に重點であることは家康のこの處置に明かである。

江戸幕府の諸侯封地は外樣と譜代及び親藩を錯雜して配置し、互に牽制するやうに巧妙を窮めたものであつたが、この地方の如きも宇都宮に大久保氏を封じ、常陸の佐竹氏を秋田に移してその跡を親藩とし、犄角の勢を成して東北に對する藩屏たらしめた。その戰略上の意義は確かにこゝに在つた。

關東北部と碓氷・清水　關東地方の北部の西半では前に述べた如く高崎、前橋兩市を含む平地が西及び北に通ずる交通線の交叉點に當るから重要である。上野の南に神流川が秩父の北を東流し、西は十石峠により信濃の東南隅及び甲斐北部に通じ、その北には鏑川がこれに竝流し、同じく餘地峠により千

曲川の上流に通じ、兩川の平地に出る處に藤岡町の西南に平井城址がある。これは永祿二年に謙信がこれを廢して厩橋（前橋市）に遷るまでは山内上杉氏居城であつた。



第二十三圖　白河附近交通圖

高崎は碓氷峠から東流する九十九川と榛名山の西麓の烏川の合流點に當り、上杉氏の箕輪城は、榛名山麓に在つてこの邊を瞰制する形勝を占め、長野業政の堅守して武田信玄の寄手を惱ましし、子業盛に至り永祿六年終に陷つて戰死した壯烈の歷史を有する。德川氏入國の時には井伊直政が初めこゝにをり、次に和田に移り、終に高崎に移つた。

前橋は利根川の平地に流れ出る處に當り、その上流に溯り清水峠を越えて越後中部に通じ、また支流吾妻川を溯り草津峠を越えて信濃東北部飯山附近に通じ得る。故に越後から關東に出入する門戸となつて越後上杉氏の前進根據地となつた。この城が利根河北で宇都宮と共に河南の忍・川越兩城と竝べて、陷落したことのない四名城の一といはれたのは偶然でない。

要衝を占むる白河關

岩磐地方に於ける戰略上に重要なるは中央凹地に沿ふ鐵道（東北本線）と濱海道に沿ふ常磐線にして、その作戰線となつた實例は源頼朝の奥州泰衡征伐の行軍路である。大手の主力は畠山重忠を先鋒として、文治五年（一八四九年）七月十九日鎌倉を出發し、右翼は東海道大將軍千葉常胤・八田知家等が常陸下總兩國の兵を具して濱街道を進み、阿武隈を渡つて參會すべく、左翼は遙かに分れて北陸道大將軍比企能員・宇佐美實政等が上野の兵を催して越後の國から出羽國念種が關（鼠ヶ關）を出て會戰を遂ぐべしと定めた。

頼朝の本軍は二十五日宇都宮に着き、二十九日白河の關を越え、梶原景季は馬を叩いて、「秋風に草木の露を拂はせて、君が越ゆれば關守もなし」と歌ひつゝ、抵抗を受くることなくして岩磐地方を通過し、八月七日厚樫山の南の國見澤に着いて初めて北軍との衝突が起つた。

白河の關は、那珂川と阿武隈川との分水嶺に在つて、今の白河城は阿武隈川その北を東流し、更に北に折れて流れ、東は須賀川・石川・棚倉に通じ、西北は勢至堂峠及び鶴沼を越えて會津に通ずる中心的位置を占め、その分水嶺に當る丘阜の起伏した地形は大兵の運用に適してゐる。慶長五年（一二六〇年）德川家康の會津征伐に當つて、上杉景勝自から出てこの附近の地形を偵察し、白河の南に革

（皮）籠原あり、地勢廣闊大兵を誘致すべし、吾輕兵を越堀蘆野の間（那珂川の上流、大田原町の東）に出し、戰を挑み佯り敗れ退かば敵必ず迫躡せん、其の原頭に至るを俟ち、鋭兵これを衝き前鋒を破らば、家康必ず麾下を以つてこれを救はん、その時我兵一は左より一は右より掩擊してこれを殲さん、戰若し利あらずば全軍悉く白河に死せんと將士に語つたといふ。

家康は會津征伐を颺言しつゝ石田三成等の關西でことを起すを待つ積であつたから、景勝もまた逆擊の決心を實現するに至らず、また佐竹義宣のこれに呼應する機會もなく、直江兼續の一萬の兵は下野に出て高原に、本莊繁長は白河の東北の鶴生に、安田能元等は白河に、市川房綱等は關山の下に屯し、七月二十二日景勝は長河に出たのみで、川中島以來の快戰を試みなかつた。

若し義經が秀衡の如く泰衡等に心服されて奥羽十七萬騎を指揮して一戰したとせば、また景勝の措置に類する作戰に出づべく、何等の抵抗もなしにこの絶好の防禦第一線を關東軍の手に渡したのは、泰衡の庸愚にして、賴朝の敵に非ざるを見るに足る。

されぼ戊辰役には東軍は白河城にて北進する官軍及びこれに應じた仙臺・二本松等の諸藩の兵と戰ひ、白河城が兩軍の間に爭奪の目標となり、また東軍の主力たる米澤藩の進出は慶長の時と略ぼ同じ作戰案に從つたらしい。

要害厚樫山　文治五年八月七日關東の大軍がこの山麓の國見驛に着いた時に、北軍は泰衡の異母兄西木戸太郎國衡を大將とし、老將金剛別當秀綱の父子以下二萬の兵を以つてこれに當り、山に城壁を築き、その下の國見の宿との間に幅五丈の塹濠を掘り、阿武隈川の流を堰き入れて、山と阿武隈川との間の平地約三キロを横斷する防禦工事を施してゐた。

八日東軍の總攻擊を始める前に重忠は八十人の工夫に用意の鍬鋤を以つて土石を運んで堀を埋めさせ、早朝主力は厚樫山前の秀綱の陣地を突擊し、右翼の常陸冠者爲宗等は佐藤庄司の陣地を突擊し、何れもこれを破つた。しかれども厚樫山は九日工藤行光等拔けがけの奮鬪によりこれを占領し、十日未明にその西北貝田の邊に設けた大木戸に攻め寄つた。この大手の總攻擊は、「その鬪戰の聲山谷に響き鄕村に轟く」といふ激戰で、國衡等よく鬪ひ堅く守つてゐた。しかるに前夜小山朝光・宇都宮朝經等七人は鳥取越から迂回して國境の山傳に大木戸の上の國衡後陣の山に出て喊聲を發し箭を飛ばしたので折しも朝霧立て籠めて衆寡が知れず、木戸の内は搦手から大勢が襲來したと驚き、國衡の全軍は潰走し、殿戰した秀綱とその子の十三歳の少年秀方とは朝光と工藤行光とに打ち取られて、この要塞は關東軍の手に落ち、その日の中に賴朝は國境を越えて船迫（大河原の東）まで進み、十二日には千葉介常胤等の右翼軍も來會し、破竹の勢で北進して十日の後には平泉の館に着き、九月三日糟部郡に落ち延びた泰衡は郎等に殺され、四日志波郡に着いた時には北陸道の大將北企能員・宇佐美實政等も來會し、二十八萬四千騎と註する總勢となり、面々の打ち立てた白旗を廣間に倚置き秋の尾花色を

混せ晩頭の月勢を添へる盛觀を呈し、こゝに至り鎌倉幕府の號令が奥羽に行き渡ることゝなつた。

平泉と衣川　平泉は今は藤原清衡の建てた金色堂に藤原氏三代の榮華の跡を留めたのみであるが、此處は安倍頼時の陸奥六郡に横行した時に恃んだ天險であつて、陸奥話記にその家來が頼時に謀叛を勸めて、請ふ一丸の泥を以つて衣川の關を封ぜん、誰か敢て破るものあらんといつた位である。

平泉の地勢は北上川の西岸に在つて西からその支流が直角を成して平野を横斷し、今の宮城盛岡兩縣を限る粟澤西磐井郡界の丘陵が同じ方向に走り、磐井川南岸に一之關があり、平泉はその北の太田川と衣川との間の丘腹に在つて、北上川の東の山麓を流れた頃に相當に廣い平地があつた。メッケルがこれを過ぎて同行軍人がその古戰場なることを語るに先ち、その形勝たるを嘆賞したといふ話があるのは面白い。

泰衡はこの地形を利用する能はずして潰走したが、前九年役に貞任は頼義の國府から北進する攻擊に對して屢成功し、衣川の北にも柵を設けてその北進を沮止し、容易に屈服しなかつた。

兩羽の盆地と沿岸　兩羽地方の地勢は中央の凹地帶に沿うた平地は個々の盆地になつてゐる爲めに大局を支配する形勝を抱括し難いが、これに反して越後に通ずる日本海海岸は第三紀層丘陵が海に接して殆ど平地を餘さぬ險岸を成してゐるから、鼠ヶ關は越羽境界の要衝であつた。

比企能員等の北進に當り泰衡の部將が如何なる抵抗を試みたか不明なるも、この地形を利用して固守する戰略を缺いたものと見えて、八月十三日に田河行文・秋田致文等を打ち取つて、易々と出羽の國に打ち入つた。

然れどもその天險なることは戊辰役にこれを守つて村上藩の敗兵を收容した鶴岡藩兵は八月十一日から九月二十六日まで官軍の北進を喰ひ止めた記錄により明かである。

これより北には最上川があり、更に北には鳥海山の海に入る處に狹い海岸平地と斷崖とが續き、鼠ヶ關附近に似た有耶無耶の關の遺跡と稱する險阻な地形がある。

この他、阿武隈川に臨んだ笹川の如く今は全く忘れられた一小驛にして、室町時代には應永以後五十餘年篠川御所と稱して足利持氏の弟滿貞がこゝに駐在し、一方には奥羽大名を押へ一方には鎌倉の勢力の普及を抑制する機關が置かれた場所などもある。

濱街道の小高驛は相馬氏の古く居たところで、勿來關以北の要地にして、その文化北進の記念物には泉澤の石佛がある。

第三章　東海地方

總說

區域　茲に東海道地方と稱する區域は、元の東海道西部伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆に、山地を除いた美濃の八ヶ國と、甲斐の中富士山の北麓、相模の中箱根山の部分、紀伊國北南牟婁二郡を加へたるもので、地文上及び人文上に判然たる太平洋岸に沿ひ東山に延びた一地帶である。西端の伊賀國は、鈴鹿の關を隔てゝ地勢上近畿に編入するが便であるから、本章より省くことにする。

この地方の現在の行政區劃は左の如くである。

神奈川縣の內　相模國足柄上下二郡
靜岡縣全部　伊豆・駿河・遠江三國
愛知縣全部　三河・尾張二國
岐阜縣の內　美濃國（飛驒國及び美濃國山地諸郡を除く）
三重縣の內　伊勢・志摩二國（伊賀國を除く）

地勢概觀　この地方は北に本邦の中央を占むる高峻なる山地を負ひ、南は太平洋に臨むが、その地勢上の特色は、大小の平地が洋岸に沿ひ幅廣く發達し、灣入及び突出が多いことである。是は近畿地方の西側に見る所の瀨戸內海の凹地に匹敵する部分が、直接に洋海に開いた灣と、その沿岸の平地を成して出來たものである。

東部に突出する狹長なる伊豆半島のみは全くこれと趣を異にし、その成因は南方の洋中に噴出した火山島の續きが、こゝより本州の中央部に入つて、大なる火山が崛起し、中にも我が大八州の山嶽の王者たる富士山は、その最秀點にして東海道の目標となり、伊勢志摩からもその山顚を望み得る。

これより西には本州の幅最も廣き中央から發源する大川の海に朝する處に、平野相望み、田園大に開け、商工業は山林・漁業の富源と相俟つて殷富なる都邑村落が頗る多く、之に加ふるに久しく交通の幹線に當り、近畿から波及する文化を受くること早きため、名蹟勝景の人口に膾炙するものにも乏しくない。

地理的意義　これ等の諸國は日本建國以來、皇都の所在地たる畿內五國の東に續き、皇化の東漸する道筋になつた地方であつて、七百年前鎌倉幕府が興つて統治の實權が武家の手に歸し、關東地方が重要となつた後にも朝廷と幕府との間の交通幹線はこの地方に由つた。德川氏の江戸開府の後に至り

設けた五十三次の驛傳は、この線路を代表し、相模小田原から伊勢坂下までの四十驛はこの地方に在る。

四十年來、鐵道が敷設された今日といへども、東京と京都間の三三六マイルの中、國府津から關ヶ原までの二二〇マイルは、同じくこの地方に含まれてゐるのである。

東海道地方の第一の地理的意義は斯の如く交通の關係に在るが、割合に平坦なる海岸が發達した地勢上の關係がこれと共に重要であり、また北に山を負ひ南海に面する爲めに氣候が溫和であることも同時に考慮されねばならぬ。

これ等の要因が本地方の人文生活に影響して現在の狀態が出來上つたものであるから、これに注意して初めて徹底した考察が可能となる譯である。

海岸線

海岸線の五型式　東海道の地理的特色は最も著しく海岸線の輪廓と沿岸の地形とに現はれ、太平洋から灣入する海と、これに突出する陸との交互により大きく屈曲し、伊豆・紀伊兩半島を除いては、その沿岸が低い臺地を成す所の多いことが注意を惹くのである。そしてこの海岸の特性は近畿地方に接續する伊勢の海に最もよく現はれ、內海凹地帶に相當する部分が、直接太平洋に連絡し、かれに在つては四國紀伊兩山系の陸地がその南邊を限るのと全く趣を異にしてゐる。

この海灣は地盤の構造琵琶湖盆を含む近江凹地と類似し、その南に連る伊賀高原に相當する部分が、これでは伊勢の西界の鈴鹿山脈と矢作川との間にて陷沒し、その南の外帶の地塊も斷絕沈降した結果に外ならぬ。駿河灣の灣入は伊豆半島の兩邊に限られた更に著大な地盤の變動による。

その細形を觀るに相模灣から駿河灣の東北隅までが一區、富士火山帶の噴出により生じた狹長なる伊豆半島は中間に遠く南に突出し、以西燒津までの駿河灣沿岸は第二區、その西は駿河西南部及び遠江の第三區、これより以西渥美伊勢兩灣の深く入り込んだ三・尾・勢・三國の沿岸を含む第四區を成し、志摩と伊勢の太平洋岸のみが、これ等と全く異つた第五區を成す。

伊豆半島の海岸　第一區伊豆半島は小田原の西からその南端下田港附近まで海岸線の出入至つて少く、箱根火山の東麓の海に入るところに眞鶴崎が東に突出し、熱海舊火山の火口を成す熱海灣と網代港があるほかは伊東に至るまで小屈曲のみで、これから河津までは天城火山の東麓の海に入るところ屈曲は更に小さい。

河津の南に至り田浦崎があつてその西に下田港を抱き、全岸中こゝのみが良好なる投錨地を成し、西方の遠州灘を橫る帆船の繫泊地として東海道海上交通の要津であつた。ペルリその他の黑船來航の時に世界に名の知られるに至つた理由も、亦たこの位置の關係にある譯である。

東岸は新らしい火山噴出物の堆積から成つた硬軟區々の岩石であるから、波浪の浸蝕を受け易いので、一般に急峻なる斷崖を成すところ多く、殆ど平地の廣く開けた處はないが、到る處に奔流して海に注ぐ溪澗及び峭壁を成した斷崖の風景があり、又た熱海以東等の稍廣い平地のある處には森林及び田園の美觀も乏しくない。

半島の南部海岸は第三紀噴出に係る火山岩が或は之に互層し、或は之を貫いてゐる。その中安山岩の集塊岩の波浪に洗はれた處は、巉岩槎牙たる奇觀を呈し、下田附近から石廊（石室）崎の間の海岸風景は人口に膾炙し、松崎慊堂・安積艮齋の紀行文は、「卽興詩人」のイタリヤ、カプレラ島の記載と光彩を爭ふのである。

艮齋の遊豆紀勝に手石浦の彌陀窟を記して、

手石村南行半里にして一山横に海中を截る、所謂彌陀窟こゝにあり。山に入る數百步、滿山皆な喬松にして空翠衣を染む。俯して深谷を視れば巨窟ありて潮水雪を捲く、林下佛堂彌陀像三軀を置く。童子を倩ひ導とす。堂東の崖路より彎曲して下れば、海澨の大石犬牙相錯はり、仰ぎ視れば絕壁百餘仞、峭削刻畫詭怪百出せり、窟あり蓋窟といひ、湖水噴薄す。卽ち向に山後に達するものなり。其東に又巨窟窖然たり。高さ二丈ばかり。廣さ之に半す。童子いふこれ彌陀窟なりと。小艇に掉して入ること凡そ十餘步、深黑色を辨せず、左右の石角齟齬し潮水盪激し、倏ち白光の耀然として靈相を現はすを見る。信に神異とす。堂より西に危巖亂立し、穴あり鹽吹といふ。

との文はその一端である。

半島海岸一帶は安山岩の砂にて、暗色の磁鐵鑛輝石の類なるも、獨り下田附近には石英粗面岩及び凝灰岩現はれ、下田の東の白濱といふ海岸は白砂皚々として一異觀を呈してゐる。

西岸も亦た大なる屈曲なきも松崎・田子・土肥・戸田等の小さい入江があつて窮屈なる海岸の漁港を成す。こゝにも軟かい第三紀層の海蝕を受けた面白い岩が見られる。

西北角大瀨崎と沼津との間は東に折れた西浦・靜浦の海岸にして、東に向ひ深く灣入し、その懷に漁村があつて、風景頗る幽邃閑靜な趣に富む。

駿河灣の海岸　第二區駿河灣の東北一半は、狩野川河口の沼津から富士見川河口まで、富士山裾野の端と海岸との間に、低濕なる浮島沼の水田を隔てゝ平坦なる街道が松原の內側を走り、道中最も開濶なる風景を呈する處である。

富士川河口の三角洲平地より西は、蒲原から興津まで西南に走る海岸一帶、第三紀層丘陵の下に狹い平地を剩すに止り、鐵道は薩埵峠の丘麓の崖に沿うて走り、波のしづく車窓を濕ほすを覺える。唯その南の久能山との間に東北に向ふ海流の作用で出來た三保ノ松原の砂洲が突出して東北に開いた清水港の小灣を抱き、その北に當る海岸に清見潟を俯瞰する清見寺の古刹が丘腹に峙立ち、道中眺望の

絶佳の位置を占めてゐる。駿河灣海岸は富士山を背景とした勝景到る處に展開するのが特色であるが、就中この部分は西から來る旅客の目を駭かすので、奈良・平安兩期以來東下りの都雅の人士の名什があるのは當然である。

久能山から西南は安部川冲積地の平坦なる海岸となるが、又た直ちに高草山の海に臨む處が斷崖を呈し、燒津以南の大井川三角洲の一大平地との間を隔てゝゐる。その南は河の左岸の第三紀臺地海に迫り、その南端御前崎に至る間、海岸に平地を剩す處は掌大の相良町あるのみである。御前崎は伊豆志摩の間五十里の遠州灘に突出し、海上の眺望雄大を窮めてゐる。

御前崎以西の海岸　御前崎以西の遠江の海岸も、相良臺地の南麓海に迫り、その西には天龍川河口の平地が展開し、流下した土砂が海風に煽られて生じた砂丘蜿蜒として汀線に接して走り、海道の岸岸において特殊の景觀を呈する處である。

天龍川以西の海岸は同じく低平にして、御前崎から鈍い弓狀を描いて伊良湖崎に至る間に、著しいのは濱名湖の灣入である。そしてその南界を成して海水の自由の出入を妨ぐる砂洲を除いて洪積世の海岸線を考ふれば、この湖盆は伊勢・渥美兩灣と全く同一の類型に屬する凹地である。砂洲は海道交通の幹線を成し、舞坂・新居の間はその關門に當り、今はその中間の辨天島は腹背に大洋と湖水を望む好避暑地となつてゐる。

渥美半島の南岸は海蝕臺地の斷崖海に接し、その西端の伊良湖崎には崎山（一四〇メートル）が孤立して遠望島の如く伊良湖島の名がある。この突角は出入の潮流急にして、入る潮の流るゝ北側に東に向ひ鈎狀に曲つた立馬・大洲の兩岬の砂洲がある。東西の幅の廣い渥美灣と南北に延びた伊勢灣との中間に突出した知多半島は新第三紀層の臺地にして南北に延長し、その南端を羽豆崎（師崎）といふ。

伊勢灣の東北隅に當る熱田から西北隅の木曾川河口桑名に至る北岸一帶は、濃尾平野の低地であつて、大河流の土砂を放出する爲めに、堆積作用が盛に行はれ、人工による埋立と相俟つて土地の增加は著しく、最近には熱田に名古屋新港が出來た。

木曾川河口から宮川河口に至る灣の西岸は、伊勢北部の低平なる地勢に相應ずる鈍い弓狀を成し、陸地は鈴鹿山脈東麓の臺地の東に緩斜する處で、海底も遠淺で、汀線に沿ひ海岸冲積地が發達してゐる。從つて良港の存立は不可能であるが、古來東海道の要路に當る爲に桑名の南に四日市・阿濃津（今の津市）・大湊の如き殷富なるものがあつて、中にも大湊は宮川河口に在つて吉野朝の時に東海道海上交通の要津となり、北畠氏は大河内に據つて之を支配してゐたのである。

伊勢志摩の海岸　宮川以東は紀伊山系の山地の陵夷して海に入る處であるから、海面に岩礁攢立し、海岸の斷崖と相對して全く異つた景相を呈し、二見ヶ浦の奇岩は最も有名である。これより南に

折れて志摩東岸に至れば、大小の島嶼が山嶽の走向に散布し、鳥羽港は熊野灘と遠州灘との間を航行する帆船の風待ちに恰好の錨地である。港の西北にある日和山は東方の海上の展望に適し、晴朗の日には遙に富士山の峯尖が海面上に浮んで雲煙の間に現はれることがある。二見ヶ浦の夫婦岩の間も春秋兩分の頃に旭日と富士山が見えるのがその語源であるといふ。

志摩伊勢兩國の太平洋に面する海岸は、紀伊山系の岩層の走向及び斷層に沿ひ海蝕が行はれ、且つ地盤が第四紀に入つて沈沒したゝめに生じた小屈曲多く、所謂リアス式の海岸線の發達した處である。從つて深く入り込んだ的矢・御座・五ヶ所・慥柄等の小灣がある。

先志摩として區別する御座灣の周邊は中生層の海蝕臺地であつて、渥美半島と同じく第四紀になつて地盤が數十メートル隆起したものである。この作用は全體から見れば、リアス狀灣入を生じた沈降作用に比して遙かに小なる地盤の運動に過ぎないが、この平坦な地貌はその北邊の山地の起伏するのと著しい對照を呈してゐる。

之に續いた伊勢國度會郡及び紀伊國北南兩牟婁郡の海岸も亦形貌は同じ樣である。東から數へて五ヶ所・慥柄・長島・尾鷲・九木の五灣はその無數の屈曲の中で稍著しいものである。然れども崎志摩の半島の如く海蝕臺地の形狀が目につかぬ。之は伊勢灣の入口に接する部分の地盤の昇降が最も著しくて、西に向ひ遞減したことを示すものである。

熊野、遠州兩灘には、しばしば海底に震源のある地震が起る。その震源は陸地に並行して東西に走るのが常である。明應七年八月、永正七年八月、慶長九年十二月、寶永四年十月、安政元年十一月四日及び五日には、何れも沿岸に津浪を起した。大正十二年九月の關東地震の相模灣津浪の實例から推せば、かくの如き場合には、それと同時に海底の凹凸にも變化があつたことを推理される。

地體構造

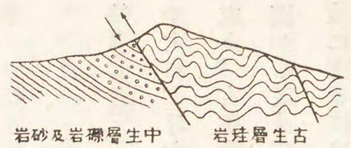
地質の概觀　この地方の基盤を構成する岩石は古生代及び中生代に屬する強く褶曲した岩層が大部分を占め、日本褶曲系の外帶を成す東部の赤石山系と、西部の紀伊山系の兩地塊は、殆ど全くこれより成り、古生層は石炭二疊兩紀の新期岩層のみで、中生層は珠羅白堊兩期であつて、いづれも日本海の側から東及び南に向ひ加はつた横壓によつて地層の變動が起つたのである。

故に前者には南北に走り、後者には東西に走る地層の走向に並行する斷層が多く、時としてはその兩側又は北側の下層に位する部分が、東又は南の上層の上にのしかゝつて、衝上げ斷層を成してゐる。この兩地塊の中間にある天龍川の下流から渥美半島に至る間の丘陵及び臺地は、これ等の古期岩層の陷沒した地塊であつて、これより三遠の沿岸に平坦なる地形ができて交通の便が開けてゐる。

內帶の古生、及び中生代地塊は美濃の山地から飛驒信濃に連り（第四章に中部地方として記載する）

その一部は南に延びて江濃勢國境の鈴鹿、養老兩山脈に連る。

この兩帶の中間に、紀伊半島では、櫛田川の北に、赤石山系では天龍川に沿ひ花崗質片麻岩の噴出帶が介在し、天龍川上流の東岸では赤石山系の西麓に沿ひ發達し、その南に續いて信遠三濃尾五國の交界地に延長するものは幅廣くなり、これを構成する岩石は主として黑雲母片麻岩及び片岩であつて天龍川奥の領家といふ村名に因んで領家片麻岩及び片岩と呼ぶ。



第二十四圖　衝上斷層

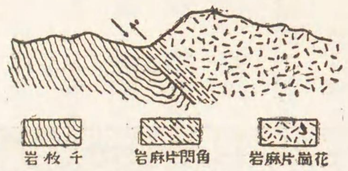
この岩石に伴ひ正式花崗岩がその西北に噴出し、兩者の境界は不明なるを常とする。これ等の噴出岩帶は、三河の岡崎豐橋海岸に至つて、一旦は渥美灣に沒するが、伊勢灣を越えて、再び紀伊半島に露はれ、宮川の北に丘陵を成し、櫛田川の上流では、その北側に急峻なる三畝山の峰嶺を成し、西走して紀伊半島の北界に連亙し、河泉兩國に至つて和泉山脈の北麓に沒するのである。

この片麻岩は北に向ひ、剝離性を失ひ花崗岩に漸移し、伊賀の東界に連亙する布引山脈を成し、更に北に走り鈴鹿山脈の分水嶺を成してゐる。

この岩層は、エドムンド・ナウマンが日本地質調査に着手するに當り、太古（始源）代に屬すると考へたが、實は內外兩帶の古生層との境界では接觸により、古生層の岩石が著しく變化した場合が多く、これを疑ふ餘地がない。

これに反して外帶の岩層との間には外側に向つた衝上げ斷層により、機械的接觸を成すために、かくの如き水成岩に與へた變化は判然ではないが、噴出岩の邊緣に結晶する變種と認むべき石英閃綠岩質の片麻岩がその南界に現はれる事實はある。

中生代白堊紀に屬する岩層は、この變動後に結晶片岩・片麻兩帶の中間の凹地卽ち今の瀨戸內海に相當する海底の沈積物であるが、東海道地方には露出がない。



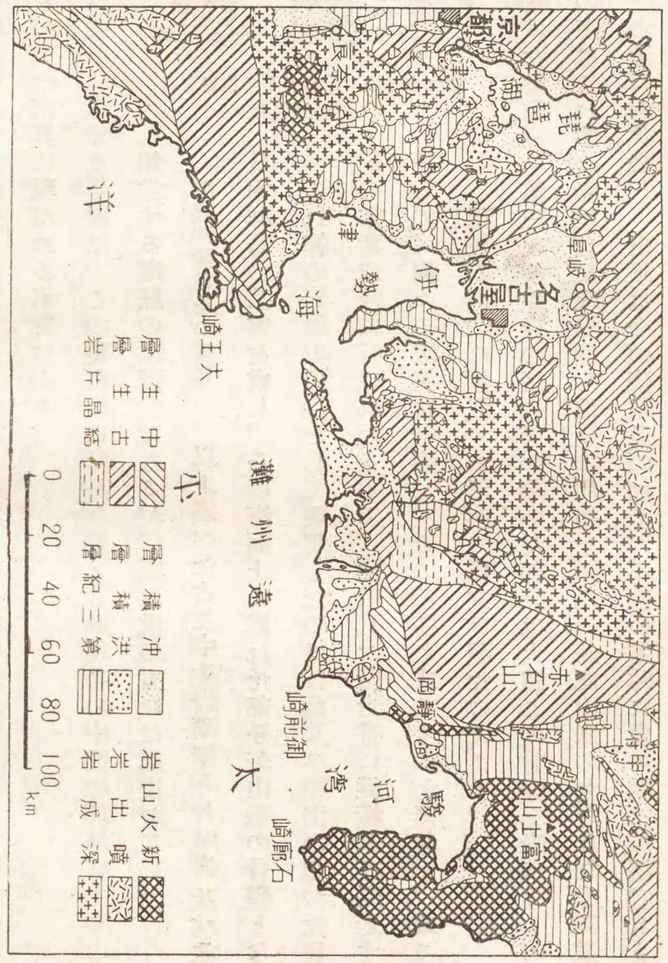
第二十五圖　片麻岩と千枚岩との機械的接觸

隆起沈降とその變遷　以上述べた古生中生岩兩層と片麻岩及び花崗岩とが、日本群島の基盤を成し、その海面上に露れた部分が山嶽の骨體となつてゐる。

これ等の岩層の山嶽として崛起したのは褶曲及び噴出の起つた後、卽ち白堊紀の末葉以後に行はれたもので、連續した諸岩帶に縱橫及び斜走する斷層が成長して、箇々の地塊に割裂し、その箇體の或るものが隆起し、或るものが沈降して現在の凹凸に類似する形態の成立を觀たのである。

こゝに掲げた地質圖の第三紀層以後の諸岩層を除いた部分は大體この骨骼を表はすものである。

近世代の海はこれ等の隆起した地塊（ブロック）卽ち地壘（ホルスト）の周邊を圍み、鈴鹿山脈の如きは加太隧道の通ずる邊が、第三紀の瀨戸を代表し、山脈は今の淡路島の如く、不破の遺跡に當る關ヶ原溪谷もまた明石海峽の如き水道を成し、當時の伊勢の海は深く東北に灣入して東濃丘陵地を含み、東南は岡崎までに及ん



第二十六圖　東海地方地質圖

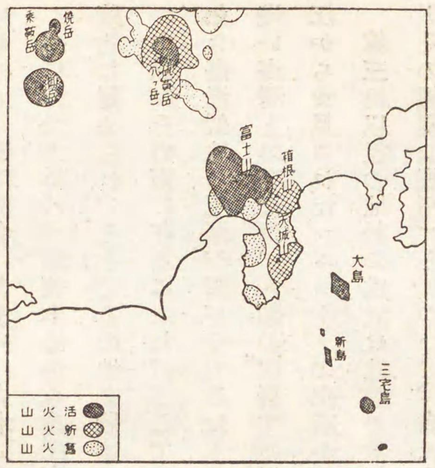
だ。この海灣の存在は伊勢中部（榊原）及び東濃（月吉）等に發見された貝化石に徵して、明かである。

しかしてこの海面が乾涸するまでには、今の濱名湖の如き半鹹半淡及び淡水の湖水の狀態を經過したもので、洪積層中に含まれた岩木（亞炭）層は、沼澤地に叢生した植物の堆積に係り、田螺の類もこれに伴つてゐる。渥美半島から遠江南部一圓もまた同じ狀態を經過したことは、平坦なる臺地の堆積物に認められ、そしてこの地文狀態は、海戸內海の凹地帶と共通にして、かれに在つては四國紀伊の山嶽がその南に在るに反し、ここではかくの如き地塊の存在したかは疑はしく、多分今の濱名湖の如き海岸低地の沼澤が擴がつてゐたものかと想はれる。とに角太平洋岸に續いた廣い臺地及び低地と淺い海灣との存在は、人類の住居する以前から現在まで變りはない。その過去の狀態は、伊勢及び遠江から發見されたマムモースの化石から窺はれる。

第三紀以後の地勢の成立は地塊の隆起と、沈降の結果であることは既に述べたが、この變動の性質とその機制（機巧）とについて、尙ほ少しく述べなければならぬ。

ナウマン說と原田說　日本群島の地勢を觀るに、本州の北半分は太平洋の南北邊に生じた南北に走る日本海淵またはタスカロラ海床と呼ぶ深い溝狀の海凹に接して、ほゞこれに並走し、南の半分はこれと直角に東西に延び、二つの走向の異つた山嶽が略ぼ兩者の延長の方向に連亙してゐる。この北日

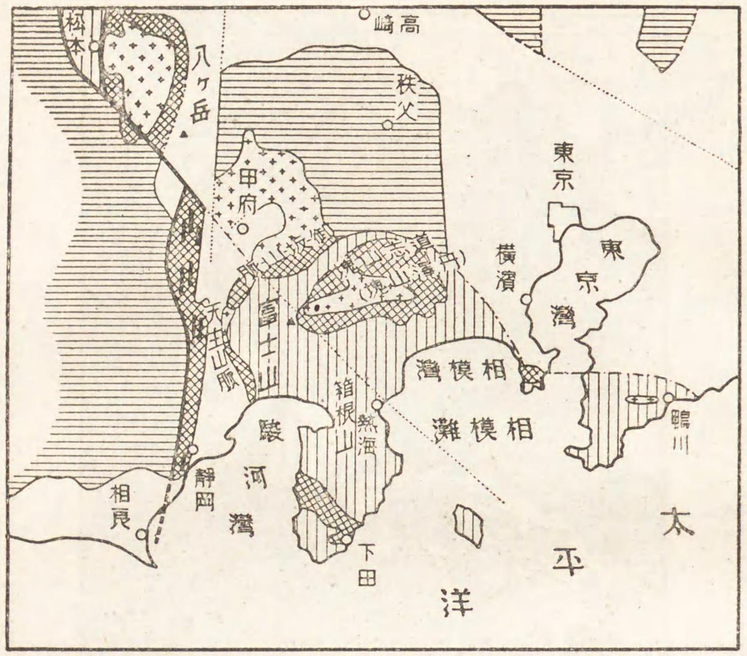
本と南日本の兩山灣の連接する部分卽ち彎屈部に伊豆半島が南に突出して、更に南方に飛石の如く海中に頭を露はした大小の火山島に連り、また半島北々西の方向に本州の最も幅の廣い部分を横斷して富士八ヶ嶽等の大なる火山の噴出帶がある。この山嶽の彎屈と火山の噴出とは日本群島の成立に重要なる意義を有するから、東海道の地勢と地質との關係を考へるに當つてもまたその意義を十分明確に知らねばならぬ。

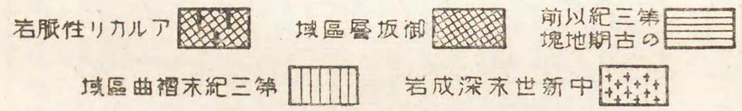


第二十七圖　富士火山帶の火山

日本褶曲系のアルプスと異なる特色は第三紀以後の火山活動が旺盛なることにして、アルプスその他の褶曲山脈に並走する火山帶と同じ意味の火山噴出帶の外に、この最も活動性に富む一帶がこれを横斷してゐる事實は、初めて日本の地質構造を研究したナウマン・原田等の諸先輩の間に論爭の種となつた。

ナウマンは赤石山系の走向が南日本の東西の走向から北に彎屈して、北々東南々西に延び、その東邊は富士川の西邊に沿ひ、崛起して甲府盆地及び富士山の西の斜面に對して壁立する一大地塊を成すことを認め、この南北に長い地塊を赤石楔狀山塊と呼び、またその東の火山噴出帶のそれに比して新

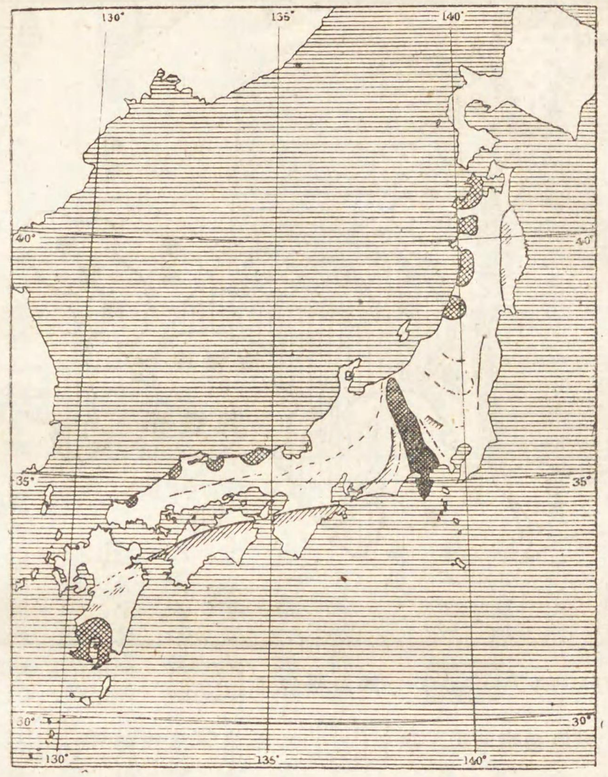




第二十八圖　富士火山帶の地質構造

らしい堆石物に埋められた低地を大地溝帶 Fossa Magna と呼んで、これを斷層によつて生じた狹長なる地溝狀沈降地帶であると看做した。

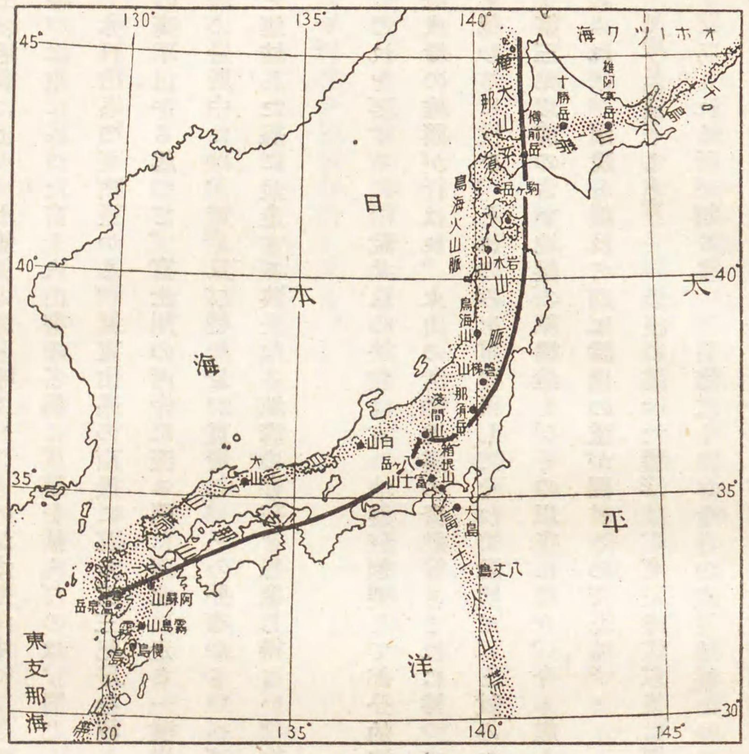
原田（豐吉）博士は駿遠兩國の赤石山系の東南邊緣に發達した褶曲せる第三紀丘陵と、これと富士川を隔てた天守御坂兩山脈が、南北の走向から彎屈して東西に轉じて、關東山系の走向に並走する事實を基礎とし、ナウマン氏の見解に反對し、ヒマラヤ、ヒンズークッシュ等の山系の凹屈と同じく、對曲（Scha-



第二十九圖　ナウマン氏の日本地帶構造

arung Syntoxis）と呼ぶべきものとし、南北に走る樺太系と東西に走る支那系との兩褶曲系が相會する所であると考へ、ナウマンの大地溝帶を富士帶と呼び、北海道を南北に横斷する千島帶、九州を南北に横斷する霧島帶と對比した。

ナウマンは、關東赤石兩山系の凹彎をもつて剛固の地盤に衝突した地層の波動とし、七島山脈と呼ぶべき北に向ひ突出した古い地盤の存在を想像してこれを説明せんとし、原田説を冷評して日本褶曲系を横斷するもの



第三十圖　原田氏の日本群島地質構造圖

に帶の字を使用する不當を鳴らした。

ナウマン原田兩説の批判　今日から兩説を批判すれば、原田氏の内外兩帶の地塊に割裂して、富士川から姫川に至るS字狀の溪谷線に示された斷層により、その西が昂起して、東が陷沒してゐる事を輕視したのは解すべからざる缺陷であつて、ナウマン説の御坂天主兩山脈を鍋狀の陷沒地とし、その中心に富士山が噴出したのを、伯耆大山などの場合に比較したのもまた眞相に齟齬し、第三紀以來の海底火

山の活動により、小笠原山脈と呼ぶべきものが太平洋中にできつゝあつて、その内帶に當る火山活動帶が本州に入つた富士火山帶の名稱に異議を插んだのは、同じく的を外れた仇矢である。

赤石山系の東南邊から、關東山系の南邊に亙る第三紀層を觀るに、火山作用は中葉以前に靜岡の南の高草山から起つて、富士川の西岸に至る間に南北に走る一噴出帶があり、御坂・丹澤（道志）諸山脈の岩層中には、熔岩及び凝灰岩が互層し、その分布からいへば、單に八ヶ嶽・富士・愛鷹の諸火山を連結した線に並走する狹長なる地溝の存在を想像し得ない。故に大地溝帶なる名稱は妥當とはいへない。

これを要するに兩說共通の缺點は古い地盤が割裂して部分的沈降の起つた後に、その周邊に第三紀海成層の堆積が行はれ、火山の活動地震の發動等もこれに伴つてでき上つた現形に對して箇々の事實を認むるに從ひ、それのみを重要視してそれで說明せんと試みたことにある。

第三紀以前の古い地盤の原構造と、その以後に起り、今も起りつゝある變動による變形を區別して考ふれば、兩說と離れて別に說明の道が開けるのである。

地變を證明する史實　最後に述べた變形は、有史時代以後に經驗した地震・噴火・地質の變動等から闡明される所が頗る多い。明治二十四年十月の濃尾地震の時に發見された根尾斷層は、內外兩帶を斜走する坼裂線に沿ひ、地盤の喰ひ違ひが起り、地塊が割裂と共に移動する事實を示すものであり、大正十二年九月の關東地震は、富士火山帶の東側にある中新世石英閃綠岩の噴出帶に並走する房總半島から、丹澤山塊の南邊に至る震央帶の活動にして、火山帶以東の地盤が歪んで相模灣北岸から房總半島の大部分が少しく降起し地盤の昇降が地震に伴ふことが明になつた。

最近陸地測量部の發表によれば、富士山の海拔高度が十メートルだけ減少したといふのは丹澤山塊の隆起と反對の地盤の變化が、火山帶の主軸に起つたのではないかと疑はれる。かくの如き變動は地表から數十キロの深所に起る岩漿の上昇を前提すれば說明されるもので、數キロの淺所に起る地震を伴ふ火山噴火は、必ずしも直接にその影響を被らぬのが普通である。しかれども寶永四年十月の東海道地方大地震の後、十九日目に富士山の一大活動があつて、寶永山の爆裂が起つた如き例は、或る脈絡の存在を疑ふ材料となる。

東海道地方海岸から離れた洋底に震源を有する地震もまた屢〻記錄され、その中明應七年八月及び永正七年八月の地震は、遠州洋底に震源を有し、濱名湖の入口が津浪によつて決潰したといふ。われわれの有する記錄は永い地質時代の事變の歷史から見れば、浩瀚なる資料の一ページにも足らぬかも知れぬが、同じ原因が集積して大なる地進の變動となつたと考へてよい。

地體構造上の特色　以上觀來つたところから進んで本地方の地勢を概括して說明すれば　近畿地方の東邊は、內帶の地盤を橫斷する斷層ができて鈴鹿山脈の地壘が崛起し、その東にも北西南東に走る

斷層があつて養老山脈の地壘とその東の濃尾平野の一大凹地が出來たもので、斷層の發生は現在に至るまで尙ほ繼續し、明治二十四年濃尾地震、明治四十二年姉川地震の如きはこの活動を意味する。これに比して更に大規模の大斷層は、富士火山帶の西界に沿ふて走るもので、崛起した內外兩帶の地塊の隆起は前者よりも、一層著しく、夙に地質構造論者の注意を惹いた。この兩者に對して、尙ほ第三の南北に走る斷層が東徑一三九度二〇分の子午線に沿ふて關東山系の東邊にもあるものの如く關東地塊とその東の大平野との關係は、かくの如き大なる地塊の一昇一沈が第三紀新期の海ができる前に起つたと說明し得る。

尙ほ第四のこれに多少並走するものが、大平野の東太平洋海底との間にも存在するらしく、卽ち日本群島の地盤は、東西に延びた東海道全部を橫斷する斷層により、三段の西に緩斜した大地塊に分れ、平坦なる沿岸も高峻なる山嶽も大體これ等の地塊の變位により生じたものである。本地方を含む地域の大勢はかくの如く、西南日本の東西に延長して瀨戸內海を有する地方と、東北日本の南北に延びてその中間に二列の凹地を有する地方との中間に位し、中央に高峻なる山嶽の蟠居して、その兩邊に太平洋と日本海の廣い海岸平地の發達した特性を有するから、これを中央日本として區別すべきで、本地方はこの中央日本の西南部を代表するもので、地勢上西南日本と東北日本との移り變りに當り、人文地理上にも同じ關係がある。

山嶽溪谷及び平地

富士山とその周圍　富士火山帶の地方は、前に述べた如く古い地盤が沈降した上に、第三紀海中に沈積と噴火とが起つて出來たもので、御坂・天主（天子）兩山脈が、富士山の北から西を環つて馬蹄形を成し、御坂峠（一五二五メートル）の西に聳ゆる黑岳（一七九五メートル）本栖湖の南に屹立する雨ヶ岳（一七七二メートル）及びその南の一九四五メートルの秀點を有し、その地盤の大部分は、第三紀中新世の火山凝灰岩から成り、その堆積する海中に棲息した有孔蟲レピドシクリナ Lepidscyclina を含む石灰岩がこれに挾まり、富士山の活動に先つて小笠原列島の火山活動が始つたと前後して、ここに起つた噴火より噴出物を排出したものと察せられる。この兩山脈は南及び東に急斜し、御坂山脈と富士山の裾野との間に河口・西湖・精進・本栖の四湖を湛へ、吉田の西北船津からこれを北望すれば、河口湖を隔てゝ湖北に屛風を建てた如く聳立してゐる。西湖の北でも鍵掛峠が同じく甲府盆地の天然の障壁となり、唯精進湖の北の女坂のみは、名の如く最も低く昔から甲駿交通の中道として利用された。

北から御坂を越える旅客は、單調なる山路を攀ぢ盡して、視界忽ち開け、脚下に泉水の如き諸湖を俯瞰し、眼前に緩るい裾野を曳いた富士の仙姿に對立して、これを平視し、その壯觀は筆絕の及ぶ所

でない。

中道は天主山脈の東麓に沿ひ、南北に走る一斷層線にして、御坂山脈はその西において落ちて一二七一メートルの釋迦ヶ嶽となり、西南に走り、天主山脈は本栖湖の南から起つて南走し、その山骨には閃綠岩の岩瘤を成した噴出塊がある。

富士火山帶一般の地勢を大觀するに、最も完全なる圓錐形を維持する富士山は、最も新らしい活動により生じた形態にして、その南の愛鷹山は遙に古い噴出に係る爲めに、浸蝕既に頗る久しく進行し、富士山の頂上に相當する部分は、全く析解されて互に孤立した數峰となり、富士山から噴出した熔岩及び灰砂礫はその北の山腹の大部分を埋め箱根山との間に出來た溪谷に沿ひ、熔岩が南に流下し、鐵道沿線に見る如く、熔岩が黃瀨川の河床を成す處があつて佐野瀑布の如き奇景を呈してゐる。

伊豆半島の火山　伊豆半島は南北に走る狩野川の溪谷により東西兩半に分れ、その東側は箱根・熱海・天城の三火山が南北に互に累り合ひ、その西の裾野は西側の更に古い達磨・根越等の火山の裾との間に稍廣い溪谷平地があつて、國中を縱貫する交通線はこれに沿ひ、天城山西南麓の天城峠を越えて南部に通じてゐる。これ等の諸火山の中西側のものは古く、東側のものは新らしいが、その中熱海山は火口の東半を失つて一灣となり、天城箱根兩火山新らしくその南と北に噴出したもので、形態は遙かに完全である。此等の諸火山を構成する噴出物は、何れも輝石安山岩であつて、第四紀活動に普通なる岩種に屬する。天城峠以南の賀茂郡の地方及び西岸には、第三紀中新世の岩層と、玄武岩石英を含む安山岩及び粗面岩等が噴出し、江ノ浦附近にも凝灰岩を伴ふ四種の熔岩が露出し、大仁の對岸の城山の如き奇巖を露し、東京諸公園の石柱はその柱狀節理を利用した石材である。

この火山帶の東邊の交通線は、東北に桂川上流の甲斐國東部郡内に通ずる桂川に沿ふものがあり、吉田から道志・丹澤山塊の西邊に沿ひ、山中を經て籠坂を踰えて須走に降り、御殿場に至り、黃瀨川に出る。東海道の街道は是から箱根山の南北麓を越える足柄峠と、三島から箱根大火口を越える箱根峠とが、半島を横る大道を成し、後者は富士山貞觀六年の噴火により足柄峠の塞がつた時に用ゐられた後、德川幕府も亦た事業上の政策から交通の幹線としたが、明治以後鐵道は溪谷に沿ふた勾配の緩なる前者に從ひ敷設された。然るに溪流の暴漲により破壞されて線路の不通を來たすことがあるので、熱海に迂回する新計畫を見た譯で、熱海火口外輪山を貫通する丹那隧道工事の困難により、容易に完成に至らなかつた。山北の隧道附近が關東地震により山崩れを生じ、その創痍癒えなかつた舊線路は不安であつたから、熱海線の開通には大に意義がある。

赤石山系と富士川溪谷　富士川以西の駿遠兩國の山地は、赤石山系の南部であつて、甲信兩國との交界地において、二千メートル以上の高峯を戴いた山嶽地を成してゐるが、街道に沿ふた山地は千メートルを越える秀點少く、第三紀層の幅廣き一帶は五百メートル内外の邱陵地である。この高峻地域

は登山家の謂はゆる南アルプスであつて、中部地方に記載する筈であるから、こゝには山嶽地を除いた部分だけを考察する。

赤石山系は、西側卽ち內側に片麻岩の低い一帶が天龍川上中流の東岸に沿ひ、南北に延長し、その東に千メートル乃至二千メートルに達する結晶片岩及び古生層の一帶があり、中央に古生層の最も隆起した赤石主脈とこれに並走する白根山脈とが二千乃至三千メートルの高嶺で、三千メートルを越ゆる秀峯を起し、南日本アルプスを成す。その東には富士川の支流野呂川早川を隔てて我々の巨摩山脈として區別せんとする主として小佛層から成つた稍低い一帶があり、御坂第三紀層及び鮮新世の丘陵はその東麓に沿ひ走つてゐる。故に甲府から西望すれば、赤石及び白根と巨摩とこの丘陵とが、少くとも三段になつて障壁の如く列峙し、雄大なる形勢を呈するのである。

富士川の溪谷は鰍澤以下御坂山脈西北部から、その西岸に續いた第三紀丘陵の間に溪谷を成し、處處に急流岸を嚙み激湍渦を卷き、下航艇中の遊客の膽を寒からしめる奇觀がある。吉原の西の富士驛から川に沿ひ身延鰍澤を經て甲府に達する鐵道が最近に開通する以前は、甲府から東海道に出る最捷徑であつた。

赤石山系の南に陵夷した駿遠地方の山地及び丘陵地は前に擧げた諸山列の南に延長した部分に當り、蒲原丘陵は、天守山脈の富士川を渡つた延長であつた、興津から十島に出る南北の一線はその西界である。久能山の西邊から興津の上流に引いた之に並行する一線は、略ぼ赤石山系東麓の第三紀層帶の西界に當り、何れも丘陵の起伏するに止り、著しい峯嶺なく、又南北に續いた山陵もない。

安倍川と大井川溪谷　これ等より遙かに顯著なるは安倍川及び宇津谷峠を經て藤枝に達する構造谷であつて、その東に接して千メートルを越えた眞富士・龍爪山があり、南に延びて靜岡市北の賤機山となり、飛んで高草山に至り海に沒する一列の山脈がある。この山骨にはアルカリ性粗面岩及び粗面玄武岩の噴出帶があつて、或は中新世よりも古い第三紀層の山脈であるらしい。興津以西の稍廣い平野の續いた東海道線はこの山脈の千切れた處を安倍川その他の諸川の埋めた冲積地で、駿河全國で最も沃饒の地味と溫暖の氣候を有する部分である。

この構造谷線の西側は、大井川との間に白根山脈の南端の幅廣き山嶽地を成し、その北部、安倍・志太兩郡を含む地區には二千メートルに達する秀點はないが、七ツ峯（一五五三メートル）の如き高峯が屹立し、沿道數キロの間は五百メートル以內の丘陵となつてゐる。

宇津谷峠は東南の一角を成した高草山の西に當る隘路であつて、業平朝臣の「するがなるうつの山邊のうつゝにも夢にも人はあはぬなりけり」の歌什から歌枕となり、連歌師宗長の遺蹟蔦の細道も亦た有名となつた。

この丘陵の突角より、南には燒津・藤枝・島田の諸邑の南に稍廣い大井川河流の平地が東に向ひ扇

狀に開け、その西は赤石主脈の南に延長した部分で、榛原・周智・小笠三郡に亙る地方の北部は、同じく稍險峻であるが、沿道附近及び以南は五百メートル以下の丘陵及び臺地であつて、第三紀層の上を蔽ふ洪積世の礫層は、金谷の近傍から相良の西に廣がり、これを折解した溪谷として稍著しいのは南朝の中臣俊基卿の「古もかゝるためしを」と添へた菊川であるが、殺風景なる堀之内といふ驛名では旅客にはまた當年を想ふ感興は起さしむるに足らぬ。

沿道の北には海拔約五百メートルの第三紀層丘陵地が起伏し、頗る急峻なる斜面を成して、溪谷も亦た狹隘で、聚落少く、掛川以西稍開け、袋井に至り太田川の冲積地が大に開け、昔の遠近國府は見附、中泉の附近にあつた。

この地方の山嶽は森林地で、御料林・國有林及び民有林となり、丘陵の緩斜面及び臺地は茶畑となり、安倍・榛原・周智三郡が靜岡製茶の產地として最も重要なるは、地勢と氣候との栽培に適するに因るからである。

天龍川溪谷と三方ケ原　天龍川の溪谷は、二俣に至つてこれを頂點とし、中泉濱松と連結した鋭尖なる三角形をなした洪涵平地に出で、その東は森町から中泉に至る狹長い臺地がこれを限り、その西は廣い三方ケ原臺地の東邊の崖地に限られ、二俣から本坂を經て豐川の北に引いた姫街道の一線が山地の南界を劃してゐる。この線と天龍川中流と豐川とによつて限られた三角形の地區は、天龍川の構造谷の西側において、赤石大地塊の一部が東側に對して落ち込んだ稍低い山塊であつて、北東南西の走向を有する結晶片岩及び古生層より成り、若しこれを區別するならば西遠江山脈とも呼ぶべきものである。

二俣から豐川に引いた線の南側は更にこれより低く、その東部は三方ケ原の臺地と濱名湖等とがある。その西も亦た本坂以南は益々陵夷して、國境の西二川驛に至れば僅かに道傍に屹立する丘陵となり、鐵道以南は、高師ケ原の松林となり、密林の間に田圃が開け、農家の建つて行く開墾初期の形勢が見られ、日本武尊の東征せられた當時の東海道筋の風景の一部が今も殘つてゐるのは面白い。

これより西南は渥美半島の西端まで全く平坦なる海蝕臺地になつてゐる。

二俣は信濃から天龍川に沿ひ、遠州平地に出る門戸を成す險要の地で、元龜三年十二月武田信玄が下伊那から南下してこゝに在つた二俣城を攻め取り、氣賀に向はんとして濱松城に據つた德川家康との間に三方ケ原の遭遇戰が行はれた。德川氏八千の兵が五倍する甲州勢に向つて突擊して、敗退を餘儀なくされたとはいへ、三河武士の戰鬪力はこの一戰により試練を了つた。

豐川と矢作川溪谷　豐川の流域は上流と支流寒狹川との灌漑する設樂第三紀盆地があつて北は高く千メートルに達する大館山明神山等があるが、第三紀層を貫いて安山岩の噴出した鳳來寺山（六八四六メートル）の孤峯が名高い。豐川と矢作川との間には、寒狹川の西に三河山脈として區別すべき片

麻岩及び花崗岩の地塊があり、北東南西に走り西南端は渥美灣に至つて、海に入る。この山地も亦た東北の段戸御料林の邊が最も高峻にして千メートルを越えた出來山の連嶺がある。准平原の隆起した古い高原性の山地にして、析解作用が進んだ爲めに溪谷が種々の方向に出來てゐる。その最も著しいのは、御油から西北に向ひ岡崎に通ずる東海道の街道になつた横谷である。東南邊に聳立する本宮山（七八九メートル）は豐川平地に面して豐橋豐川から北座する目星しい秀點である。

豐川下流にも亦た三角形をなした洪積層の臺地が開け、その上流の寒狹川との合流點に當り、洪積臺地の上に長篠城址がある。この地點は伊那街道を扼する信三交通の一門戸を成し、奥平信昌の立て籠つて天正三年五月武田勝頼の二萬餘の大軍を引受けて防戰した處である。後詰した織田・德川兩軍の陣地は寒狹川の對岸有海原に在つた。

矢作川は岡崎の北では三河山脈の西邊を劃する構造線に沿ひ南北に流れ、これより西は境川まで洪積層の廣い平地となつてゐる。三河の語源に三つの河ある土地といふ意義を附會するも、「み」は廣い平野ある美濃の場合と同じく矢作川を御河と呼び、その流域の美稱としたとする說に從ふべきである。

濃美平野と木曾川　境川の西北は犬山から名古屋に引いた一線までの間は尾張丘陵と呼んで區別すべき新第三紀層の陂陀たる丘陵性臺地であつて、軟弱なる粘土質の地層に浸蝕による複雜なる凹凸があつて、屢隘路が臺地の間を縫ひ、地形を慣知した軍隊の掛引に適し、天正十二年四月豐臣德川兩軍の小牧山對陣に當り、森可成・池田輝政等の奇兵をはなつて岡崎を衝かんとして、德川勢に逆襲された長久手は、瀨戸町の西南に在る。

永祿三年五月今川義元の大軍が尾張に侵入した時には、東海道筋をひた押しに西進して、この丘陵に設けた諸砦に兵を分つた爲めに、織田信長の奇襲により桶狹間の本陣を衝かれて竪子の名を成さしめた。森池田の計畫は信長の故智を套襲して却つて失敗したものである。

美濃東南部土岐郡と三河北部との交界地方には、木曾川の中流と矢作川の上流との間に崛起したる花崗岩の山塊があつて、木曾山脈の駒ヶ嶽の南北の走向から東北西南に折れて、惠那山塊となり、これから更に西南に續いた千メートル以内の山地となり、木曾川溪谷・竹折川・矢作川等の東北西南に連る構造線により更に小さい地塊に分れてゐる。

多治見から西北の關町に引いた直線と、瀨戸犬山岐阜を連ねた弧線との間には、美濃山地の古生層小地塊があつて、その東の第三紀の不規則なる灣入部を充たした丘陵地と、溪谷平地とを西側の大平野とを隔てゝゐる。木曾川及び長良川・津保川はこれを截つた峽谷であつて、志賀刔川の日本ラインと激賞した木曾川本流は水量の豐富なる爲めに特に壯觀を呈するのである。

熱田・桑名間の伊勢灣に界した濃尾平野は、前に擧げた矢作川中流と、養老鈴鹿兩山脈東邊の構造

線の間に陥沒して生じた凹地であつて、新第三紀層及び第四紀層の埋沒した部分で、海灣も亦た淺きも未だ埋却されない部分である。そしてこの埋沒は木曾川本支諸河流の今に至るまで繼續する冲積作用であつて、現に洪水氾濫が屢々起り、海岸に絶えず陸地が增加しつゝあつて、埋立工事の容易に行はれる利益と、港灣が常に淺くなり浚渫せねばならぬといふ不利とが錯綜してゐるのは免れないところである。

鈴鹿山脈と養老山脈　桑名は濃尾平野と伊勢北部の沿岸平野との境界にあつて熱田との間に、七里の渡船を通じた交通の要點を占めてゐる。これから南は鈴鹿山脈東麓と海岸との間に洪積臺地が東に緩斜し、その丘下と河谷とに洪涵平地がある。宮川櫛田川兩河口の間には低い荒地明野ヶ原があつて、飛行場に利用されてゐる。

關ヶ原から南に走る鈴鹿山脈は不破・鈴鹿兩古關の間に南北に連亙する地壘であつて、靈仙山（一〇八四メートル）藤原嶽（一一四三メートル）釋迦ヶ嶽（一〇九二メートル）御在所山（一二一〇メートル）雨ヶ岳（一二三八メートル）等の秀點があるが、頂點を結んだ線は大低淮平原の隆起した形狀に固有なる平坦の空線（スカイライン）を描き、その南の布引山脈と共に本地方の西界を成してゐる。その北部は伊吹山を構成するものと同じ古生代新期の石灰岩の厚層が、山上に露はれ、石灰岩の浸蝕によつて生じたカルストの地貌を呈し、草木に乏しい岩盤に漏斗狀に陥沒した石灰穴が處々にある。中央及び南部には東邊に沿ひ花崗岩の噴出があつて員辨郡石榑は鑛物の產地として名高い。

養老山脈はその北端東に接し、この丘陵に斜走して東南に向ひ、木曾川河流の西岸を劃し、前者よりも低く養老瀧の南の秀點が八七六メートルに達するに過ぎぬ。この兩山脈の間に北流する牧田川と南流する町屋川があつて伊勢國員辨郡の溪谷が北に突出してゐる。

鈴鹿山脈の南端は、鈴鹿川の溪谷に横斷され、東邊に沿ふて發達した臺地の下盤を、第三紀層がこの溪谷に露はれ、關町の西の山嶽と臺地との間に丘陵を起し、礫岩が風水に削られた奇峭の岩角を露はすものが、加太隧道の東に認められ、その最も奇怪なる岩峯を成すものが鈴鹿峠に至る路傍にあり狩野法眼の筆捨山と呼ばれた海道奇勝の一である。

布引山脈は花崗岩から成つた伊賀高原の東端の丘陵であつて、秀點七八百メートルに達するに止り、その南に室生山から東に續いた第三紀凹地に噴出した石英安山岩の奇峯攢立し、具留尊山は一〇三三メートルに達する。

櫛田川と宮川溪谷　伊勢の西南に突出した部分は、櫛田川と宮川の水源地で、高見山（一二四九メートル）から大臺ヶ原山日ノ出ヶ嶽（一六九五メートル）に引いた南北に走る一線は紀伊山系を東西に二分する分水山脈をなす。高見山は櫛田川支谷との分水嶺（高見峠）の北に聳立する錐形の孤峰であつて、これより東に三峰（一二三九メートル）局ヶ嶽（一〇二八メートル）の高峯を有する片麻岩

の峯嶺連續して、南に急斜する山脈を成して伊賀の南界を劃し、その東端は櫛田川の屈曲して北流する横谷に截られて陵夷して、烏嶽（五四五メートル）以東は低い丘陵地となつて、五桂池の北邊に沿ひ、田丸町に至り全く平地に沒する。我々はこれを三峰山脈と呼ぶ。

櫛田川縱谷は和歌山から來る伊勢街道であり、高見峠以東は平坦なる谷道に沿ひ、松阪田丸の和歌山藩領と本藩とを連絡する幹線を成し、上流波瀨はその飛地となつてゐた。この縱谷はまた吉野から伊勢灣大湊に達する孔道となつて吉野朝廷の東海道筋の交通が出來た。

飯南郡西南部の櫛田川上流と多氣郡西南部の宮川上流との間には、池ノ木屋山から東北に走る千メートルを越えた高山連亙するが、その東半は同じく漸く高度を減ずる。多氣郡と北牟婁郡との境界は大臺ヶ原山から東北に陵夷した千メートル以下の峯嶺のみより成るも、兩河の水源を成す諸支谷は何れも高山幽谷であつて、耕縱に落葉樹を雜えた晝なほ暗き森林密生し、青谷蓮等の山村がその懷にある外は人氣の少い仙境である。

宮川の支谷大內山川の下流は、南北に走り、熊野街道これに沿ひ、瀧原の野後に豐受神宮の舊蹟と稱する瀧原神社が鬱蒼たる森林中にある。

野後から海岸の錦浦に引いた南北の一線以東は山嶽なほ重疊するも、千メートルに達するものなく、田丸から海岸の道方に引いた南北の一線以東は、更に低くして六百メートルに達する峯もない。

然れどもこれ等の山間も亦た人烟稀にして、分水嶺を踰えて南に海岸に降つて初めて稍殷富なる聚落に入るを常とする。

氣　候

氣溫　東海道地方は日本群島の代表的氣候を樂しむところである。日本は東亞地域に屬し、大陸と大洋との間に起る夏冬氣壓の影響を被むる。冬は高氣壓の卓越する大陸から低溫の氣流に侵されて緯度に比して寒くて乾燥し、夏は高溫なるために濕潤なる海流により多量の降雨を見、且つ溽熱を感ずる。卽ち概して日本全國の氣候の夏冬の對照が大きいことは朝鮮支那と共通の特色である。しかるに本地方は北に山を負ひ南は海に面するから、海洋の影響頗る多大であつて、本州の中にあつて最も溫和で、わが群島の東亞大陸に比して較差の小さい島嶼性氣候の優良なる關係が明に現はれてゐる。

東西に延びて緯度の差が少いので、その西端と東端との氣候要素に差異もまた小さく、中にも氣溫に於いて著しい。但しこれは海拔高度の小なる主要都邑にある測候所觀測の成績についていふことで三千メートルを越ゆる高地との間には地形上から生ずる大なる差異あることは勿論である。主要測候所氣溫（攝氏）表は左の如し。（夏期は七月よりも八月の方が高いからこれを採る。）

測候所	氣溫平均 一月	氣溫平均 八月	氣溫平均 年	毎日最高平均 一月	毎日最高平均 八月	毎日最高平均 年	毎日最低平均 一月	毎日最低平均 八月	毎日最低平均 年	月中及び年中 最高日平均	月中及び年中 最低日平均	月中及び年中 その較差	氣溫の極數 最高	氣溫の極數 最低
一、岐阜	三・〇	二六・四	一四・二	八・一	三一・四	一九・六 (一)	一・〇 (一)	二二・七	一〇・〇	二五・二 (一)	七・二 (一)	四二・四	三八・二 明	(一)一〇・七 大
二、名古屋	三・二	二六・六	一四・五	八・三	三一・七	一九・七 (一)	一・〇 (一)	二二・六	一〇・〇	二五・五 (一)	六・二 (一)	四一・七	三七・七 大	一一・一・二五 (一)九・五 明
三、津	四・〇	二六・二	一四・五	八・七	三〇・四	一九・〇	〇・二	二二・六	一〇・五	二四・九 (一)	四・八 (一)	三九・七	三・七五 大	二八・二・二三 (一)七・八 明
四、濱松	五・〇	二五・九	一五・一	九・三	三〇・三	一九・五	一・二	二二・四	一一・三	二四・三 (一)	三・六 (一)	三七・九	三七・二 明	二七・七・一九 (一)六・〇 大
五、沼津	五・三	二六・〇	一五・二	一一・一	三〇・四	二〇・三	〇・三	二二・三	一〇・九	二三・八 (一)	六・〇 (一)	三九・八	三六・六 大	一・九・二 (一)八・一 明

この五ヶ所の内一二三の三ヶ所は何れも伊勢の海の灣入するところで、略ぼ南北の方向に列し、凹地の北と中央と南との間に、年平均の差が殆ど認められないのに反し、冬の最低と夏の最高とが何れも南の津が遙に溫和なる事實がある。これにより伊勢の海の開放したところと、大洋に面した濱松邊の大洋沿岸との氣溫の變化に大差なきことが知れる。

これ等の數字の中、上の三者の年平均と年中較差及び極數のみを本地方に隣接する測候所の數字に比較すれば左の如し。

この内最も海流の影響の多いのは、潮岬と布良で、本地方の志摩、伊豆の突角は略ぼこれに比較し得べく、陸内にある岐阜と名古屋は、較差の多い點で京都、八木に比較し得べく、津・濱松・沼津はその中間にあつて和歌山・東京・横須賀に比較し得べく、他の陸内及び海岸の地方の狀態もまたこれにより略ぼ推知される。

	年平均	月中及び年中 最高平均	月中及び年中 最低平均	氣溫の極數 最高	氣溫の極數 最低
京都	一三・八	三五・七	(一)七・九	三七・六 大	一三・八・一六 明
八木（大和）	一四・二	三五・三	(一)五・三	三七・七 大	一三・八・一三 大
和歌山	一五・三	三五・〇	(一)三・一	三七・九 大	一一・八・三 明
潮岬	一六・五	三一・八	(一)一・八	三五・六 大	四・七・一四 大
東京	一三・九	三四・〇	(一)六・二	三六・六 明	一九・七・一四 大
横須賀	一四・五	三三・三	(一)三・六	三六・五 明	二七・八・三 明
布良（安房）	一五・四	三一・五	(一)一・九	三一・八 大	一一・八・一三 大
				(一)二・九 明	二四・一・一六
				(一)二・一 大	一一・一・一五
				(一)四・九 明	三七・一・一七
				(一)三・五 大	一三・一・一
				(一)八・二 大	七・一・九
				(一)六・七 明	二四・二・三
				(一)三・六 大	一・一・三〇

大氣濕度（百分率）は概して一年を通じて變化が少く、六〇を下る乾燥も八五を越える濕潤もない。四季の月平均及び年平均左の如し。

その局部的相異は、岐阜・名古屋・津の三ヶ所が、十一月から一月までの冬季三ヶ月間の濕度が、濱松・沼津より一ヶ月やゝ大なることである。これは大陸の高氣壓が起る東南に向ふ氣流が、北陸沿岸の暖流の上を通過し來り、加越の地方に多量の水蒸氣を吹き送る餘波が山地を越えて平野に及ぼす影響であつて、最も著しく岐阜に認められる。これは越前西部及び若狹東部の低い分水嶺を越えて、琵琶湖

	一月 平均	四月 平均	七月 平均	十月 平均	年
一、岐阜	七七	七三	八〇	七九	七七
二、名古屋	七五	七三	七四	七八	七五
三、津	六九	七五	八二	七九	七六
四、濱松	六四	七四	八五	七八	七四
五、沼津	六六	七四	八一	七七	七四

盆地に侵入する氣流の一支が關ヶ原の鞍部を通過して、岐阜の方向に來る關係である。

降水量　降水（雨雪）日數は左の如し。

岐阜の十一月から二月まで四ヶ月の降雨日數が他所よりも多い事實は同じく冬季の氣候が西北の受ける結果である。

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
一、岐阜	一三・〇	一一・三	一三・五	一三・四	一三・五	一五・四	一五・九	一三・九	一六・一	一二・三	一一・六	一三・九	一六三・七
二、名古屋	九・五	八・九	一二・五	一二・六	一二・四	一四・八	一四・五	一二・〇	一五・七	一一・八	一〇・一	九・五	一四四・四
三、津	九・三	一〇・五	一四・〇	一三・八	一三・四	一五・七	一四・七	一三・八	一六・六	一二・七	一〇・四	八・八	一五三・八
四、濱松	七・七	八・〇	一二・〇	一三・八	一三・〇	一五・一	一三・七	一一・四	一五・七	一三・一	九・八	七・八	一四〇・九
五、沼津	八・〇	九・三	一二・九	一四・六	一四・五	一五・八	一四・九	一二・四	一六・三	一三・六	一〇・三	七・九	一五〇・六

降水總量は上の如し。

降水總量（雨雪量）は大洋に面する濱松・沼津は伊勢の海に瀕する津・名古屋よりもやゝ多量にして、陸内にある岐阜が、

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
一、岐阜	七一	七六	一三七	二〇二	二〇七	二六九	二五八	一九八	二八二	一五八	九六	七六	二〇二八
二、名古屋	五六	七〇	一一〇	一六〇	一六四	二二四	一八三	一七六	二四九	一五四	八五	五六	一六九七
三、津	四八	六八	一一〇	一五四	一七一	一四八	一七七	二〇六	二九九	一八四	八六	五五	一八六〇
四、濱松	六〇	七三	一四三	一九五	二〇八	二三八	二〇三	二〇三	二八二	一六九	一〇六	七〇	一九五〇
五、沼津	七九	八五	一四六	一八七	一八五	二二四	二一七	二三〇	二八一	一八六	一〇八	七七	二〇〇四

更に多量であるといふ異常を呈するが、これもまた十一、十二、一、二、三の五ヶ月に氣流の關係で雨雪が多いことゝ、岐阜の位置が山地に接近して水分の凝集の起り易いのとに因るのである。

以上掲げた數字から見れば本地方の平野の都邑降水總量は、本州の中で先づ中庸の程度にある。しかれども山地が遙かにこれよりも多量なるべきことは岐阜の一例から推知され、各縣の測候所以外に設けた觀測所の成績もまたこれを裏書し、これより西南の宮川水源地では四〇〇〇ミリに達し得るのである。

蓋し伊勢の西南部は高い山嶽が熊野灘に接し、黑潮の影響が特に著大なる水量を有する河川のこれ等の山間から流出するのは平地の觀測量に倍する降水の賜に外ならぬ。

海流の影響の冬期に少く夏期に多いことは勿論で、美濃北部の山地のみは冬季西北から來る氣流によく受くるところが少くない。

本地方の夏期降水量を觀るに六月・九月との二つの最大が認められ、前者は梅雨期、後者は颱風襲來期に當るもので、後者が最多量なるは日本海沿岸を除いた本州に共通なる現象である。この初秋の暴風雨に伴ふ降雨は河川の暴漲を起すから、軍事上の政策から橋梁の設けてなかつた明治以前の東海道中には河止めといふ不意の交通の遮斷がこの頃に常に起り、鐵道の敷設後と雖もしばしば鐵橋の流失、線路の破壞等のために被つた障礙は稀少でなかつた。

本地方は本州の幅の最も廣い部分を占め、河川の水源は、遠く東海道の山嶽地にあるから、水量が豐富にして水力電氣の原動力に役立つが、今茲に見た如く降水多量の月が夏季に偏つて、冬春の交に渇水の虞がないのではない。この缺點には水力電氣企業者の愼重なる考慮を加へねばなるまい。

氣候とその影響　氣候の動植物及び人類の生活に及ぼす影響については、本地方と隣接地方との間に特に取りたてゝいひ得るだけの對照はないが、農業物では關東地方と共通なる臺地の廣く發達することゝ相待つて、水田よりも畑地が多く、麥・棉花・砂糖・茶・果樹等の栽培に適し、これ等の產物の多くが輸入品に壓倒されるに至つた後に、茶畑のみは臺地及び緩斜面の大部分を占むる現狀となつた。

聚落に對する氣候の影響は、鐵道沿線農家の景相に現はれ、降水量の多い美濃平野には鬱蒼たる杉立木を環らした宅地が多く、これを遠望すれば殆ど家屋の見えない杉林の外觀を呈する。尾三遠の地方では農家の周圍に濕潤を好む杉の木は漸く減じ、天龍川兩岸の農家には槇の木が多く、行儀よく方形に切り込まれた槇の生垣はまことに綺麗である。大井川の東に至れば洪涵地に新に開いた農家が兩三戸づゝ孤立し、その周邊に環らした濶葉樹の立木は冬と夏と景相を一變するのである。

植物分布の高度による變化は富士山の裾野に明で、御殿場邊の雜木林の上に針葉樹林が來るのは登山者の注意を惹くところである。これは高度の增加するに從ひ氣溫が遞加し、これと共に大氣の濕度が增加するためで、富士山中腹に棚引く雲の層はこの關係で生じ、千數百メートルの高層における水分の凝集は疎鬆なる火山砂礫に滲み込んで冷水の伏流ともなる。

第四章　中部及び北陸地方

總說

區域　本章に敍述する地域は中部地方の中、東海道沿岸及び美濃を除き、東山道の飛驒、信濃、甲斐三國を含む。その行政區劃との關係は左の如くである。

山梨縣	甲斐國	九郡	
長野縣	信濃國	十六郡	
岐阜縣	飛驒國	三郡	
新潟縣	越後國	十五郡	
	佐渡國	一郡	
富山縣	越中國	八郡	
石川縣	加賀國	四郡	
	能登國	四郡	
福井縣	越前國	八郡	
	若狹國	三郡	

この外に三道に跨る分水界たる日本群島の最高峻地帶たる謂はゆる日本アルプス地方を、これ等の政治區劃に無關係に記載し、この地域における地勢及び風景の特徴を明示する。

中央地方の特色　この地方の地勢上の特徴の第一は、本州の最も幅の廣い部分を占め、日本海と太平洋とに分流する諸大川の水源地たることである。そしてその分水界を成す山嶽は、東北部では越後山脈が東北から西南に走り、これを横斷する河流は會津盆地から流出する阿賀川のみである。その西南端から南走する分水界には、草津・白根・淺間等の火山が蟠崛し、やゝ確夷して確氷、十石等の東西通路を成す諸嶺を通じ、再びその南に崛起して關東山系の甲武信嶽となる。この部分では越後東半の諸川と利根川との分水界を成し、朝日・飯豐・甲武信等の花崗岩の秀峰を有する山塊が火山の諸尖峯を挺いて虎踞してゐる。

甲武信嶽から西は諏訪湖・鳥居峠の近傍を通じて西に北緯三六度線に沿うて、白山の方向に引いた一線がほゞ主要分水界線に一致し、むしろ秀峰を避けて西走する傾向を有してゐる。この趨勢は地圖を披いて觀れば瞭然となる。

地文上の第二の特徴は殆ど三、〇〇〇メートルに達する高峰が、富士火山帶の西邊に壁立し、概し

て西に緩斜した地塊の東端に並列することで、その北部には氷河の浸蝕によつて生じたと想はれる槍ケ嶽（針峯）とカールとの連續がある。謂はゆる日本アルプスの名稱は、この種の鋭尖なる峯巒に對してふさはしい。木曾駒ケ嶽・甲斐駒ケ嶽等ではこの特色はやゝ薄らぎ、惠那山塊は屋狀を成し、赤石・白根の諸山脈は聯續した連嶺を成し、共に更にアルプス固有の峭峻の特色を缺く傾向がある。しかれどもこれらの山嶽には針葉樹林と濶葉樹林が密生して、秋冬の候の木曾街道には緋色、黃色思ひ思ひの色彩を呈する。後者と暗紺綠色の前者と反襯對映する美觀は、旅客に忘れ難い印象を與へる。

第三にこの高峻なる山間に深く刻み込んだ上高地・黑部川・木曾・天龍の諸峽谷もまた他の地方には見られぬ幽邃の別天地で、その過富の流水が、或は渟滙して碧潭となり、或は奔注する激湍となつて怪石奇岩の間を縫ふ奇觀に至つては、特に精神を爽然たらしめるに足る。

これ等の山水の風景は、この高山地方においてのみ見られ、何人も造化の妙工に驚嘆せざるを得ぬ。

かくの如き高山幽谷により互に隔絕された箇々の山間盆地を成した平地は、また第四の特色として擧ぐべき景相を呈し、甲信飛三國は何れも大小の盆地に都邑が發達し、その中諏訪湖盆地は海拔の最も高いところにあつて、四方に分流する諸川に對して心臟の位置を占め、その位置の關係もまた人文發達の上に頗る面白い歷史を有し、諏訪神社がこゝから分れて全國に祀られてゐるのは偶然でない。

この盆地は本州の幅の最も廣い部分の中央にあつて富士・天龍・犀・千曲の諸大河の上流はこれを中心とした放射狀の溪谷を成すために交通の中樞となり、武田信玄が甲府盆地に興つた時に、こゝを根據として殆ど信濃一圓を攻略し、更に上野・武藏・相模・駿河・遠江・參河・飛驒の諸國に進出したのは、最も有效にその地勢を戰略上に應用した好例である。

北陸地方の特色　北陸道の第一の特徵は、東山道の日本海側の斜面にして、若狹と越前の西部とを除いた大部分は、美濃以東の山嶽の北及び西に向つて陵夷した地勢を成すことで、近畿奧羽兩地方の中間にある位置の關係は東海道と趣を同くし、近畿に古く開けた文化の一支流はこの交通線に沿うて北方に傳播した。崇神天皇の時に派遣された四道將軍の中、北陸道に向つた大彥命が東海道に向つた武淳川別命と出會つたので會津といふとの傳說は、地名語源の說明に止り、必ずしも史實としては受け取れぬが、古墳時代の文化が日本海岸に沿うて頗る古く北方に廣がつていつたことは疑れない。

この日本海沿岸の地帶の一般に低平なところが多いことも、また東海道と共通の特性である。鈴鹿山脈に相當するのは敦賀灣の東に壁立した海岸で、越前・加賀兩國は勢尾參遠四國に相當し、この地方にゐた越人は蝦夷族の中で最も古く熟化したのも、この四國と同一の地理的位置の關係の反映と見られる。

遠州の南に突出した相良半島に相當し、しかも遙に大なる延長を有するものは能登半島で、かれに

佐夜の中山ある如くこれにも倶利加羅峠がある。たゞ異るのはその東に大井川下流の平地に比して遙に廣大なる越中の一大平野が展開すること、その東の親不知の險岸が燒津・靜岡間の海岸に比して更に峭峻であることゝである。しかれどもこの險岸は北陸道の陸上交通に對して大なる脅威であつても、越後から西南に向ひ近畿地方に達するには必由の徑路にして、戰國時代に長尾氏が越後に起つてからは、屢々この交通線により越中に出兵した。

越後は富士火山帶の北端に當る妙高火山の噴起した姫川・荒川間の西頸城山地と、廣い信濃川の溪谷平地及びその兩岸の第三紀丘陵より成る中部と、信濃川・阿賀川下流の大平野の北に向ひ漸く狹まつた北部に區分され、その北端の村上町以北はまた險岸となつて鼠ヶ關（念珠ヶ關）が羽前に通ずる關隘を成してゐる。この交通線の意義は、戊辰役に當り官軍は長岡藩の强兵と激戰を交へてこれを破つた後に、鼠ヶ關で鶴岡藩兵に喰ひ止められた事實によつて知れる。

海岸線の特色　地圖を披いて直に氣のつく著しい第五の特徵はこの地方の海岸線の形狀である。近畿地方に接した若狹とその東の敦賀灣までは深い大小の灣入を見るも、この西部海岸を除いては、一般に出入少く、僅に能登半島の突出によりその單調が破られてゐるのみで、その他は全く直線狀を成すことが最も注意を惹くのである。

この輪廓は海岸に接する山地の地盤を成す堅い古期岩層の存在せずして、海波に打破され易い第三紀層がその大部分を占める結果で、海流に押し流された土砂が削られた低い丘陵地に續いて、直線狀に走る海岸を造つたものである。河北邑知の諸潟もまたその結果として生じた。

この海岸線の單調なることは帆船のみの行はれた明治以前の海上交通に對しては頗る不便なるを免れぬ。從つて敦賀以東において帆船の避難し得る港灣は甚だ少く、能登半島の輪島は伊豆半島の下田と同じ位置を止むるも、この海岸に灣入なきため、東風及び南風を避け得るのみで、加賀・越前の海上を航行する帆船は西岸の小さい福浦を唯一の避難港とした。

越前三國・加賀金石・越後柏崎・新潟等も、この不便は共通にして、鐵道開通以前に沿岸地方の發達が阻害されたことは多大である。但し能登半島の存在は幾分かこの缺陷を補ふもので、その突出により西北風から掩護された富山灣の西邊に、七尾、伏木の兩港を抱いてゐる。輪島の南に在つた禪宗本山總持寺が、鎌倉時代に興つて近頃まで地方繁榮の一中心となつてゐたのもまた沿岸航運の關係が興つて力あつたと想はれ、この半島の日本海岸における地理的意義を暗示するものである。

氣象その他の特色　以上列擧したところよりも更に顯著なる東海道地方との對照はその氣候上の特徵で、その冬季の北西卓越風により生ずる雨雪量の多大なることは、他のあらゆる地文現象よりも北陸地方の生活に影響するものである。冬季三ヶ月に互る積雪により農民の屋外作業の妨げられる結果は、一面には家内操作を主とする絹織物・陶器・漆器・製藥等の發展となり、福井の羽二重・九谷

燒・輪島塗り等の物産が名を海内に獲るに至つた。

春季に飛驒その他の高山地方から來る南風は、アルプスの山下しフェーンと同じく、乾風であるが、その吹き募る時には屢々大火災の起る危險がある。三四月の候に日本海沿岸の都邑の殆ど全滅せんとする悲報が屢々傳へられるのはこの結果で、越中の平野で孤立農家が散布し、二三百メートルの等距離に宅地を置き、杉樹を家屋の周圍に繞らした特殊の田園風景もまたこの慘害に對する警戒が、知らず識らず原始的の莊宅式の居住を今日に維持せしめたらしい。

この他になほ擧げねばならぬのは、越後の石油と佐度の金鑛とで、特に前者は第三紀層丘陵地に井櫓が帆檣の如く林立する奇景を現出し、油井の汲み盡されると共に移動し、魚津の蜃氣樓に比すべき變化が起りつゝある。これに反して後者は德川幕府三百餘年繁榮の後その命脈の今なほ存續する富鑛で、越前・加賀の温泉と同じく第三紀火山活動の遺響である。

甲斐地方の戰略地理

戰略上から見た甲斐國　甲斐國は新羅三郎義光以來甲斐源氏が居住し、殊に戰國時代には武田氏の據つて勢威を振つたところで、地勢上四周山を繞らし、實に天險の要害地である。卽ち甲府盆地は西に赤石山系の峻嶺が壁立し、北は八ヶ岳火山脈が蟠崛し、東北は甲武信山から西南に尾を曳いた御嶽山塊があり、東は大菩薩嶺が南北に走り、南にはその續きの御坂山脈があつて、文字通り四塞の地を成し、敵軍の侵入を防ぐに便なる要害堅固の地區である。そしてこれ等の間にあつて交通線と稱すべきは、甲府を中心として東に向ふ青梅街道と甲州街道、赤石山系の東北麓と八ヶ嶽裾野との間を西北に向ひ諏訪湖盆地に通ずるもの、若神子から八ヶ嶽の東麓を北進して信農東南部に入る佐久甲府街道、鰍澤から富士川に沿ふ甲駿街道、甲府から正南に向ひ御坂山脈西部の横谷の分水嶺たる女坂を越える甲駿中道、甲府から御坂を越えて河口山中兩湖畔に沿ひ、富士東北麓より籠坂峠を降り御殿場に出る沼津街道と、これだけで、つまりこの要路を防備さへすれば足りるのである。

他にも間道は諸所にある。例へば東京より甲府盆地に入るには、荒川の上流秩父盆地から雁坂峠を越えて笛吹川の上流に出る交通線及び大菩薩峠を越える捷徑等あるが、いづれも二、〇〇〇メートル內外の高度を有し、小勢をやることはできても大軍を動かすことはできない。

ところでこゝに、もう一つ考ふべきは、甲斐國が謂はゆる甲府盆地のほかに桂川及びこれに合流する鶴川の流域たる郡內地方を有して、この兩地帶から成つてをり、しかもその郡內が國外及び甲府盆地內との中間地帶をなしてゐることである。卽ち大菩薩峠・笹子峠・御坂峠の間に、連亙する障壁によつて掩護された甲府盆地から、東及び東南に出動するには、この地帶を通過するを要し、關東地方から盆地內に攻め入らうとするにもまた、この地帶を占領するに非ざれば如何ともし難い。これを換

言すれば、郡内は兩勢力の緩衝地帶でもあれば、また戰時の必爭の地帶でもある。

戰略上中間地帶の意義　この中間地帶の戰略上における意義を探らうがためには、先づこゝに起つた戰鬪の性質と目的、及びこゝに配置された豪族の位置を檢討することが必要である。

まづこの地帶では東端にある上野原と、南邊にある籠坂峠とが、東方へと南方への出口として最も重要性を帶びたもので、中でも上野原は都留川の合流點を瞰制する臺地の上にあり、極めて樞要な地點で、足利時代加藤入道梵玄は、織田信長の後援者として、逸見有直と甲斐國守護職を爭うたこともある。

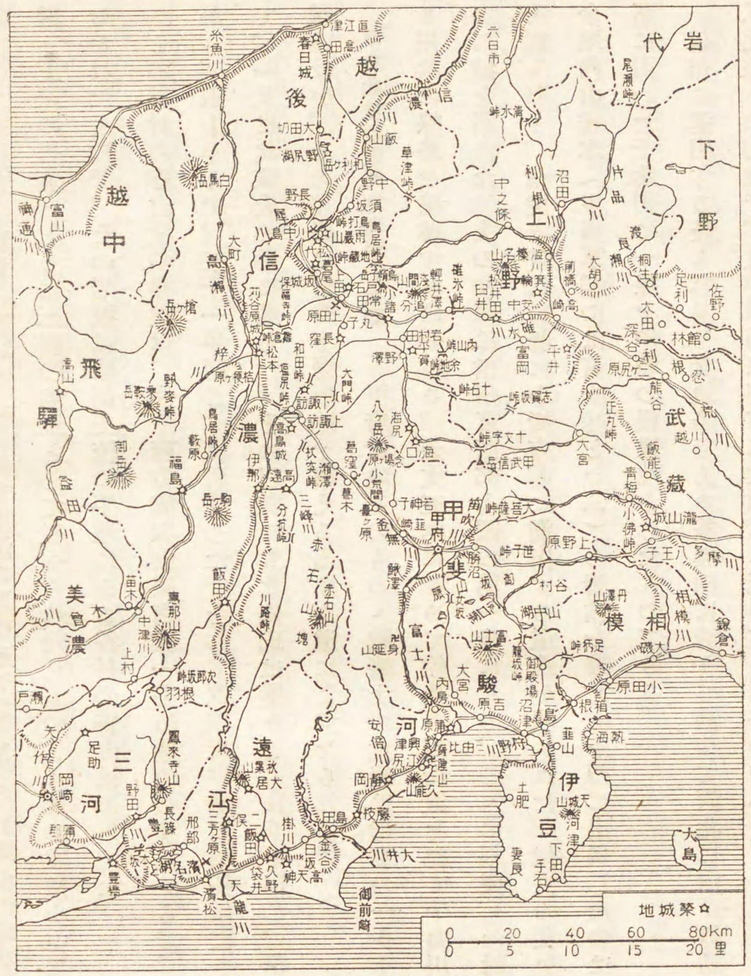
戰國時代に入つてからは、上野原は武田氏の支族大井氏の居城となり、永正十二年大井信達は信虎の兵を引きうけてこれと戰つた。その後、大井氏は今川氏親の援兵を乞うたが、終に落城して、この城は小山田氏の所屬に歸した。大永四年信虎が管領上杉憲房と對抗するに當つても、津久井郡に出動の際こゝを經たことは疑ひない。要するにこの地は、甲斐一圓の東方に進出する必要の門戸であり、また同時に侵入軍を喰ひ止めるにも固守せざるべからざる要地であつた。殊に交通上から見るも、相模川の水運はこゝまで通ずるので、忽諸に附するを得ない要地である。

葛野川の合流點にある猿橋も、甲州勢の東進するに當り屢々足溜りとなつたところで、應永二十三年、成氏の横山に出動した時に、武田信長はこゝに出で、大永四年信虎もまた一萬八千の甲州勢を率ゐてこゝに出た。猿橋の西にはまた幹支兩流の間に形勢を占める岩殿山の城砦があつて、駿河の久能・上野の吾妻とともに三所の名城として數へられた。もつともこの城は小山田氏の頃要害城としておかれたもので、その居城は桂川上流の平地にある谷村の勝山城であつた。

この谷村の勝山城の存在は、全く西方御坂山脈南麓一帶防備の必要上からで、小山田氏は天文元年から天正十年まで、五十一年間こゝに居住した。そして武田氏が織田信長に亡されるとゝもに沒落して、一旦は北條氏の手に落ちた。その以前にも北條氏は屢々こゝに兵を出し、早雲は五回まで侵入を試みたが、その徑路は何時も籠坂峠を越える沼津街道によつたらしい。

甲府盆地の戰略地理學的意義　甲府盆地そのものゝ戰略上の意義は信玄の一生十九度の大合戰における用兵の線路を追跡すれば知れる。天文五年に初めて佐久甲州街道を經て千曲川の上流に侵入し、海ノ口城を陷れた信玄の初陣は信州東南部占領の第一歩にして、こゝに割據した村上氏の部將平賀源心を討ち取り、信虎の時代に既に小諸方面に進出する道路が開かれた。信玄の父を逐ひ國を奪つた後に余地内山碓氷（甲陽軍鑑には笛吹峠といふ）の諸嶺を越えて上州に出馬したのは、この海ノ口から小諸に引いた千曲川の一線を作戰の根據地としたものである。

信州に進出する最も容易な交通路である釜無川に沿うて溯つて西北に向ひ諏訪湖盆地に出る一線は爪先上りの勾配で、且つ諏訪は四方に放射狀に流出する溪谷の中心を占め、こゝには諏訪氏が占據し



第三十一圖　武田信玄交略要圖

てゐたから、これを撃ち破つて初めて信州の東北西三面に向つて兵を出すことができた。信虎の逐はれた内亂に乘じて諏訪頼茂の小笠原村上等を語らひ甲府盆地に侵入したのもまたこの通路で、韮崎合戰は信長の桶狹間合戰に比すべき

守勢の苦戰であつた。

釜無川溪谷は信玄の信州進出の作戰上には常に最も重要なる作戰線を成し、大門和田兩峠を越えて小縣郡に通じて村上氏の領分に侵入し得る。またこれから南に高遠を越えて伊那平に出で、西北鹽尻峠を越えて松本平に出ることもできる。

信玄は先づ小諸から上田の東に當る海野平に進出して村上氏を攻め、一方諏訪からも屢々侵入し、終に村上義清を上田原の決戰に撃ち破り、佐久・小縣・埴科三郡を占領し、續いて保福寺・鹽尻兩峠から松本平に侵入して小笠原氏を滅し、終に村上義清の復國を圖つた上杉謙信と川中島で相見ることとなつた。また高遠城を陷れて伊那平を占領したのは遠參兩國に進出する第一歩にして、この天龍川上流の溪谷は郡内と同じ役割を演じた。信玄の歿後に織田勢の侵入に當つて信忠が先づ伊那平を占領して諏訪から甲府を襲うたのも、此の關係を語るものである。

甲府盆地から東海道海岸に出る最短の交通線は富士川溪谷とその東の天孔山脈の東麓に沿うた女坂との兩線であり、信玄の晩年今川氏眞を驅逐して遠江に進出す時には、これに沿うて降つた。

第五章　近畿地方

總說

行政區劃　地勢上からは近畿地方は畿内の山城・大和・河内・和泉・攝津五國の外に東海道の伊賀・伊勢・志摩三國、東海道の近江、北陸道の若狹と越前西部、山陰道の丹波・丹後二國、南海道の紀伊を含む名稱たるべきも、行政區劃の關係から北陸道の若越二國を除き、これに兵庫縣に屬する播磨・但馬・淡路の三國を加へたものを指すのが普通である。

本書は第三章東海道地方に伊賀を除き、紀伊の二郡を含んだ三重縣一圓、第四章中央及び北陸地方は福井縣の中に若狹・越前西部、第六章中國地方に播但二國、第七章瀨戸内海及び四國地方に淡路を載せることゝしたので、本章の近畿地方に載せる地域は、左の十國を含み、二府五縣に跨る。

京都府　山城、丹波（五郡）丹後

大阪府　河内、和泉、攝津（二郡）

兵庫縣　攝津（三郡）丹波（二郡）

奈良縣　大和

三重縣　伊賀

滋賀縣　近江

和歌山縣　紀伊（七郡）

畿内または近畿の畿といふ語は、支那では天子所領の地の意味に用ひられ、近畿とは帝都四近の地域 Metropolitan Region といふことになる。故に現在東京が首府たる關係から見れば、明代に永樂帝が都を北京に遷してから、南北直隷省を置いた如く、關東地方を東畿地方、この地方を西畿地方と呼ぶのが適當かも知れぬ。

地理的位置の特色　近畿地方地理上の特色の第一は日本群島の中央に位することである。わが帝國二千五百餘年の歷史が、明治二年東京行幸までこの地方を舞臺としてゐたのは、その位置の關係がしからしめたのを否定し得ない。

神武天皇東征の御師が初めて難波津に着いて以來、歷代の都がこの地方に置かれ、これを中心として大八洲が次第に皇化に潤ひ、東北は蝦夷千島、西南は琉球臺灣に及び、古から屢々武威の及んだ朝鮮半島までも終に版圖に歸したのである。そして歷史上の事件のこの地方に演ぜられた舞臺としての價値は、主として西國の海上交通と、東國の陸上交通とに便なる位置の關係にあつた。特に重要なの

はその西方遠く東亞の大陸沿岸への交通に對する關係で、文化東漸の必由の途はすべてこの地方に集るのである。

海陸輪廓の特色　この地方の地理上の特色の、第二として擧ぐべき海陸により圍まれた境界の輪廓は、この關係を雄辯に語つてゐる。北邊は日本海に、南邊は太平洋に瀕し、なほ東邊に伊勢灣、西黎に大阪灣が入り込んで、木曾川と淀川との河口を連ねて斜に引いた一線以南の地方は、一大半島を成して南に突出し、特に大阪灣は瀨戸內海に通じ、その航路の終點は淀川河口の大阪である。

日本海に面する北邊もまた敦賀灣から宮津灣までの間は、本州の內邊において最も海岸線出入の頻繁なる部分で、これを除いては日本海岸に大船巨舶の繫泊に適する港灣がない。故にこの海岸は山陰北陸沿岸地方の交通上、斷然他の地方に優越し、朝鮮半島の東南端とわが群島との間に上古沿岸航海の行はれた頃から、大陸交通の第二線として、瀨戸內海の航路と共に頗る重要であつたのは當然で、近江に來た三韓人の敦賀を經たのも殆ど疑を容れぬ。

しかれども近畿地方が政治・經濟・文化の焦點となつたのは、位置と輪廓との外に第三の要因として地勢を擧げねばならぬ。

地勢の特色　近畿地方の地勢は確かに特色の第三といひ得る。九州と同じく內中外の三帶の山嶽から成る南北に延長する地域であるのみならず、東北・西南・東西及び南北に走る構造線の交叉により、大小の地塊と地溝とが發達してゐる。特に紀ノ川と櫛田川上流とを連ねた紀伊半島を東西に橫斷するものと、淀川及び琵琶湖を連ねた東北・西南に走るものとは顯著にして、これよりその西北の丹波高原及び南の半島との間に、地勢の全く異つた三角形の一つの地區を劃するのである。

この地區は主として、中帶の瀨戸內海凹沒地帶の續きと看做し得るもので、內海の東に接して、攝河泉三國の大部分を含む大阪平野が展開してゐる外に、山城大和の間にも豐饒の地溝平野があり、また琵琶湖盆を圍繞する近江の湖岸平地及び伊賀高原があり、更にその東に伊勢灣西岸の低平なる臺地及び平地があるのである。

大和及び山城が帝都として成立したのは、これ等の平地の存在によるもので、洪涵地の大部分がなほ聚落の存立を困難ならしめた當時にあつても、人烟の最も稠密な地區を成したのは、固より當然であつた。故にこの地勢が、近畿の今日の盛況を見る要因として重大なるは多言を要せぬ。

構造線の影響によつてできた交通線がまたこの地方の、本州の陸內交通の中心の價値を決定するものである。その第一は淀川及び琵琶湖盆を連ねた西南から東北に走る一線で、兩者の存在は近畿の近畿たる資格の一斑を意味する。

交通上より見たる淀川溪谷の意義　そして大阪灣に開いた河口から東北に向ひ、山崎を過ぎて伏見まで四四キロの間、河航の船舶を通じ得ること實に明かである。平安朝の頃には、朱雀大路の南端は下

鳥羽に達して、與渡（淀）の津が河津として重きを成し、下流では江口が海舶から河船に遷る要港として榮えてゐた。

この河流に遮斷された畿内四ヶ國への往還の必要は、宇治と山崎の架橋工事が奈良平安兩朝の昔に起り、その山崎橋は後世に至り廢せられて纔に男山の麓に橋本の名を留めてゐるが、巨椋の池の湖盆に溢れた宇治川の亂流を束ねた山崎の地勢が、最も渡河に便利であつたことを想はしめる。

人口三萬一千を有する伏見が、豐臣氏の桃山築城の前後に起つたのは、この航路たる位置を利用した結果で、爾來三百餘年に亙り常に河津として殷富を續けたのは偶然でない。

交通上より見たる琵琶湖盆の意義　琵琶湖盆もまた陸上交通に對して頗る大なる意義を有してその南端は海拔僅に一五〇メートルの逢坂を隔てゝ京都・山科・伏見に通じ、北邊には海津から愛發の關址を過ぎて敦賀に出る湖西の北陸街道を初めとし、これに斜交する鹽津から越える新道、長濱から敦賀灣の東岸に引いた直線に沿ふた椽の木峠、及びこれと椿坂で分岐する北陸鐵道線の如き、今津から西北西に引いた構造線に沿ふて小濱に通ずる江若線の如き、何れも日本海沿岸への最も容易な通路として利用されるものである。また湖盆の東邊に連亙する三國山塊及び鈴鹿山脈には、後者の北端に不破山門と呼んで區別すべき低平なる中山道の通路が開け、南端に鈴鹿峠と加太峠とが、京都と奈良から伊勢中央部に出る東海道の通路を成してゐる。

これ等の諸路の中、北東に通ずるものは何れも約五〇キロの湖上の航路によつて陸路を短縮し得るから、鐵道の開通前には、湖運は現在想像し難い重要な交通機關となつてゐた。東岸における朝妻・筑摩が遊樂地として三百餘年以前まで名高かつたのは、その北國街道の船着場であつたからである。

これ等の考察によれば、琵琶湖上の交通は淀川の河運と共に、瀨戸内海の海運・交通の延長と見られるもので、交通機關の幼稚だつた時代にあつては、その人文地理學上の意義は特に大なるものがあつた。列聖の間に一段輝いて偉業丕績を顯揚せられた天智天皇が、都を滋賀に置かせ給ふたのはその現實の證左としてよい。

歴史地理上の丹波高原　丹波高原が琵琶湖盆の如く華々しくないのは、山地の性質のしからしめたのであるが、海拔高度の小にして、小規模の農業經濟が現今に比して重要な地位を占めた中世以前にあつても、山を負ひ陽を受けた山間の小平地が、現今よりも遙かに大きな經濟上の意義を有してゐた。王朝の丹波・丹後が上國の中に編入された理由はこれにある。山陰沿岸の大陸との交通の盛であつた上古にあつては、この山地を横斷する割合に低い峠しかない陸上交通線もまた頗る注意すべきものがあつた。丹後の西北隅なる久美濱の小濤湖が、先史及び原史時代における要津であつたことは、王莽の貨泉が發見された以外に、石器とともに鐵鏃の出土を見るのでこれを察知し得べく、同じく因幡地方まで砂丘から鐵鏃の出る事實とを合せて考ふれば、金屬文化の發達史上には、山陰道北部は寧

ろトップを切つてゐたかの觀がある。この鐵鏃の原料は魏書に從ひ、三韓の重要產物であつたとすれば、勿論この沿岸交通によつて傳來したとすべきであるから、從つて現在の兩丹地方を觀て過去の狀況を推斷せんとすれば、全く眞相を失ふ筈である。

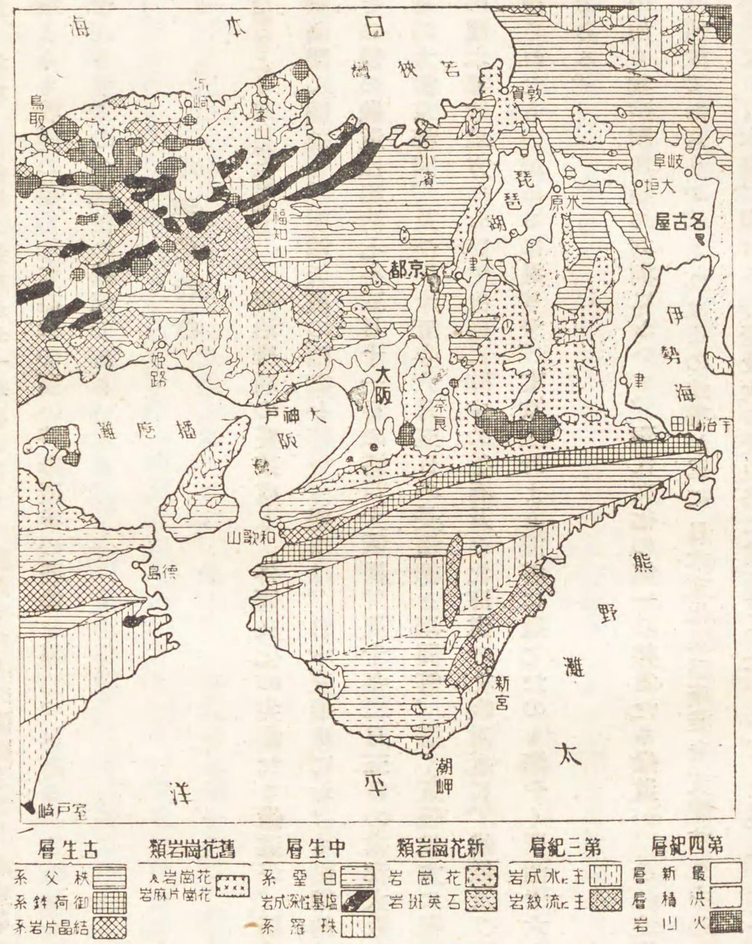
紀伊半島の地文に及ぼした影響　紀伊半島ではこれと趣を異にし、太平洋に突出した山嶽地にして、海岸もまた平地に乏しく、僅に紀ノ川その他二三の溪谷に狹い平地があるのみである。その結果は沿岸の漁村が黑潮に乘つて來る魚族の捕獲を主生業とすることゝなり、その冒險生活は遠地の移住を物とせぬ氣質を養成し、西は九州東岸まで、東は房總半島まで、更に北方北海道までも進出した。「沖の暗いのに白帆が見える」の俗謠に名を留めた紀文大盡は、この海上冒險の代表者で、明治開國後に率先して北米・南洋等に多數の海外出稼者を見るのも、由來するところの遠いことを想はしめてゐる。

しかれども紀伊半島の地勢と共に氣候を考へねば、過去及び現在の眞相を明にし難い。半島が黑潮の怒濤に洗はれて、白い浪の花を散らす潮ノ岬から西北の地方も、その東北の熊野地方も、濕潤な空氣が山地に凝集するから、大小の河流みな水量に富み、深岨な溪谷の網目密に發生し、高度大に急斜面の多いところには、鬱然たる針葉濶葉を含む森林が被覆し、低い緩斜面にも雜樹灌木が繁生して、上古から木ノ國と呼ばれた面目は今も變らぬ。たゞ人力により、この天產を極度に有利にするために、柑橘・梅樹・櫨樹等の栽培が年一年盛となり、除蟲菊などの園藝までも成功を收めることになり、林業よりも收穫の早くして能率の高い特殊產業の發達を促しつゝある。この如く山の幸が海の幸を凌駕せんとするのが現在の狀況である。

地理的特徵

鐵道交通史より見た近畿地方　明治維新の盛業成り、外國文化の尖銳たる鐵道が、明治五年九月十二日新橋横濱間に開通し、明治天皇の臨御を仰いだ盛事は、日本交通史における劃期的の出來事であつたが、その後の鐵道は明治七年五月十一日の神戸大阪間、同十年二月五日の京都大阪間、同十三年七月十四日の大津京都間、及び同十五年六月五日の長濱柳ヶ瀨間等、悉く近畿地方に敷設されたのである。この間本邦他地方においては僅に陸中の釜石及び北海道の札幌附近に、鐵鑛及び石炭の運搬用鐵道の敷設されたものがあるに過ぎず、東京上野より熊谷に通じたのも漸やく明治十六年七月二十八日のことである。

かくの如く我が國興隆の初期において、現代文化の第一功勞者たる鐵道が、この地帶に特に集注されたのは何故であらうか。それはこの地帶が單に日本文化及び產業を支配する中心たりしのみならず、太平洋より日本海に出づる最捷最大の交通路に當つてゐたからである。卽ちこの交通路の開發



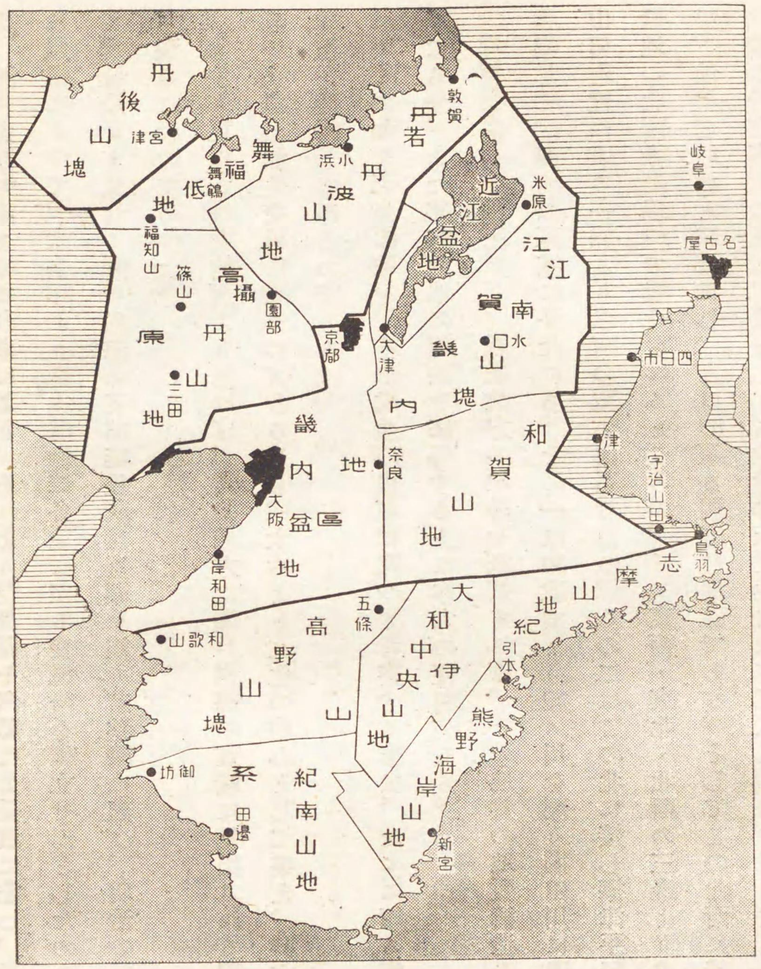
第三十二圖　近畿地方地質圖

は、神戸より大津までは汽車により、それより琵琶湖を汽船にて長濱に達し、長濱より敦賀までは更に鐵道によつて、太平洋より日本海沿岸各地に至る交通路を確立せんとしたのにある。かくの如くして交通路より見たる瀬戸内海の東部延長は琵琶湖を經て若狹灣に延び、明治の初年に先づこの計畫が實現されたのであつた。

しかも更にこれを他面より見れば、この地方は瀬戸内海の東端に見出される曠漠たる平原にして、且つ上述の如く交通に惠まれてゐるから、太古より文化の中心として榮え、將來も繁榮すべき必然の位置を獲得してゐるのである。

かくの如き天與の地を、その成生の根源に溯つて考察する事は、たゞに頗る興味あることであるのみならず、また將來大地の理法を修得する上に多大の便利がある。

近畿地方の四大地形區　近畿地方の地勢を概括すれば、その地盤の地質構造と地形上の特異性とを考察して、四つの區域に分たれる。その一は和歌山より紀ノ川を溯り櫛田川に出でその中流より宇治山田附近に至る一線より以南の紀伊山系である。その二はこの北に接し攝津平野・京都盆地及び近江盆地の北西緣を以つて境せられるところの、ほゞ東西・東北・北西の三邊より成る三角形をなす地域で、地壘と地盆とが錯雜し、人口の頗る稠密な地區である。そしてこの北西に接する第三の地域は謂はゆる丹波高原に屬し、主として古生層の丘陵性山地が起伏し、加古川・武庫川及び保津川諸川の上



第三十三圖　近畿地方地形區分圖

流部、或は由良川の沿岸に狹い平野の僅に拓けた地帶がある。第四の地域は由良川（大雲川）の下流が示す南西線によつて境され、これより北部に位する臺地性小地區で、大江山山塊及び丹後半島より

成り、花崗岩を基盤とする山陰道の東方延長部に當る地域である。

紀伊山系

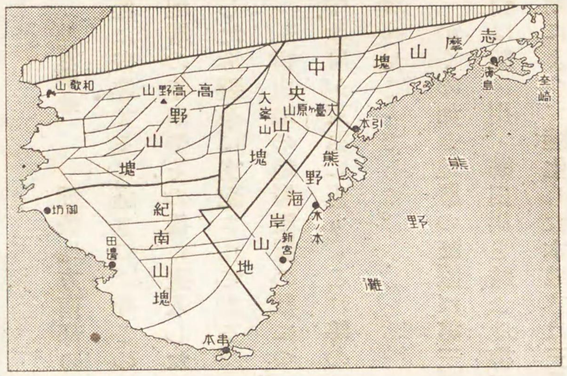
地質構造　近畿地方南部の一地形區たる紀伊山系は山岳の重疊し、平地は諸川の海に注ぐ附近に僅に發達するに過ぎぬ。今この山地の地形を構成する要素を仔細に檢するに、一は古生代及び中生代地層の走向やその後に迸入した火成岩等の岩石分布の狀態に支配され、第二にはこれより遙に後に發した垢裂系に支配されてゐる。

紀伊山地の地層配置の狀について特に目立つのは、地質圖に示す如く結晶片岩・輝岩・古生層及び中生層が東西に走り、これ等の地層の中軟かいものが容易に侵蝕されて、多數の河川に東西の流路を與へたことである。

かくの如き地層の配置は第三紀以前に行はれた褶曲運動の結果として生じたもので、その最初の變動は紀ノ川・櫛田川と結ぶ地帶以北に花崗岩の迸入が起つた古生代末葉の地殼運動期である。この變動によつて陸化した本地方は三疊紀を通じて陸地として存在したものと認むべく、古生層地層の南側に直接して珠羅紀層が分布するところの大勢を示し、更にその南に白堊紀層が分布してゐる。しかるに第三紀層は紀伊山地の骨骼をなすこれ等の地質が生じたる後、山地の邊緣部に凹地の生ずるに從つ

て生じたる形勢を示してゐる。紀伊山地の南部に分布する白堊紀層の時代は未詳であるが、和泉山脈に分布する和泉砂岩系は上部白堊紀に屬し、地殼變動に依つて生じ、内海に堆積したものたることを物語り、また紀伊山地の地層は大體南に傾斜するに拘らず、勝浦の附近において古生層の南に下部白堊紀層が分布し、その南に再び古生層が來り、更にその南に珠羅紀層が廣く露出し、覆瓦構造の存在を暗示し、宛然白堊紀中頃の大變動を物語るかに見える。

また火成岩について、これを見るに、山地の中央部の石英斑岩の大峰大噴出塊があり南北に延長し、南部には第三紀の流紋岩の流出が行はれ、それぞれ地形上に著しい特徴を與へてゐる。依つてこれ等の地質構造によつて支配された地貌上の特色に從つて、この地方の地形區を分類すれば北西部高野山塊、南西部の紀南山塊、中央部の大峰・大臺ヶ原山塊、南東部の熊野海岸山地、北東の志摩山地に區分することが出來る。次にこれ等の地形區の箇々について記載する。



第三十四圖　紀伊賀山系地塊區分圖

高野山塊　今紀伊國北西部なる箕島より起つて、東方に蜿蜒する長峰山脈を追跡すれば、次第に北東に彎曲して高野山に達する特異なる地貌を觀察することが出來る。同種の現象はこれより南なる日高川北岸の山地より、北東なる大和國吉野山東方の吉野川沿岸に至るまでの間に現はれ、顯著な地貌上の一特性を示してゐる。しかし乍らこの地方は二十萬分の一地質圖の外、未だ十分な地質圖の作製されたことのない地域であるから、現象の原因を明言することは出來ないのであるが、たゞ地貌に現はれた彎曲の大勢より判斷すれば、第三紀末以後の地塊運動と同時の斷層にはあらずして、褶曲期に生じた衝上斷層の方向を暗示するものでないのかと想像されるものである。

この地形は紀伊山系の中央に蟠居する大峰山以西、卽ち紀伊系北西部四分の一の地區に現はれた特性である。

高野山塊の各山梁部を仔細に觀察すれば、各所に狹い平坦面が觀察され、山地全體が嘗て准平原に近い老年期地貌を示したことは疑問の餘地のないところである。そしてその最も顯著に現はれたところは僧空海によつて發見された高野山である。一千年前唐より歸朝した碩學空海が、山上に前輪廻のこの廣大なる平坦面を見出し、こゝに金剛峰寺を開いた意志を忖度すれば、隱遁的なるとは反對にその氣宇甚だ宏大に、意氣の旺盛なりしを覺えるのである。

紀南山地　十津川以西日高川以南なる紀伊國南半の山地は珠羅紀・白堊紀層の分布する地域で、山梁は岩層の差分侵蝕によつて正しく東西に走り、その間に多數の西流或は東流する溪谷が發達して

ゐる。果無山脈及びその北に並走する山嶺はその特に著しいものである。しかし乍らこの外に北西・南東走する坼裂の方向や、北東・南西走する坼裂の方向は隨所に認められ、果無山脈より南方の地域では最早や斷じてこれを見逃すことが出來ない。紀伊半島南西海岸に見る海岸線の大勢は、實にこの種の構造線を暗示するものである。

十津川流路の大勢は北より南に及んでゐるが、五萬分の一地形圖について一々これを檢閲するも何等斷層の著しきものを發見することが出來ぬ。しかし乍らその南方延長は古座川の支谷に入り遂に潮ノ岬に及ぶのである。そしてこれより東方において地貌は全然その趣きを異にし、且つ岩層分布の狀態もまた甚だ異るのである。今地形圖につき地形變化の著しい線を辿つて地塊の區分を仔細に試せば、圖に示した如く北西走の構造線によつて分たれ、熊野神社の鎮座ます十津川の凹沒地は、熊野海岸山地の一部に屬することになるのである。

大峰山と大臺ケ原山　熊野川の上流をなす二大支谷、十津川と北小川との間に挾まれる大峰山は、紀伊山系の中央に位し最秀最峻の山地である。その北端なる山上ケ嶽（一、七一五）より大普賢嶽（一、七八〇・二）・佛經嶽（一、八一五・二）・孔雀ケ嶽（一、八二一）を經て釋迦ケ嶽（一、七九九）に至る直線距離は一五キロに及び、その南北に連るこれより低くして嶮峻なる鋸齒峰を加ふれば、蜿蜒三〇餘キロに亙つて聳立する一大連崗をなし、大和アルプスの名稱を獨り擅にしてゐる。この峻嶺は地質圖に見る如く、主として石英斑岩より成り謂はゆる大峰噴出帶を決定し、その地質構造より觀たる北方延長は遙に大和・山城兩盆地の東邊を劃する構造線に連つてゐる。

この東に北山川を隔てゝ對峙する山地は大臺ケ原山にして、その古生代石灰岩より成る連嶺は津可奈山（一、六五五）及び日ノ出嶽（一、六九五・三）となつて紀伊山地第二の高峻地區を形成し、これより一段低い大臺ケ原山は一、四〇〇メートル内外の高距を保つ丘陵性平坦面をなしてゐる。この波丘面は、この地域が今日の山地に隆起する以前に生じた前侵蝕輪廻に屬する面であることは勿論で、隆起後の溪谷は、南より東川となつてこの面を破壞すべく迫り、大臺ケ原南方の中ノ瀧が、今や丁度この新舊兩地形の境界線をなしてゐる。かくの如く觀察すれば、この第一・第二の高峻地區は既に前輪廻の侵蝕面上に、少くとも數百メートルの高距を持つた尖峰として聳えてゐたものであることもまた理解でき、當時の地貌が彷彿として眼前に展開するを覺える。

熊野海岸山地　熊野神社の鎮座ます十津川の大曲流點と本宮より潮の岬より北東、大臺ケ原の南東なる引本附近に亙る熊野灘西岸の山地は、主として流紋岩及び第三紀層より成り、北々東走する構造線の特に目立つ山地である。熊野灘西岸や北山川下流部もこの大勢を現はしてゐるが、五萬分の一地形圖（十津川）を展げて北山川東側山地を觀察すれば、北々東に延びた斷層崖があつて、迂餘曲折して深谷をなす瀞八丁の勝景と著しい對照をなしてゐる。この區域における構造線の他の顯著なる